

2014 年度

東洋大学審査学位論文

タイにおける観光振興に関する研究  
—観光政策評価と旅行者行動・評価分析—

国際地域学研究科国際観光学専攻博士後期課程

3年 学籍番号 4820120001

**KLAYSIKAEW KRAIRERK**

博士論文要旨

論文題目 タイにおける観光振興に関する研究

－観光政策評価と旅行者行動・評価分析－

東洋大学大学院国際地域学研究科国際観光学専攻博士後期課程

学籍番号 4820120001 KLAYSIKAEW KRAIRERK

## 1章 はじめに

### 1.1 背景

近年、世界の中で観光立国への関心向上にともない、多くの国で観光振興に取り組みられている。開発途上国であるタイで観光立国を目指して国家レベルの観光開発プランを策定したのは1970年代後半以降である。タイにおける観光開発は急激に拡大し、農業中心の産業構成から工業、サービス中心の産業構成へと移行するにつれて、観光の重要性が増大した。強大な国外からの需要と相まって急速な観光成長が高い経済的利益を生み出し、国民経済の増大、雇用創出、投資拡大などの効果を及ぼし、唯一恒常的な拡大を続けてきた主要外貨獲得源として注目されている。

近年、外国人旅行者数増加のために、観光誘致キャンペーンが実施されたものの、国内のタイ人旅行者に対する観光施策は少ない。そのため、2003年に「UNSEEN IN THAILAND」と称する観光誘致キャンペーンが実施された。しかしながら、観光振興に対する取り組みは、その時々を経済・政治の状況などからアドホックに実施されていると考えられる。その大きな原因として①供給側に相当する観光行政の果たす役割が大きいものの、政策評価が十分ななされておらず、統計資料環境整備が不十分なことや観光によるインパクトが定量的に計測されていないこと、②需要側である旅行者の旅行行動、ニーズ、行動に関する実態把握、データ整備が充分でないことが考えられる。

### 1.2 目的

観光振興を考えたとき、その本質である旅行者行動の実態把握が重要と考えられる。需要側の観点から旅行者の観光実態把握、来訪者の期待を充足しながら着地を整備し、魅力を創出するか、どのような評価特性を有するか明らかにすることが重要である。さらに、供給側の観点から観光政策によってインパクトを与える主体、規模やそのフローを考察することも重要といえる。

図1は、本研究の分析視点を示すものであり、観光に関するステークホルダーならびに旅行者の観光実態を整理したものである。様々な観光のステークホルダーが存在しているが、そのなかで本研究では、「供給側」における観光行政の変遷と、「需要側」における旅行行動の実態に着目する。

具体的には、供給側では、社会経済状況の時代変化を基づいた国の観光政策に着眼しながら取り組みの初期から現在に至る政府、自治体による観光行政の発展経緯を明らかにする。

また、需要側である旅行者の発地における観光行動の把握ならびに、観光地への来訪者の着地に対する評価特性の分析を行い、観光実態を明らかにする。

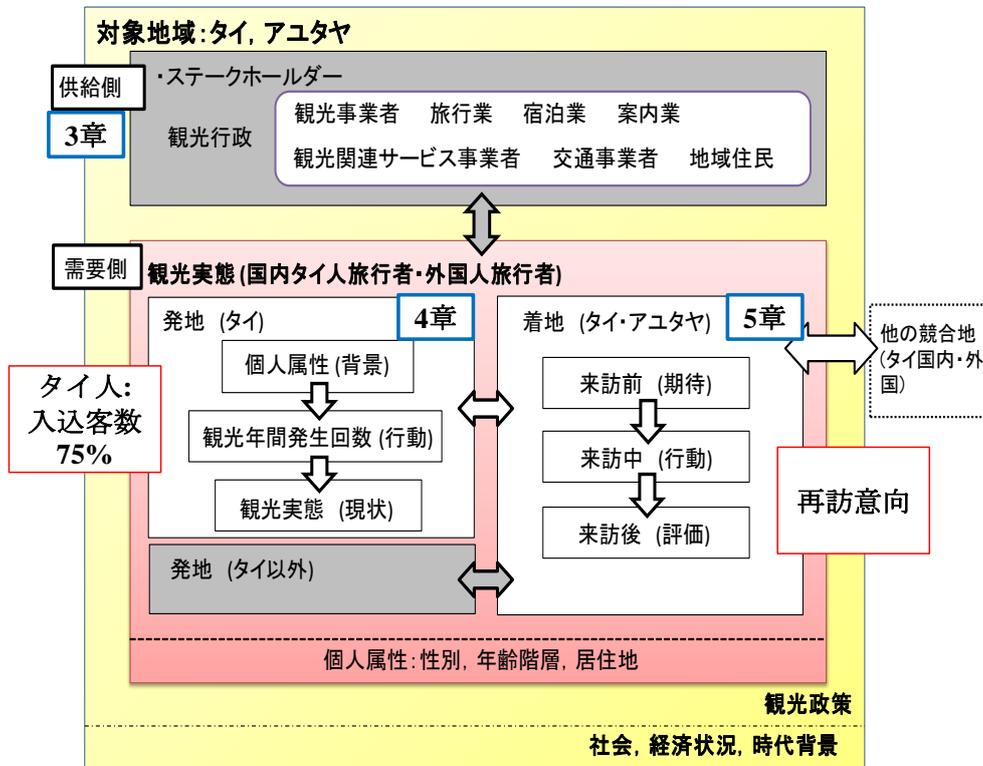


図-1 本研究の分析フレーム

さて、「需要側」における観光実態では、旅行者の発地と着地の2つ面がある。発地は旅行の出発地であり、おおむね居住地と定義とできる。タイでは、1970年代以降の経済発展につれて、観光収入を着実に増大させており、外国人観光客の主要マーケットとなっているが、国内タイ人は少ない現状といえる。今後に予想される一層の経済発展を考えると、個人個人の観光行動の実態を詳細に把握するとともに、旅行形態間の競合や将来の旅行需要の推定が重要と考えられる。そのため、本研究は、今後の旅行行動の活発化が考えられることから、タイ国民に着目し、その観光実態を分析対象とする。

一方、着地面をみると、タイでは多くの観光資源があり、特に、独自の観光資源は伝統文化や古都の遺跡として諸国の観光客に注目されている。多数の場所があるが、代表的なものはアユタヤである。タイ有数の観光地であるアユタヤは、1991年に世界文化遺産に登録されて以来、タイの観光地として定着し、世界中から多くの観光客が訪れているものの、さらなる観光地としての発展と観光振興が必要と考えられる。そこで、本研究は、アユタヤを事例対象としながら外国人ならびにタイ人との比較を通じた観光地評価の分析を行う。

一方、「供給側」では、観光振興に対する観光地などのインフラ整備、情報発信などに重要なステークホルダーとして全てに関わる業務を担当するのが観光行政である。

特に、観光産業の振興策を講じるために、観光関連主体間の調整・整理が不可欠と考えられることから、その役割を担うことが期待される行政を分析対象とする。

以上から、本論文の研究目的を下記のように設定する。

- (1) 観光・スポーツ省の内局であるタイ国政府観光庁、観光局の報告年報、政策概要、事業概要を対象とした文献調査により観光政策の変遷の考察から、時代・社会の変化と政策との対応関係を考察し、行政の役割を明らかにする。(3章)

次に、「需要側」では、旅行者・来訪者の発地と着地に着目した分析視点から下記のように設定する。

- (2) タイ国民の個人個人の観光行動の実際を把握するとともに、旅行形態間の競合や将来の旅行需要を明らかにする。(4章)
- (3) アユタヤを対象地として、来訪者の観光地に対する期待・旅行行動や評価の実態を把握するとともに、再訪意向に影響を与える居住地等の個人属性をはじめとする要因を同定する。(5章)

以上のように、観光政策側、旅行者側の視点から分析を行い、今後さらにタイの観光振興を実現するための留意点を明らかにする。

### 1.3 本論文の構成

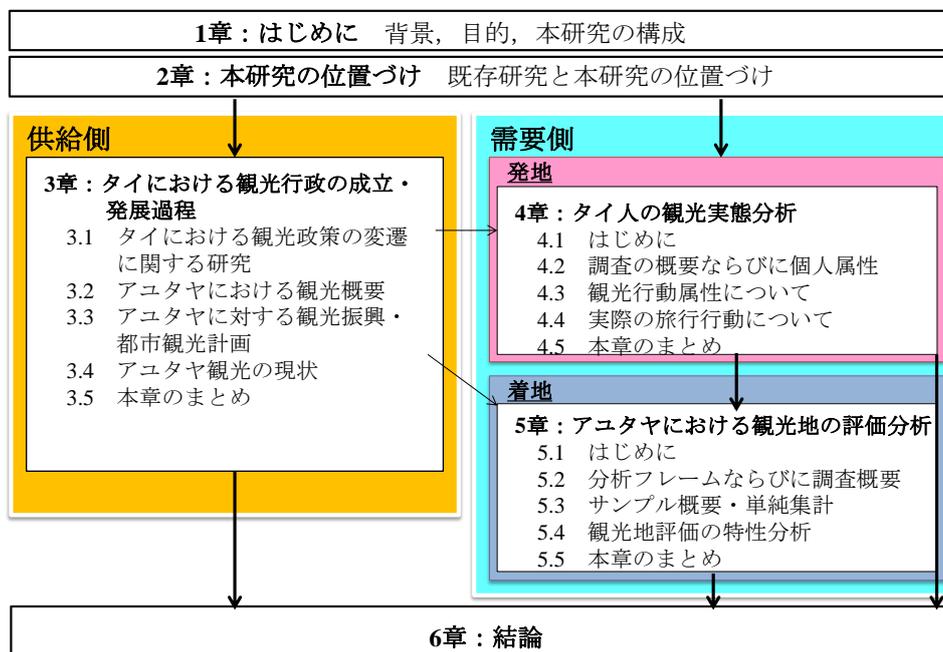


図 - 2 本研究の論文構成

前節の目的のもと、6章からなる本論文の構成について述べる。

2章は、既存研究のレビューを通じて、これまでの研究の不足点を明らかにするとともに、本研究の位置づけを示す。

3章は、供給側を対象とした目的(1)に関する分析を行う。これに対して、4章、5章では、需要側に着目した目的(2)、(3)に関する分析を行う。

6章では、各章の研究成果から、観光振興のための施策をまとめ、本研究の結論及び今後の課題を述べる。

## 2章 本研究の位置づけ

まず、観光政策に関する既存研究では、社会・経済環境との関連性の考慮が十分でなく、時間の推移に伴う変化といった継続性について十分配慮されていないと考えられる。そこで、タイの観光行政の初期から現在に至る観光産業に関係がある政府、観光機構による観光政策の発展の変遷を通史で検討し、時代の政府と観光機構との関係について着目する点が本研究の特徴として考えられる。

一方、需要側に着目した観光行動・評価に関する研究では、既存研究において観光者属性を考慮した分析事例はみられるが、タイ国民の観光実態データの公表が限定的なことから、それを対象とした分析が困難で、個人属性と観光行動との関連性に着目した研究事例は少ない。そこで、4章においてWeb調査による個人の観光行動データを用いてタイ国民の観光行動実態を把握するとともに、タイ国民の観光行動に影響を与える要因の同定ならびに将来の旅行需要の推定を行うことが特徴である。

また、着地における分析である5章については、旅行の訪問地、行動内容などの特定の経験に関する事例分析から、旅行満足度の一般的構造を探る研究は数多くみられる。しかしながら、再訪意向と観光者特性との関連性に着目し、定量的な再訪意向評価の構造を明確にした研究事例は少ない。本論文では、観光地における来訪者の行動や評価特性を明らかにした点、ならびに偏相関係数を用いながら見かけの相関の排除、層別回帰モデルによる属性間の評価構造を定量的に把握した点が独創的箇所ならびに先行研究との差異と考えることができる。

## 3章 タイにおける観光行政の成立・発展過程

### 3.1 タイにおける観光政策の変遷に関する研究

タイでは、1960年にタイ国観光局が独立行政機関として設立された。これがタイにおける観光立国政策のはじまりであり、1965年にはアメリカ・ニューヨークに海外観光事務所を初めて開設した。タイ国観光局の設立時、タイを訪れる外国人旅行者数は年間わずか8万1千人に過ぎなかった。しかしながら、1970年代からは、タイ国政府の外資主導経済発展政策、多国籍企業による投資などによって、経済規模が急速に拡大し、これと相まってタイの観光産業も着実な成長を遂げてきた。

本章では、タイの観光政策の体系的な方針、方策に着目する。初期から現代に至る観光産業に関係がある政府、観光機構の発展過程をとりあげ、観光・スポーツ省の内局であるタイ国政府観光庁、観光局の報告年報、政策概要、事業概要を対象とした文献調査によりタイの観光政策の変遷を明らかにする。分析の結果、以下の点が明らかになった。

- ① 当初、観光促進のために首相府直轄で設置された観光局(TOT: Tourism Organization of Thailand)から、タイ政府観光庁(Tourism Authority of Thailand)に改称された後、観光・スポーツ省を再編したが、それにあわせて、旅行者数が増加傾向を示していること。
- ② 経済開発の初期段階において、潜在的観光地域で優先的にインフラ整備が行われたことは、サービス産業として観光産業を振興させる基盤をつくりあげるとともに、外貨獲得に大きく貢献したこと。
- ③ タイ国政府観光庁が国家経済社会開発庁の作成した国家経済社会開発 5 カ年計画に基づきながら観光政策、観光行政を遂行してきた。タイ国政府観光庁が実施してきた政策は、経済的に開発途上の国、地域でも導入可能な事例であるとともに、効果的な観光振興が実現できたと考えられること。
- ④ 第 7 次 5 カ年計画以降、観光政策は国際経常収支対策だけでなく、内需に目を向けた開発へ力を入れつつある。これは、外貨獲得を目的とした経済開発のための観光開発とともに、経済開発にともなう内需の消費拡大のための観光開発へ政策的志向が変化しつつあると考えることができる。

以上から、タイの観光行政の初期から現在まで、国を経済的に支える1セクターとして存在しているが、経済状況と関係しながら初期には、主に国際観光に注力しながら、近年ではタイ国民を対象としたマーケティング活動が行われる経緯が明らかとなった。

#### 4 章 タイ人における観光の実態

タイにおける個人個人の観光行動把握のために、タイ政府観光庁とタイ統計局では、2009年から全国の世帯主を対象としてアンケート調査を実施しているが、国内日帰り・宿泊旅行と国外旅行との競合関係や収入の増加が旅行需要に及ぼす影響について、十分検討されていない。

タイ政府による観光振興をみると、外国人観光客増加のために観光誘致キャンペーンが繰り返されている。一方、国内のタイ人観光客に対する観光施策が少ないことから、2003年に「UNSEEN IN THAILAND」と称する観光誘致キャンペーンが実施された。このことから、今後に予想される一層の経済発展を考えると、個人個人の観光行動の実態を詳細に把握するとともに、旅行形態間の競合や将来の旅行需要の推定が重要と考えられる。

このような問題意識にたち、本章では、タイ国民に対して Web アンケート調査を行い、1,007 サンプルを収集した。このデータを用いて、基礎集計、クロス集計により観光情報利用媒体、旅行目的、利用交通機関などについて、国内旅行(日帰り旅行と宿泊旅行)と国外旅行について明らかにした。その結果、性年齢階層などの個人属性と観光情報利用媒体、利用交通機関等の観光旅行行動との関連性がわかった。

さらに、国内日帰り・宿泊旅行、国外旅行の旅行回数に与える影響を明らかにするために、数量化 I 類分析を適用し、男女別にモデル推定した。

男性は、収入、自動車保有が大きな影響を及ぼしている特性を有しており、収入や自動車保有が増加するほど旅行回数が増加傾向となることがわかる。それに対して、40~60 代以

上でパラメータが負値となっている。これは、健康状況や仕事などで時間的な制約が大きいことから、十分な時間を旅行行動に費やすことができないためと考えられる。一方、女性は、収入が大きく影響をしており、収入が増加するほど旅行回数が増加することがわかる。また、男性同様、高年齢者はパラメータが負値となっている。また、国外旅行は、男女双方に対して収入が大きな影響を有する一方、50代以上でパラメータが負値となっている。そして、男女いずれともに、決定係数は低いものの、レンジから最も影響度合いの大きいものは収入であり、性年齢階層、自動車保有も影響が大きかった。

さらに、推定されたモデルを用いて感度分析を行い、将来におけるタイ国民の3旅行形態を男女別に発生量推計を行った。算出に用いる変数選択モデルの個人属性の説明変数が月収入および人口構成であるために、この変数を変化させた場合の感度分析を行った。

まず、月収入の調査項目がカテゴリ変数であるために、各属性の40%の人が1つ上位の月収入層への移行を考えた。また、2040年までの人口構成予測を変数に組み込み、2013年現在の発生回数と2020年、2030年ならびに2040年における発生回数を明らかにした。

2040年、国内日帰り・宿泊旅行および国外旅行において経済成長を背景とした月収入層の変化によって、男女双方の発生回数の増加がみとめられる。さらに、人口構成の変化によって、男女双方の国内日帰り・宿泊旅行の発生回数が減少している。逆に、国外旅行では、男女双方の発生回数が増加していくと推定された。経済成長ならびに人口構成の変化から、高齢者は国内旅行より国外旅行が増加していくと考えられた。

## 5章 アユタヤにおける観光地の評価分析

本章では、タイ・アユタヤを対象として、来訪者の属性、行動や評価の実態を把握するとともに、再訪意向に影響を与える居住地等の個人属性をはじめとする要因の同定を目的とした。

まず、実態を明らかにするために現地におけるアンケート調査を行い409サンプルを収集した。このデータを用いて、来訪者の個人属性、来訪前の資源認知、来訪中の行動について来訪目的、同伴者、利用交通手段、立寄り地点について明らかにした。その結果、年齢階層は20代の構成比率が多く、アユタヤへの来訪前に持つ認知度と来訪中の行動とは関連性があり、来訪者にとっては歴史的な世界文化遺産などの遺跡に対して強い期待があることがわかった。さらに、居住地によっても利用交通手段、立寄り行動に差異がみられた。

さらに、再訪意向に与える影響を偏相関係数を参考にしながら層別回帰モデルによって明らかにした。その結果、「A:観光魅力（アユタヤの「世界文化遺産」、象に乗る体験など「観光活動）」が再訪意向の形成に大きな影響を及ぼしていること、居住地別にみると欧州居住者は世界文化遺産に対する評価が低いとともに、日本、アジア居住者はアクセスに対する評価が低いことが明らかとなった。

さらに、観光地整備のため、来訪セグメントごとにどの項目が評価され、何を改善させるとより効果的か明らかにするためCSポートフォリオ分析を行った。その結果、いずれの居住地でも世界文化遺産の評価が高く、タイ以外の居住者で観光活動が最優先改善と位置

づけされた。このように、CSポートフォリオによって居住地ごとの評価の差異、再訪意向向上のためのプライオリティを整理することができた。

CSポートフォリオ分析の結果によりアユタヤにおける観光発展に関する方策として、下記のような点を上げることができる。

- ① 来訪者への詳細なアユタヤ観光情報提供や観光に関するサービスに応じる事務所及び人材を開発すること。
- ② 古都としてのアユタヤの博物館の展示及び文化歴史に関する活動を改善すること。
- ③ アユタヤの文化歴史観光地を実体験するために、世界遺産の古都アユタヤ遺跡を象に乗って散歩したり、レンタサイクル、エンジン付けのボートでアユタヤを囲む川を一周したり、トゥクトゥクに乗る体験、夜のライトアップの祭り等の観光活動にスムーズに参加できるような体制づくりを検討すべきであること。
- ④ アユタヤの交通機関に関する整備をすること。

また、来訪者の再訪意向以外の観光振興策として、伝統文化や古都の遺跡としてアユタヤの独自の観光資源の保護、復旧と観光振興を推進するため、自治体と国家の芸術文化遺産や芸術の保存、教育、研究、開発の業務について責任を負っている芸術局及びタイ観光局との協働業務がさらに重要と考えられる。また、特にアユタヤの観光地発展が実現するためには、地元住人側の観光地に対する認識と協力も長期的に必要となろう。

## 6 章 結論

本研究の3つの目的に基づいてタイにおける観光振興に着目として「供給側」では観光政策を、「需要側」では旅行者の観光実態を分析した。

「供給側」に相当する観光政策の分析では、国による取り組み初期から観光政策の変遷を考察した。その結果、社会情勢と密接に関連しながら、潜在的観光地域へ優先的にインフラ整備が行われたことは、外貨獲得、投資拡大、住民サービスなど観光振興の目的、対象マーケットを変化させながら、観光振興に取り組みられていたところが明らかとなった。さらに、タイ国政府観光庁が実施してきた政策は、観光振興に対して効率的なキャッチアップができたことが確認され、途上国の開発政策策定に際しても有意義なものと考えられる。特に、外貨獲得を目的とした経済開発のための観光振興とともに、現在は経済開発に伴う内需の消費拡大のための観光振興へ政策的志向が変化しつつあり、今後はそれ以上のレベルを保持し、旅行環境に対する整備を推進する必要があると考えられる。

一方、「需要側」の旅行者、来訪者に関する分析では、まずタイ国民の観光実態を明らかにすることができ、それをもとに旅行形態間の競合把握や将来の旅行需要の推定した。国内日帰り・宿泊旅行及び国外旅行に関する発生回数では、経済成長を背景とした収入増加や人口増加が観光行動に与える影響が明らかとなった。これから、発地における環境変化によって国内旅行発生回数及び国外旅行発生回数の競合が予想されることから、着地では、どのように対応するか検討することが今後必要と考えられる。

さらに、アユタヤを対象とした場合、アユタヤへの来訪前に持つ認知度と来訪中の行動

とは関連性があり、来訪者にとっては歴史的な世界文化遺産などの遺跡に対して強い期待があることがわかった。さらに、居住地によっても利用交通手段、立寄り行動に差異がみられた。さらに、観光地に対する期待・旅行行動や評価の実態における再訪意向に影響を与える居住地等の個人属性を明らかにした。その結果、欧州居住地者は歴史的な観光地に対する評価が低いとともに、日本、アジア居住地者はアクセスに対する評価が低いことが把握できた。また、観光地整備のため、何を改善させるとより効果的か明らかにするためCSポートフォリオ分析を行った。その結果、いずれの居住地でも世界文化遺産の評価が高く、タイ以外の居住者で観光活動、観光情報提供や博物館の展示が最優先改善と位置づけされた。このように、CSポートフォリオによって居住地ごとの評価の差異、再訪意向向上のためのプライオリティを整理することができた。アユタヤだけではなく、タイ全体的な観光地として日本、アジア、欧米州及びタイ人の旅行者の増加、個人旅行の増加に対応が今後必要と考えられる。

以上より、観光振興のために、その旅行者行動の実態の変化・ニーズの把握、分析手法の開発の重要性を示し、利便性を向上させる施策を継続的に実施していくこと、施策の推進主体、体制の構成の必要性を明らかにした。

今後の研究課題として、まず「供給側」では、各観光行政に関する観光のステークホルダーを検討し、詳細的に観光政策との関連性を明らかにすることである。また、世界諸国の観光政策を対象とした分析の結果を、タイと比較しながら今後の観光地整備に向けての検討、観光政策の課題を抽出することが挙げられる。

一方、「需要側」の分析においては、タイ以外の旅行者の観光実態を明らかにして、国際交流的発地国と着地国双方における国内事情及び両国事情を分析して、国際観光交流の関連性を明らかにすることが必要と考えられる。さらに、タイでは、アユタヤの成果と事例をさらに広げ、提示する分析方法を用いて他のタイ観光地評価を行うことが今後必要と考えられる。

また、本研究で検討した観光振興は、経済発展に対する知見をもたらし、2015年に東南アジア諸国連合(Association of South-East Asian Nations, ASEAN)にASEAN共同体(AEC)が創設された場合、その国際観光交流の拡大に貢献できる研究と考えられる。

# 博士論文題目

## タイにおける観光振興に関する研究－観光政策評価と旅行者行動・評価分析－

KLAYSIKAEW KRAIRERK

### 目次

#### 第1章 はじめに

1.1 背景.....	1
1.2 目的.....	2
1.3 本研究の構成.....	6

#### 第2章 既存の研究のレビューならびに本研究の位置づけ

2.1 観光政策に関する既存研究.....	9
2.2 旅行者の評価特性に関する既存研究.....	9
2.2.1 タイにおける観光実態に関する既存研究.....	13
2.2.2 アユタヤにおける観光地の評価分析に関する既存研究.....	14

#### 第3章 タイにおける観光行政の成立・発展過程

3.1 タイにおける観光政策の変遷に関する研究.....	20
3.1.1 はじめに.....	20
3.1.2 従来の研究と本研究の位置づけ.....	21
3.1.3 タイの観光行政，政策の変遷.....	22
3.1.4 まとめ.....	32
3.2 アユタヤにおける観光概要.....	33
3.2.1 アユタヤの歴史的成り立ち.....	33
3.2.2 アユタヤと諸外国との接触.....	35
3.2.3 アユタヤにおける主要な観光資源.....	38
3.3 アユタヤに対する観光地振興・観光都市計画.....	50
3.3.1 アユタヤの復旧経緯.....	50
3.3.2 アユタヤの観光地設備に関する計画.....	51
3.4 アユタヤの観光状況.....	54
3.5 アユタヤとアジア観光都市のポジショニング比較分析.....	58
3.6 本章のまとめ.....	62

#### 第4章 タイ人の観光実態分析

4.1 はじめに.....	66
4.2 従来の研究と本研究の位置づけ.....	67
4.3 アンケート調査の概要ならびに回答者の個人属性.....	68
4.3.1 調査対象地域概要.....	68

4.4	観光行動属性について	70
4.4.1	国内日帰り・宿泊旅行の特性	71
4.4.2	観光情報利用媒体	72
4.4.3	興味ある観光形態	73
4.4.4	利用交通機関	73
4.4.5	国外旅行の特性	74
4.5	旅行行動について	78
4.5.1	年間日帰り・宿泊旅行，国外旅行回数の分析	78
4.5.2	モデル感度分析	82
4.6	本章のまとめ	84
<b>第5章 アユタヤにおける観光地の評価分析</b>		
5.1	はじめに	87
5.2	既存研究と本研究の位置づけ	87
5.3	タイならびにアユタヤの概要	90
5.3.1	調査対象地域概要	91
5.3.2	アユタヤの現在の観光状況	91
5.4	アンケート調査の概要と分析結果	92
5.4.1	個人属性	95
5.4.2	来訪前の観光資源の認知度について	95
5.4.3	アユタヤでの観光実態 (来訪中の行動特性分析)	96
5.4.4	来訪前の観光資源の認知度について	99
5.5	アユタヤの再訪意向に関する分析	101
5.5.1	偏相関係数による分析	101
5.5.2	層別回帰分析	103
5.5.3	CS ポートフォリオ分析	105
5.6	本章のまとめ	108
<b>第6章 結論</b>		
6.1	結論	112
6.2	今後の研究課題および貢献	114
	謝辞	116
	業績リスト	117
	付録	118
	付録1 タイ人の観光実態分析アンケート調査票	119
	付録2 観光地評価の分析アンケート調査票	137

## 図・表・写真リスト

### 第1章

図 1-1 本研究の分析フレーム	3
図 1-2 本研究の論文構成	6

### 第3章

表 3-1 観光関連事業の実施主体と施策の種類	21
図 3-1 タイの首相在任期間・キャッチフレーズ, 来訪者外国人旅行者数, 旅行収入の推移	22
図 3-2 貿易収支, サービス収支と国 GDP の観光産業割合の時系列推移	23
表 3-2 タイの観光行政機構の変遷	24
図 3-3 タイにおける観光の推進体制	26
図 3-4 観光行政予算の推移	28
表 3-3-1 タイの観光政策変遷(1960-1980年代)	30
表 3-3-2 タイの観光政策変遷(1990年代)	31
表 3-3-3 タイの観光政策変遷(2000年代)	32
図 3-5 アユタヤの位置	34
写真 3-1 アユタヤ全域の遠景	34
写真 3-2 王宮跡(The Old Royal Palace)	38
写真 3-3 ワット・プラ・シーサンペット(Wat Pra Srisanpet)	39
写真 3-4 ワット・プラ・ラーマ(Wat Pra Ram)	39
写真 3-5 ヴィハーン・プラ・モンコンボピット(Viharn Pra Mongkol Bopit)	40
写真 3-6 ワット・マハタート(Wat Mahathat)	40
写真 3-7 ワット・ラーチャプーラナ(Wat Rajaburana)	41
写真 3-8 ワット・スワン・ダーララーム(Wat Suwan Dararam)	41
写真 3-9 ワット・ローカヤ・スター(Wat Lokaya Sutha)	42
写真 3-10 チャンタラカセム国立博物館(Chantrakasem National Museum)	42
写真 3-11 チャオ・サム・プレー国立博物館 (Chao Sam Phraya National Museum)	43
写真 3-12 アユタヤ歴史研究センター(Ayutthaya Historical Study Center)	43
写真 3-13 ワット・チャイ・ワタナラーム(Wat Chai Wattanaram)	44
写真 3-14 ワット・ナー・プラメーン(Wat Nha Pramet)	44
写真 3-15 ワット・パナンチューン(Wat Phananchoen)	45

写真 3-16	ワット・ヤイ・チャイモンコン(Wat Yai Chaimonkol).....	45
写真 3-17	ワット・プーカオトーン(Wat PhuKhao Thong).....	46
写真 3-18	ワットマヘーヨン(Wat Mahaeyong).....	46
写真 3-19	ワット・クディーダーオ(Wat Gudi Dao).....	47
写真 3-20	日本人町跡(Japanese Settlement).....	47
写真 3-21	バン・パイン宮殿(Bang Pa-In Palace).....	48
写真 3-22	バンサイ民芸文化村(The Bangsai Arts and Crafts Village).....	48
写真 3-23	ワット・プッタイスワン(Wat Putthai Sawan).....	49
写真 3-24	ワット・タン三カラート(Wat Thammikarat).....	49
写真 3-25	ポルトガル人町跡(Portugal Settlement).....	50
図 3-6	アユタヤの都市計画および土地利用計画 2009 年.....	53
図 3-7	全タイ外国人来訪者数とアユタヤ外国人来訪者数の推移.....	54
図 3-8	全アユタヤ来訪者数と居住地別来訪者数推移.....	55
図 3-9	居住地別アユタヤ外国人来訪者数の推移.....	55
図 3-10	2009-2012 年タイにおける各都市観光の観光数推移.....	56
図 3-11	2009-2012 年タイにおける各都市観光の観光収入推移.....	57
図 3-12	2009-2012 年タイにおける各都市観光の宿泊数平均推移.....	57
表 3-4	38 アジア都市観光地の満足度評価.....	59
表 3-5	主成分分析結果：主成分負荷量.....	60
図 3-13	プロダクトマップ(クラスター分析適用後).....	60

#### 第 4 章

表 4-1	性別年齢階層別の構成比率.....	69
表 4-2	職業・休日・居住地・未既婚の構成比率.....	69
表 4-3	家族形態・月收入と自家用車の構成比率.....	70
表 4-4	日帰り旅行及び宿泊旅行参加率・単位.....	71
表 4-5	旅行目的構成比率.....	72
表 4-6	利用情報媒体の指摘割合.....	72
表 4-7	興味ある観光形態平均値.....	73
表 4-8	タイ及び日本の利用交通機関構成比率.....	74
表 4-9	国外旅行回数構成比率.....	74
表 4-10	国外旅行目的・同行者及び旅行形態構成比率.....	75
図 4-1	国外旅行目的地別訪問率.....	76
図 4-2	国内日帰り旅行/宿泊旅行回数平均値の比較.....	77
図 4-3	国内宿泊旅行/国外旅行回数平均値の比較.....	77
図 4-4	国内日帰り旅行と宿泊旅行/国外旅行回数平均値の比較.....	78

表 4-11	年間日帰り旅行回数のモデル推計結果	79
図 4-5	日帰り旅行男性のパラメータ	79
図 4-6	日帰り旅行女性のパラメータ	79
表 4-12	年間宿泊旅行回数のモデル推計結果	80
図 4-7	宿泊旅行男性のパラメータ	80
図 4-8	宿泊旅行女性のパラメータ	80
表 4-13	年間国外旅行回数のモデル推計結果	81
図 4-9	国外旅行男性のパラメータ	81
図 4-10	国外旅行女性のパラメータ	81
図 4-11	月収層変化に関する感度分析結果	83
図 4-12	人口構成率変化に関する感度分析結果	83
図 4-13	感度分析結果	84

## 第5章

図 5-1	分析フレーム	89
図 5-2	タイ来訪者外国人旅行者数，旅行収入の推移	90
表 5-1	国籍別アユタヤ来訪者構成比率・来訪者数の推移(2002-2011)	92
図 5-3	居住地別個別項目	93
写真 5-1	アユタヤでの現地アンケート調査	93
表 5-2	居住地別来訪者数・構成比率	94
表 5-3	居住地別性・年齢階層別構成比率	95
表 5-4	「アユタヤで思い浮かべたもの」の指摘割合	96
表 5-5	居住地別来訪目的構成比率	96
表 5-6	来訪回数の構成比率	97
表 5-7	居住地別主要利用交通手段の構成比率	97
表 5-8	居住地別観光資源別訪問率	98
図 5-4	居住地別個別項目・再訪意向平均値	100
表 5-9	居住地別個別項目・再訪意向平均値	100
表 5-10	個別項目と再訪意向との相関係数	102
表 5-11	再訪意向と個別項目との相関係数・偏相関係数	103
表 5-12	層別回帰モデルの結果	104
図 5-5	欧州居住者のCSポートフォリオ	106
図 5-6	日本居住者のCSポートフォリオ	106
図 5-7	タイ居住者のCSポートフォリオ	107
図 5-8	アジア・オセアニア居住者のCSポートフォリオ	107

# 第 1 章 はじめに

## 1.1 背景

発展途上国は、一般に人口増加圧力や急速な都市化、高失業率、単総な経済構造と1次産業を主体とした輸出製品、零細な農業、産業化の遅れ、低所得、未整備なインフラ、低識字率などの構造的問題を抱えている。こうした途上国の多くは、世界経済の動向に輸出条件が大きく左右される従来からの製品や産業の代替として、自国の観光資源に着目する。観光は、途上国経済を多様化し、雇用と投資を刺激し、伝統的な第一次産業や第二次産業に代わって貴重な外貨獲得を可能にする有効な経済手段といえる。外貨収入により貿易赤字を減少させるので経済開発に貢献し、途上国自身の経済環境を好転させるのに役立つと考えられる<sup>1</sup>。

そのため、多くの途上国政府は、観光マーケティング、道路やホテルなどのインフラ・プロジェクトの整備や、大小様々な旅行ビジネスに盛んに資金を注ぎ込んでいる。または、外国からの投資を刺激するために、多くの国が税金や輸入関税の免除、補助金、様々な保証引き受けなどの経済的インセンティブを提供している<sup>2</sup>。

イギリス国際開発省のある委託研究では、世界の最貧国100か国を調査した結果、旅行産業を「重要」と結論づけている。所得水準が最低クラスの国の半分近く、低～中程度クラスの国のほぼ全てで、旅行産業は国内総生産（GDP）の2%以上、輸出額の5%以上を占めていたからである。また、世界の最貧困層の80%が住む12か国中1か国を除くすべての国で、旅行産業は重要であるか、成長中であることが分かった。世界49か国のいわゆる後発途上国では、旅行産業は石油に続く第二の外貨獲得源になっている。世界貿易機関WTOは、旅行産業は途上国が一貫して貿易黒字を出している唯一の経済分野であると報告している。1999年、国際旅行収入は途上国のサービス輸出額の三分の二、総輸出額の10%以上を占めた<sup>3</sup>。

これらを背景に、発展途上国の東南アジア諸国は、工業化の過程で、観光産業を並行して振興し、国の経済開発を実施している。特に、1960年のタイの平均実質GDP成長率は8%と順調であったが、1970年代に入り様々な困難に見舞われることとなった。1970年代の経済成長を減速させた要因としては、国際通貨調整、オイルショック、それに伴う世界不況や高インフレなどがあげられる。それでも、1970年代前半の平均成長率は約6%、後半は約8%であり、同時期における他の東南アジア諸国との比較では高い成長率を維持していたといえる。現在では、国際観光客受入数2,235万人を超える観光立国となっている。アジア、大洋州地域においては中国、香港、マレーシアに次いで4位の受け入れ客数を誇るまでに成長した。タイは、観光収入を着実に増大させ安定的に成長した国であるからである。東南アジア諸国の観光振興への取り組み機関をみると、タイは、マレーシア、シンガポール等

に比べると民間より政府が主体的役割を果たしている。タイ国政府観光庁は、観光振興施策を実施し、それぞれ大きな成果をおさめている。例えば、AMAZING THAILAND 等のプロモーション・キャンペーンは観光プロモーションとしては、世界的にみても良好な結果を残したと考えることができる。タイ国政府観光庁はこのようなソフト部門の観光振興施策を積極的に展開している。一方で、新たな観光資源の発掘や観光関連インフラの整備についても計画的な実施を進めている。多種多様な観光関連インフラ整備事業が全国の各地域において、タイ政府観光庁の指導もと様々な関連省庁を実施主体として進められている。これらの背景を踏まえて、本論文では、経済開発の初期段階で、政府の観光政策実施と観光業が成長したタイの事例研究を明らかにするだけでなく、今後の開発を期待する国についても、新たな指針を見出すことができると考える。

近年、世界の中で観光立国への関心向上にともない、多くの国が観光振興に取り組んでいる。開発途上国としてタイが、観光立国を目指して国家レベルの観光開発プランを策定したのは1970年代後半以降である<sup>4</sup>。タイにおける観光開発は急激に進展し、農業中心の産業構成から工業、サービス中心の産業構成へと移行するにつれて、観光の重要性が増大した。旺盛な国外からの需要と相まって、急速な観光成長は、高い経済的利益と、国民経済の増大、雇用創出、投資拡大などの効果を生み出し、唯一恒常的に拡大し続けてきた主要外貨獲得源として注目されている<sup>5</sup>。

タイでは、外国人旅行者数が増加するに伴い、種々の外国人向けの観光誘致キャンペーンが実施されているが、国内のタイ人旅行者に対する観光施策は少ない。そのため、2003年に「UNSEEN IN THAILAND」と称する観光誘致キャンペーンが実施された。しかしながら、観光振興に対する取り組みは、その時々々の経済・政治の状況などからアドホックに実施されていると考えられる。その大きな原因として①供給側である観光地において統計資料が整備されておらず、観光によるインパクトが定量的に計測されていないこと、②需要側実態、ニーズ、行動に関するデータ整備が充分でないことが考えられる。これらのデータが整備されたら、自動的にアドホックの状態を回避して政策が実行される訳ではない。しかし、データの整備によってタイ政府が戦略をもって観光政策を実施することができると考えられる。

## 1.2 目的

観光振興を考えたとき、その本質である観光実態の旅行者行動の把握が重要と考えられる。需要側として来訪者の観光実態を把握し、来訪者の期待を充足するように着地を整備して、魅力を創出し、どのような評価特性を有するか明らかにすることが重要である。さらに、供給側として、観光政策がどの程度がインパクトを与える主体、規模やそのフローを考察することも重要といえる。

図 1-1 は、本研究の分析視点を示すものであり、観光に関するステークホルダーならび

に旅行者の観光実態を整理したものである。観光政策のなかでは、様々な観光のステークホルダーが存在しているが、これらの事業に対して、観光行政は様々な規制によって品質保持、消費者保護などを行なっている。一方、行政自体が主体となるものとして、空港、鉄道、道路整備を始めとするインフラ整備と経済政策、プロモーションの実施などソフト対策が考えられる。これらの整理の中で、本論文では、「供給側」における観光行政が実施主体となる行政行為と「需要側」における旅行行動主体の実態に着目する。

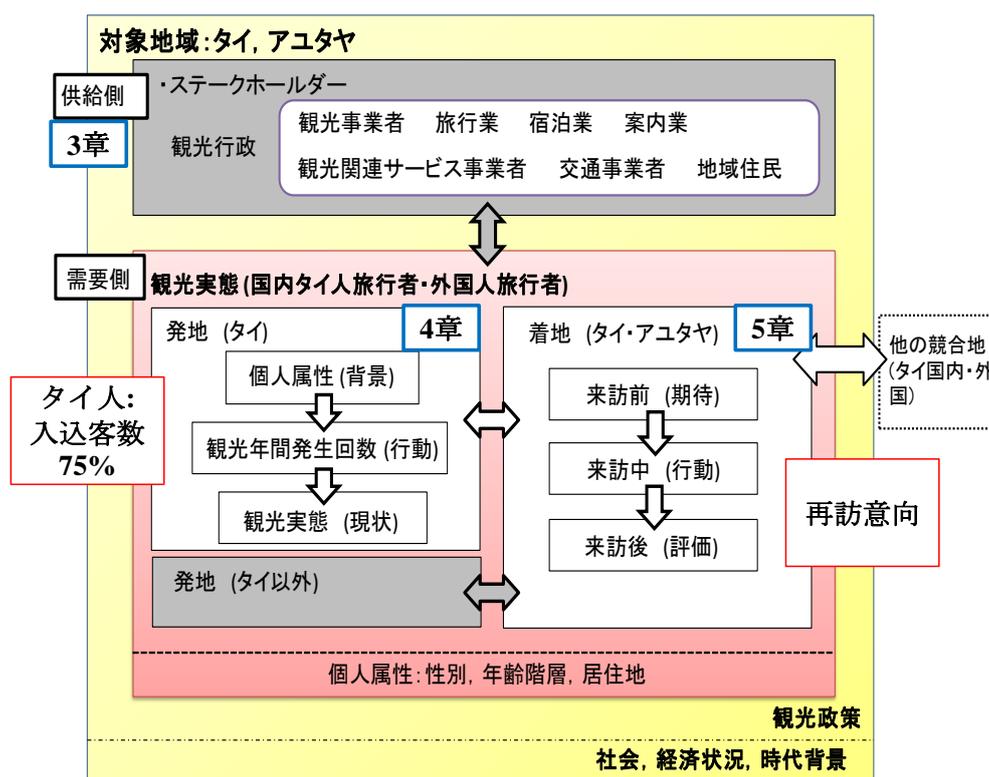


図 1-1 本研究の分析フレーム

本研究では、タイを対象として、観光政策(供給側)、旅行者(需要側)、両方の分析視点を設定する。具体的には、供給側では、社会経済状況の時代変化に基づいて、国の観光政策が始まった1960年代から現在までの政府と自治体による観光行政の発展を明らかにする。

さらに、「需要側」の来訪者に間には、来訪者の発地の観光実態に関する行動、来訪者の着地に評価特性をとらえる分析を行い、観光実態を明らかにする。

「需要側」における観光実態では、今後予想される一層の経済発展を考えると、個々人の観光行動の実態を詳細に把握するとともに、経済的視点から国内旅行(日帰り・宿泊)と国外旅行という旅行形態間の競合や将来の旅行需要の推定が重要と考えられる。

この旅行者の観光実態把握には、旅行者の発地と着地の2面がある。発地は旅行の出発地であり、おおむね居住地と定義とできる。タイでは、1970年代以降の経済発展につれて、

観光収入を着実に増大させており、外国人観光客の主要マーケットとなっているが、国内タイ人は、少ないのが現状である。また、タイ観光客入り込み数に含める割合は、タイ人旅行者：75%、外国人旅行者：25%であり、主なマーケット外国人旅行者よりタイ人旅行者の割合が高い。さらに、人口減少・少子高齢化が進展しており、国民のゆとりを求める志向の高まり等を背景とした観光旅行者の需要の高度化、少人数による観光旅行の増加等、観光旅行の形態の多様化の近年の観光をめぐる諸情勢の著しい変化への的確な対応は、十分に行われていない。そのため、本論文では、発地としてタイ国民以外を含めず、タイ国民の観光実態を主として明らかにする。

一方、着地面をみると、タイでは多くの観光資源があり、特に、独自の観光資源は伝統文化や古都の遺跡として諸国の観光客が注目されている。タイには多数の観光地があるが、その代表的ものはアユタヤである。タイ有数の観光地であるアユタヤは、1991年に世界文化遺産に登録されて以来、タイの観光地として定着し、世界中から多くの観光客が訪れている。しかし、観光地整備が不徹底で問題が生じている。先行研究では、この問題に関する分析はなされてこなかった。タイ国家経済社会開発庁による、観光地開発計画の第4次経済社会開発計画(1976-1981)から観光の開発計画が策定された。この観光開発計画は、インバウンド観光による外貨獲得、輸出力向上が狙いとなっている。自然的な観光資源としてパタヤ、プーケットの拠点的开发に始まり、交通、通信、土木関係の観光開発を実施された。しかし、特に主要タイ観光資源として伝統的文化や古都の遺跡観光地に対する観光地整備の取り組みがなされてきたが、目に見えた効果がないのが現状である。さらに、タイの国際的に有名な観光都市としてバンコク、チャンマイ、パタヤ、プーケット等のポジショニングをみると、2009-2012年のタイにおける観光客数推移をみると、アユタヤの観光客数が増加している。逆に、観光収入と宿泊数平均では、他の観光都市より低く、経済格差が生じていることがうかがえる。そこで、本研究は、アユタヤを事例対象とした観光需要及び外国人による観光需要を着目して、観光地評価の分析を行う。着地の視点から旅行者のニーズに充分対応できるか、観光地魅力度向上やリピーター創出のため、観光地の観光環境改善を検討できるか、といった視点が考えられる。さらに、「供給側」では、観光振興に対する観光地などのインフラ整備、情報発信など全てに関わる業務を担当するのが観光行政である。

特に、観光産業の振興策を講じ観光客のニーズに的確に対応するには、観光実態(主体間)の整理が不可欠と考えられることから、その役割を担うことが期待される行政を分析対象とする。

以上から、本論文の研究目的を下記のように設定する。

- (1) 観光・スポーツ省の内局であるタイ国政府観光庁、観光局の報告年報、政策概要、事業概要を対象とした文献調査により観光政策の変遷と考察し、時代・社会の変化と観光対策との対応関係を分析し、行政の役割を明らかにする。(3章)

次に、旅行者の観光実態「需要側」では、旅行者の発地と着地に着目した分析視点を下

記のように設定する。

- (2) タイ国民の個々人の観光行動の実際を把握するとともに、旅行形態間の競合や将来の旅行需要の推定を分析する。(4章)
- (3) アユタヤを対象地として、旅行者の観光地に対する期待・旅行行動や評価の実態を把握するとともに、再訪意向に影響を与える居住地等の個人属性をはじめとする要因を同定する。(5章)

以上のように、観光政策側、旅行者側の視点から分析を行い、今後さらにタイの観光振興するための留意点を明らかにする。

なお、本研究において用いる観光、観光振興等についての定義を下記のように定めるものとする。

#### (1) 「観光」の定義

観光の定義を明文化して整理しているものとしては、平成7年6月に出された観光政策審議会の答申「今後の観光政策の基本的な方向について」が挙げられる。この前文では、観光の定義を「余裕時間の中で、日常生活圏を離れて行う様々な生活であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とするもの」としており、「学ぶ」の要素が明確に示されている。

#### (2) 「観光行動」の定義

観光主体である観光者が観光中に行う個人的行動。

#### (3) 「観光者」、 「旅行者」の定義

世界観光機関(World Tourism Organization : WTO)が定めた「観光者」の定義は、娯楽やビジネス、その他の目的のために人々が、丸一年を超えない範囲内で継続的に通常的生活環境以外の場所に旅行し、滞在する生活という用語である。しかしながら、一般的な認識と誤解があり、ビジネス目的で旅行する人も含めて観光者としている。そこで、WTOは、包括的観光者の定義に対応するものとして、「旅行者」という単語を、個人的な楽しみのために旅行する人に使用している。

#### (4) 「評価」の定義

観光主体が行う、観光対象、観光行動に対して持つ印象。

#### (5) 「特性」の定義

人間のある類型が持つ特徴的な行動のパターン。

#### (6) 「観光政策」の定義

行政機関が、観光振興のために企画及び立案をする行政上の一連の行為についての方針、方策。

#### (7) 「観光振興」の定義

ある地域を対象とした場合、さまざまな観光関連分野への取り組みによって、その地域の居住者の旅行行動が活性化すること、ならびにその地域への来訪者数や消費金額の増加、

地域イメージの向上が図られることを「観光振興」と定義する。それによって、対象地域の住民や観光関連産業における所得、利益の向上や地域の賑わいの創出などが期待される。

### 1.3 本論文の構成

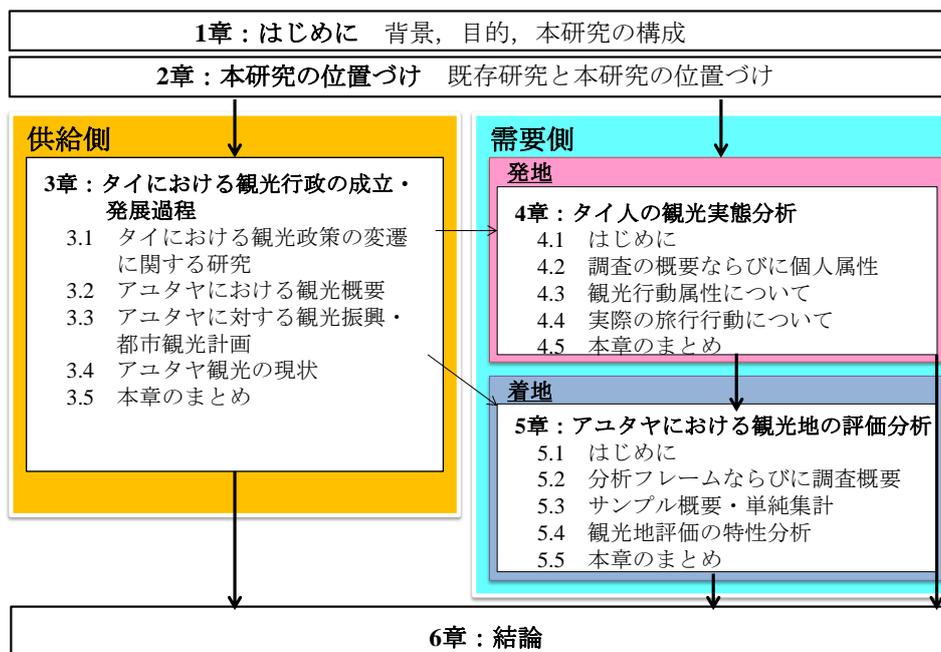


図 1-2 本研究の論文構成

前節の目的のもと、第6章からなる本研究の構成について述べる。

第2章は、既存研究のレビューを通じて、これまでの研究の不足点を明らかにし、本研究の位置づけを示す。

第3章は、供給側を対象とした目的(1)に関する分析を行う。これは、目的(1)に相当する段階であり、タイにおける観光行政の成立・発展過程を明らかにする。そのために、タイにおける観光政策に関する基礎的分析(3.1節)を行い、初期から現在に至る政府、観光機構の発展過程をとりあげ、タイの観光政策が時代の変遷とともに変化する社会環境やマーケットに対応して、どのような発展を遂げたか、それを明らかにする。さらに、中央政府以外については、旅行者の着地面としてのタイ・アユタヤを対象とするタイの伝統文化的な観光地の概要(3.2節)と、アユタヤに対する観光振興・観光地整備に関する計画に着目する(3.3節)。最後にアユタヤと他のタイ観光地、アジア都市観光地との比較し、アユタヤ観光地のポジショニングを明らかにする(3.4節)。

つづいて、第4章、第5章では、需要側に着目した目的(2)、(3)に関する分析を行う。

観光振興定義に基づいて、地域住民の旅行行動活発化のために、休暇の増加、所得の向上、道路整備をはじめとするインフラ整備、国外旅行容易化のためのビザ緩和などの施

策が考えられる。また、ある地域への来訪者数や消費金額の増加のために、旅行者へより魅力的な観光地整備、来訪時の満足度向上、再訪意向の向上が必要不可欠と考えられる。前者については第4章で、後者については第5章と対応して分析を行っている。そして、旅行者が円滑で質の高い行動を行うための条件整備とともに、旅行に関連するステークホルダーによる事業が円滑に進められるための政策、制度などをあわせて進める必要があり、これらについては第3章で着目する。

具体的に第4章では、タイ国民を対象としながら、個人属性と観光行動の実態を分析対象とする。今後、予想される一層の経済発展変化に関して、旅行形態間の競合や将来の旅行需要の推定を分析する。

第5章は、タイ・アユタヤを対象として、来訪者の属性、行動や評価の実態を把握するとともに、再訪意向に影響を与える居住地などの個人属性をはじめする要因を明らかにする。さらに、観光地整備のため、来訪者セグメントごとを分析し、効果的な施策を明らかにするためCSポートフォリオ分析を行う。

第6章では、各章の研究成果から、観光振興に応じる施策への提案をまとめ、本研究の結論及び今後の課題を述べる。

---

## 第 1 章 参考文献

- <sup>1</sup> マーチン オッパーマン, ケー・スン チョン : 途上国観光論, 学文社出版, 1999
- <sup>2</sup> 荒木麻里子 : タイの観光産業と解決すべき諸問題 : 経済開発の光と影 : アジア社会の変容と生活基盤の再生を目指す NGO 活動を中心に, 国學院大学, 第 5 章, 2003
- <sup>3</sup> クリストファー・フレイヴィン : 地球白書 2002-03, ワールドウォッチ研究所, 家の光協会出版, 2002
- <sup>4</sup> Pearce, D. G. : *Tourist Development*, Longman, p. 257, 1989.
- <sup>5</sup> Friedland, J. : Tourists stay away in droves, *Far Eastern Economic Review*, Vol. 155 No. 22, pp. 56-57, 1992.

## 第 2 章 既存の研究ならびに本研究の位置づけ

本研究では、タイにおける観光を対象として、「供給側」として観光政策、「需要側」として来訪者の両方の分析視点を設定する。具体的には、供給側では、社会経済状況の時代変化に基づいて国の観光政策が初まった1960年から現在に至る観光政策に対する取り組みの把握を行う。一方、需要側では、来訪者の発地における観光実態に関する行動、着地における評価特性をとらえる。

第2章では、これらの既存研究を示すとともに、本研究の位置づけを明確にする。

### 2.1 観光政策に関する既存研究

タイの観光全般に関する研究は、過去および将来におけるタイ観光開発に関する研究として Paradej<sup>1</sup>、タイ国政府観光庁設立 50 周年と世界経済変化の記録<sup>2</sup>、経済開発の初期段階で観光の拡充を果たしたタイを中心とする東南アジア諸国の事例研究がある。また、タイにおける観光取り込む方策やタイの経済成長に影響を与える観光産業に着目した研究として城前の研究<sup>3</sup>、タイのホテル産業における環境行動を対象とした研究<sup>4</sup>、タイ国の経済開発と観光産業の役割の研究<sup>5</sup>、観光地やリゾートの開発における環境問題の分析事例<sup>6</sup>など多岐にわたる。また、観光資源として文化遺産に着目したタイにおける文化遺産管理とツーリズムのスコータイ歴史公園を事例として研究<sup>7</sup>、タイにおける国家遺産と世界観光に論じたもの<sup>8</sup>、タイの古都としてアユタヤにおける建築遺産を解釈した Patiphol<sup>9</sup>がある。

観光政策に関するものでは、航空利用動向と観光政策を論じた塩谷・中条<sup>10</sup>、鎌田<sup>11</sup>、東京都の観光政策の変遷に関する研究した野瀬<sup>12</sup>、タイにおける観光地開発に関する政策を論じた Niti<sup>13</sup>、タイにおける国際観光開発の分析<sup>14</sup>、ロングステイの定義、観光政策とロングステイ観光の位置づけ、定年退職者のロングステイ先としてのタイの選択要因、日本ロングステイ財団のタイロングステイに関する意識を検討した原田<sup>15</sup>などの研究がある。

一方、観光政策の評価に関しては、観光と交通産業の政策を収益管理・イールドマネージメントから論じた藤井<sup>16</sup>、タイで施行している投資奨励法と外国企業規制法を取り上げ、外国企業の導入戦略および規制を論じた城前<sup>17</sup>、タイにおける観光商品開発の政策と計画を論じた Manat<sup>18</sup>など、さまざまな蓄積がみられる。

しかしながら、タイの観光政策、観光行政・制度の変遷を通史で検証したものはみられない。そこで、本研究は初期 1960 年にタイ観光局を設置から現在までのタイの観光政策の変遷を把握する点が特徴である。

### 2.2 旅行者の評価特性に関する既存研究

需要側における分析では、個人の観光行動の実態に把握する。さらに、旅行者として発地と着地の2つの面があり、いずれとも分析対象としながら、旅行者の個人属性、観光行動

と観光地評価を行う。

#### (1) 観光行動歴史と観光行動・観光動機からの研究の流れ

人類の観光行動の起源の研究では、Feifer M. は観光行動の初期の段階が特権階級のみ可能であり、200年間続いた古代ローマ帝国によって各地の観光施設が充実しイングランドのハドリアヌスの長壁からユーフラテス川まで安全に旅行できたことなどを指摘している<sup>19</sup>。また、同様にフェファールは13世紀から14世紀にかけて巡礼が盛んになり、ホスピス(hospice)がネットワーク産業として成長し、旅行案内書の大量発行により旅行が組織化され、ヴェネチアからパレスチナまで組織化されたツアーが行われたことを指摘している<sup>20</sup>。Adler J.<sup>21</sup>の研究からも、しばしばパンフレットなどで見るグランドツアーと言われるものの起源が、貴族や階級の子弟が行った家族形態として17世紀の終わりに確立されたことが明確になっていると指摘した。このような観光行動の歴史は、種族・民族・地域・国によって異なることを明らかにした<sup>22</sup>。

さて、観光行動に関する研究する方法では、AIOアプローチ、VALS、価値観アプローチという方法がある。AIOアプローチは、ライフスタイル研究の中で1960年代に登場し、消費者のライフスタイル特性を、AはActivity:活動性、IはInterest:関心、OはOpinionという3次元でとらえようとするものである。VALS(Values and Lifestyles)は、1970年代にStanford調査研究所が作り出した生活領域全体に関わる一般的ライフスタイルによる消費者のセグメンテーションの新しい方法<sup>23</sup>で、一般的なライフスタイル研究が行動的変数を主に個人特性を測ろうとするのに対し、この方法はより内面を規定している価値観を測定することで個人を分類する。観光行動研究では、Schul and Cromptonが、AIOアプローチから、旅行に関するライフスタイル次元を見出し、デモグラフィック特性と比較し、旅行前外部情報探索行動(頻度や期間)の説明力はライフスタイルの方が高いと結論づけている<sup>24</sup>。Shihは、VALSによるライフスタイル類型と旅行行動との関連を分析し、ペンシルバニア州に純観光目的で来訪する旅行者の旅行目的地の選択基準の重要度とVALSの類型間で比較分析をしている<sup>25</sup>。Pitts and Woodsideは、旅行の目的地を選ぶ基準と観光地の属性の重要度評価に基づいて対象者をクラスター分けし、そのクラスターが、RokeachのRokeach Value Scale(RVS)で測定した評価特性によって79%判別でき、それぞれの評価特性にかかる係数が各ベネフィット・セグメンテーションの特徴を示唆していると述べている<sup>26</sup>。

一方、消費者行動論では、購買行動を「想起から廃棄までの一連の活動」ととらえ、多くの購買意図形成モデルが提示され、共分散構造分析などを用いた実証分析の研究蓄積がある。共分散構造分析は、1960年代の後半に統計学者Jöreskogが確証的因子分析(Confirmatory factor analysis)として提唱したのがその始まりである。そして、共分散構造(Analysis of Covariance Structures)なる言葉は、既にBockとBargmannがその2,3年前に指摘している。共分散構造分析とは、例えばJöreskog and S"Orbom自身も指摘しているように、確証的因子分析、パス解析、時系列データに対する計量経済学的モデル、重回帰分析、分散分析、多変量分散分析等や、複数の共分散行列、相関行列、因子パターンなどの等質

性の検定、平均値の構造についての推定などまで扱える有用な統計解析の方法であり、仮想評価法の適用を検討したものである<sup>27</sup>。その前者の購買意図形成モデルをもって、古川・金は、中国の消費者を対象に、反日感情下における日系製品の購買意図の形成パターンを分析している<sup>28</sup>。また、高橋は、Howard の消費者意思決定モデルの構成概念である3つの変数を1)態度 2)確信 3)購買意図に基づいて、通信販売における購買意思決定を分析している<sup>29</sup>。

以上のような消費者行動モデルを観光へ適用した研究としては、Correia and Pimpao が、ポルトガル人の南米とアフリカへの旅行を対象に、観光地選択の意思決定を分析している<sup>30</sup>。そのモデルは、動機や満足をPush (内的)・Pull (外的) で分類することであり、Push は自発的な要因で、Pull は観光地の特性が旅行者の期待を高めることと述べている。また、金原達夫、金子慎治、藤井秀道が、タイのホテル産業における環境行動をアンケート調査し、共分散構造分析を適用して明らかにしたことは持続的な社会の構築に向けた企業の環境行動を促進することに理論的な裏付けを与える点で重要な意義があり、認知指標の地域別及び規模別の比較分析結果から、小規模企業がより政府規制を強く知覚していると述べている<sup>31</sup>。

一方、心理学的による観光行動は、心理学的には主体面の要因となり、それを取り巻く環境的な要因との関数であると説明される。主体的な要因とは、観光欲求や動機であり、環境要因には時間、金銭、交通手段や情報などが挙げられる。観光者行動の主体的な要因について、理論的な枠組みを提供しているのは心理学（観光心理）である<sup>32</sup>。

前田は、時間的、あるいは金銭的な余裕が生まれることによって観光への欲求がわき起こると述べている<sup>33</sup>。また逆に、欲求が生じることによって金銭や時間といった観光に必要な条件を整えるための努力をすることもある。観光への動機や欲求は、行動の生起を促進する重要な要因の1つであると考えられる。人に観光行動を起こさせ、特定の目的地に導いていく心理的要因は旅行者モチベーションといわれる。旅行者モチベーションは、Push 要因とPull 要因から成る複合的な概念である<sup>34</sup>。前者は様々な余暇活動がある中でも特に観光行動にかりたてる働きをする動機や欲求であり、具体的には目的地を選ばせるようにはたらく観光地のイメージや魅力のことである。Push 要因にあたる観光動機に関する研究は、Pearceが、Travel Career Ladder と呼ばれる観光動機の5段階モデルを提唱している<sup>35</sup>。Pearceによると、人々の観光動機は5段階のトラベル・キャリアを「1」リラックス欲求「2」安全・刺激欲求「3」関係欲求「4」自己発展欲求「5」自己実現欲求のいずれかに位置づけられ、その段階は個人のライフサイクルや旅行経験によって変動するという<sup>36</sup>。佐々木も同様に、観光動機は5次元の特性に集約できるとしている。それらは、逃避やリラックスに関わる「緊張解消」、レクリエーションや楽しみに関わる「娯楽追求」、人間関係の拡大や強化に関わる「関係強化」、異文化への理解や知識に関わる「知識増進」、自尊心の向上や自己成長に関わる「自己拡大」である<sup>37</sup>。Travel Career についての実証研究では、Ryanがイギリス人旅行者を対象とした調査から、過去の旅行経験よりも個人の年齢が観光動機に影響

することを示している<sup>38</sup>。国内日本では、林・藤原が日本人海外旅行者を対象とした調査から、「刺激性」、「文化見聞」、「現地交流」、「健康回復」などの7因子を見出し、それら観光動機は、年齢を重ねるにつれて刺激性や意外性といった新奇性への欲求から文化や自然を求め本物性への欲求に変化することを明らかにしている<sup>39</sup>。

観光行動研究では、観光行動に対する動機の中でも新奇性欲求(Novelty Seeking)と呼ばれる新しい刺激や変化に対する欲求である。それは、人々を観光行動へとかりたてる根源的な心理的要因と考えられる<sup>40,41,42</sup>。そして、旅行者の選択行動と新奇性欲求との関係に着目した研究では、個人が新奇性欲求を求める傾向にあるのか、それとも回避する傾向にあるのか、という個人特性の相違が目的地や旅行形態の選択を規定することが明らかにされてきたCohen Mo, Howard and Havitz Plogの研究である。また、Pizam, Reichel and Uriely<sup>43</sup>は、個人の新奇性欲をZuckermanのSensation-Seeking Scale (SSS)で測定し、SSS得点が高い人は、独自に計画を立てる、未知の土地に旅行することを好む、旅行先では危険なスポーツに挑戦するという特徴である。一方、SSS得点が低い人は、パッケージ旅行に参加する旅行中は熟知的で快適な環境を好む、文化遺産や自然のある土地への訪問を好むといった傾向があることを報告している。

## (2) 国際観光における文化交差的研究の流れ

Hofstedeの『多文化世界』の5つの文化次元および他の文化交差的と観光行動研究国際的な文化比較という観点では、経営文化の国際比較の分野において、IBM社における50カ国11万6000人の従業員の価値観を比較することで、仕事に関連する国民文化の差異を求め、4つの文化次元を明らかにした(Hofstede, 1980)『多文化世界』(Hofstede, 1991)がある<sup>44</sup>。ただし近年になり、Michael Harris Bondが東洋的な思考に基づいて発見した5の次元を加え、5つの次元から考察を行っている<sup>45</sup>。

Hofstedeの研究は、組織文化論だけでなく国際経営論の分野にもまたがり、その後の多くの研究に強い影響を及ぼしている。Hofstedeの研究を引用している論文のメタ分析を行ったSondergaardによると、1980年から1993年9月までの間にHofstedeの4つの文化次元を引用した論文は1,036件あり、きわめて高い被引用数となっている。また、文脈は異なるものの4つの次元を適用しようとした研究は274件であったという。Hofstede et al. (1990)も、2008年8月末時点での社会科学引用指標(Social Science Citation Index: SSCI)が291件と、Hofstedeの文化研究は、国民文化、組織文化双方の領域で強い影響を与えてきた<sup>46</sup>。

その5つの次元による観光行動と文化差異の比較に着目した研究では、Hofstedeの研究の前提となっている文化の概念や方法論を中心に文化差異による観光者行動の考察が広がっている。

さらに、同じ国籍中の観光者を利用言語別に比較した研究事例としては、Sussmann and Rashcovskyは、フランス語圏と英語圏のカナダ人に、旅行回数、情報源、宿泊施設の評価、観光地の評価を聞き、その類以点、相違点を明らかにしている<sup>47</sup>。同じカナダにおける言語

別の文化交差的な研究例では、Richardson and Crompton が、北米の休暇目的地の観光要素に対する認知に関する文化要因の影響を示している<sup>48</sup>。Truong and King が、ベトナムへ観光旅行で来訪しているゲストである外国人観光者（アメリカ、フランス、中国）とホスト側ベトナム人両方にRokeach Value Survey (Rokeach, 1973) によって価値観を調べ、Argyle (1986) の指標を使い、人間関係の規則を測定し、異文化間の違いの比較を行い、Parasuramann et al.によって開発されたサービスの質を測る10指標によりベトナム人ホストの提供するサービスの認知・満足度測定、ベトナムの31観光要素の評価、再訪意向、知り合いにベトナムを紹介するかを調査項目にした取り組みが行われている<sup>49</sup>。

### 2.2.1 タイにおける観光実態に関する既存研究

タイの国内観光行動に着目した研究は、個人属性、収入、旅行中に実施する活動、旅費などによるタイ国内観光行動構造を明らかにしたもの<sup>50</sup>、タイ人国内旅行の意思決定に影響を与える要因に関するもの<sup>51</sup>、高所得者の国内観光客行動を研究した事例もあるもの<sup>52</sup>、タイの国内観光行動構造に着目して性年齢階層や収入などの個人属性との関連性を把握した分析は十分行われていないと考えられる。また、タイ統計局とタイ国政府観光庁は、2009年に初めてタイ国民観光行動調査を実施しており、前年度に実施した観光旅行の回数、目的、目的地、旅行形態、同行者、利用交通機関、利用情報媒体、利用宿泊施設、旅費などの旅行実績が聞き取られているもの<sup>53</sup>、その分析は単純集計が主なもので、データの公表も限定的である。

以上から、独自に調査を行い、日帰りから国外旅行までの旅行形態を包含した分析が必要と考えられる。

さて、既存研究と本研究の位置づけであるが、観光行動を中心とした研究は、個人属性によって異なることが考えるが、例えば、Woodside and Dubelaar は、消費購入システム(POS)を用いて基本的観光行動に関する理論構築を述べている<sup>54</sup>。個人属性による宿泊観光旅行発生量への影響を分析したもの<sup>55</sup>、国内旅行に着目として、インドネシア国民の観光行動と個人属性の関連性に基づいて、観光目的地イメージへの発展に関する要因を明らかとなった研究<sup>56</sup>。観光旅行発生に対する地域格差は個人属性によっても異なると考え、性別や年齢、所得などの個人属性セグメント別に分析した事例<sup>57</sup>がある。また、安居、田村は、地域格差の要因を県民所得、年齢代による海外観光旅行発生に与える要因を説明している<sup>58</sup>。西村、森地は、居住地による観光目的地選択行動の相違を分析している<sup>59</sup>。経済状況の影響を明らかにしたもの<sup>60</sup>。行動変化を世代、時代、年代による影響に分解したものなどがみられる<sup>61</sup>。

さらに、Fodness による人の行動や態勢による旅行を意思決定過程に影響を与える研究したもの<sup>62</sup>。Beerli and Martin による観光者の個人属性と観光地に対するイメージの関係を明らかにした研究<sup>63</sup>、野瀬による日光・箱根における外国人来訪者と日本人来訪者を対象として、来訪者の個人属性、居住地、行動や評価特性を明らかにした研究<sup>64</sup>、タイ・アユタヤを対象として、来訪者の個人属性や居住地によって観光地評価特性を明らかにした研究<sup>65</sup>事例がある。本研究はこれらと同様のアプローチであり、観光行動と個人個人属性などで来訪者をセグメントした分析から、より詳細な特性が把握できるものと考えられる。

## 2.2.2 アユタヤにおける観光地の評価分析に関する既存研究

観光行動は、居住地をはじめとする個人属性によって異なることが考えられるが、例えば、Mullerは、国際観光において、文化による価値観の相違が旅行者の休暇目的地の選択や海外旅行に関する消費行動に影響を与えるため、国際観光者のセグメントを描き出すために文化交差的研究は有効であると述べている<sup>66, 67</sup>。

この文化交差的研究では、例えばTurner and Reisingerは、外国人旅行者とオーストラリア人観光サービス提供者の相互作用に着目しながら、観光満足度の構造分析を行っている<sup>68</sup>。また、Armstrong et al.<sup>69</sup>は、それまでアメリカ国内のホテルで用いられていたサービス評価指標を香港の3つのホテルに適用し、多文化の宿泊客を対象として、宿泊前の「期待」の評価や満足への影響を調べている。この研究の中で、Hofstede<sup>70</sup>の文化グループ分けによって重回帰分析を行い、決定係数で説明力を比較している。そして、Beerli and Martinは、旅行者の個人属性に着目されて旅行先イメージの影響要因に関する研究が行われている<sup>71</sup>。野瀬・古屋は、日光・箱根における外国人来訪者と日本人来訪者を対象として、来訪者の個人属性、居住地、行動や評価特性を明らかにした<sup>72</sup>。以上のように、国籍などで来訪者をセグメントした分析から、より詳細な特性が把握できるものと考えられる。

一方、Dannは、観光研究における国籍、居住地をセグメントの変数とする限界を指摘し、それ以外の要因の影響が同じではない対象群を比較して導かれる知見に対する有効性に疑問を呈している<sup>73</sup>、また、Bystrzanowskiの研究のように、国籍や居住地よりも重要だったのは、旅行頻度、滞在期間、再訪意向であるとの事例もある<sup>74</sup>。

さて、観光者の評価や満足度についての研究では、心理学的研究の観光動機に着目した研究も多い。Maslowの欲求階層理論<sup>75</sup>、旅行キャリア<sup>76</sup>、発動要因と誘引要因<sup>77</sup>などに着目した研究がなされている。これらの先行研究では、個人属性や国民性及び文化的な特徴が観光動機や旅行先での行動に影響を与えていることが指摘されている<sup>78,79</sup>。また、旅行者の評価や満足度についての研究をみると、Pizam et al.による旅行目的地での評価特性、満足度への影響要素を明らかにした研究<sup>80</sup>、目的地に対する評価から当該旅行の全体的な満足度を予測した研究<sup>81,82,83,84</sup>、事前期待と来訪後評との比較した研究<sup>85,86</sup>、古屋による目的地への旅行者の事前期待とのギャップから旅行満足度を測定した研究がある<sup>87</sup>。Woodside and Jacobs は、ハワイ訪問中のカナダ、アメリカ、日本の旅行者を対象に、旅行経験を多面的に調査し、3国の訪問者の評価に有意差が認められ、積極的評価の内容の差異による特徴を導いている<sup>88</sup>。

一方で、旅行の訪問地、行動内容などの特定の経験に関する事例分析から、一般的知見や体系的知識を導き、旅行満足度の一般構造を探る方向の必要性を佐々木は指摘している<sup>89</sup>。観光地のイメージによって、来訪者の事前期待、来訪中の行動、来訪後の評価及び再訪意向に影響を与えると述べている<sup>90,91</sup>。また、観光者の満足度に着目した研究として、Chigako et al.は、ニセコにおける観光政策策定のため、外国人来訪者の評価と旅行目的地選択要因をもとに、CSポートフォリオ分析を用いて明らかにしている<sup>92</sup>。

しかしながら、再訪意向と来訪者特性との関連性に着目し、定量的な再訪意向評価の構造を明確にした研究事例は少ない。そこで、本研究では、観光地における来訪者の行動や評価特性を明らかとすることを目的とする。具体的には、観光地への再訪意向を居住地と個別の評価項目の満足度との関連性に着目しながら、分析を行うものとする。

---

## 第 2 章 参考文献

- <sup>1</sup> Payakawichean Paradej : 過去及び将来におけるタイの観光開発, *E-TAT Tourism Journal*, pp.1-16, 2006
- <sup>2</sup> Market Research Division of Tourism Authority of Thailand: タイ国政府観光庁設立 50 周年と世界経済変化の記録, *E-TAT Tourism Journal*, pp.1-4, 2007
- <sup>3</sup> 城前奈美: 途上国における経済開発と国際観光 - 東南アジア諸国の経験 -, 博士学位論文要旨, 桜美林大学大学院, 2007
- <sup>4</sup> 金原達夫・金子慎時治・藤井秀道: 国際開発研究, 第 18 巻第 1 号, 2009
- <sup>5</sup> 城前奈美: タイの経済開発と観光産業の役割-貯蓄・投資ギャップの視点から-, 日本観光学会誌第 36 号, 日本観光学会, pp.40-47, 2000
- <sup>6</sup> Boonyobhas Angsana : Tourism planning concept for Ko Samui, Thailand : A sustainable environment development approach, Doctoral Thesis, UMI, pp.13-18, 1996
- <sup>7</sup> 橋爪紳也・神田考治・清水苗穂子: タイにおける文化遺産管理とツーリズム - スコータイ歴史公園を事例として -, 国立民族学博物館調査報告 61, pp.83-95, 2006
- <sup>8</sup> Maurizio Peleggi: National Heritage and Global Tourism in Thailand, *Annals of Tourism Research*, Vol.23, No.2, pp.432-448, 1996
- <sup>9</sup> Patiphol Yodsurang: Architectural Heritage Interpretation; Case Study of The Historic City of Ayutthaya, The 1<sup>st</sup> International Graduate Study Conference, Silpakorn University pp.17-36, 2011
- <sup>10</sup> 塩谷さやか・中条潮: 「観光立国」への疑問-インバウンド観光政策と関連交通政策におけるオープン化の必要性 (統一論題 観光と交通), 交通学研究 49, 日本交通学会, pp. 31-40, 2005
- <sup>11</sup> 鎌田裕美: 航空を利用する観光客の動態と観光政策のあり方, 2005 年度航空政策研究会研究助成論文集, 航政研シリーズ 465, 航空政策研究会, pp. 1-21, 2006
- <sup>12</sup> 野瀬元子: 東京都の観光政策の変遷に関する研究, 東洋大学院紀要第 47, pp.55-89, 2010
- <sup>13</sup> Wirudchawong Niti: Policy on Community Tourism Development in Thailand, グローバル化とアジアの観光研究会, pp.13-26, 2012
- <sup>14</sup> Siriporn McDowall and Youcheng Wang: An Analysis of International Tourism Development in Thailand : 1994-2007, *Asia Pacific Journal of Tourism Research*, Vol.14, Issue4, pp.351-370, 2009
- <sup>15</sup> 原田優也: タイのロングステイ観光の現状と課題, 産業総合研究, Vol.15, pp.119-135, 2007
- <sup>16</sup> 藤井秀登: イールド・マネジメントと観光・交通産業, 明大商學論叢 89(1), 明治大学商学研究所, pp. 75-89, 2000
- <sup>17</sup> 城前奈美: タイにおける観光産業開発 - 投資奨励と外資規制 -, 長崎国際大学論議第 8 巻, pp.75-84, 2008
- <sup>18</sup> Chaisawat Manat: Policy and Planning of Tourism Product Development in Thailand : A proposed model, *Asia Pacific Journal of Tourism Research*, Vol.11, Issue1, pp.1-16, 2006
- <sup>19</sup> Feifer, M.: 'Going Place', London, Macmillan, 1985
- <sup>20</sup> 前掲 19
- <sup>21</sup> Adler J. : Origins of sightseeing, *Annals of Tourism Research*, Vol.16, pp.7-29, 1989
- <sup>22</sup> 槻本邦夫: 観光行動における消費と欲望の構造, 大阪明浄大学紀要第 6 号, pp.43-53, 2006
- <sup>23</sup> 杉本徹雄編著: 消費者理解のための心理学, 福村出版, p.185, 1997
- <sup>24</sup> Schul, P. and Crompton, J.L.: Search Behavior of International Vacationers: Travel-Specific Lifestyle and Sociodemographic Variables, *Journal of Travel Research*, pp.25-30, 1983
- <sup>25</sup> Shih, D.: VALS as a tool of tourism market research: The Pennsylvania Experience, *Journal of Travel Research*, pp.2-11, 1986
- <sup>26</sup> Pitts, R.E. and Woodside, A.G.: Personal Values and Travel Decisions, *Journal of Travel Research*, pp.20-25, Summer 1986

- 27 <http://www.aichi-gakuin.ac.jp/~chino/multivar/chapter5/sec5-1.html>, Viewed on 2011.1.5
- 28 古川一郎・金春姫:「反日感情下の消費者行動モデル(その他1)」, 一橋商学論叢, Vol.3, No.1, pp.35-47, 2008
- 29 Howard, J. A. : *Consumer Behavior in Marketing Strategy*, Englewood Cliffs, NJ; Prentice Hall, 1989
- 30 Correia, A. and A. Pimapao : Decision-making processes of Portuguese tourist traveling to South America and Africa, *International Journal of Culture, Tourism and Hospitality Research*, Vol. 2, No 4, pp. 330-373, 2008
- 31 金原達夫・金子慎治・藤井秀道: タイのホテル産業における環境行動, 国際開発研究, 第 18 巻, 第 1 号, pp.53-61, 2009
- 32 水野一: 国際観光への異文化間コミュニケーション論的アプローチ, OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ, pp.99-111, 2009
- 33 前田勇: 観光とサービスの心理学, 学文社, p.38, 1995
- 34 林幸史: 観光行動の促進要因と阻害要因—JASS-2010のデータを用いて—, 日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集, JASS Research Series No.8, pp.59-69, 2011
- 35 Pearce, P.L. : *The Ulysses factor: Evaluating visitors in tourist settings*, Recent Research in Psychology, Springer-Verlag Publishing, 1988
- 36 前掲 35 に同じ
- 37 佐々木土師二: 「旅行者行動の心理学」, 関西大学出版部, 2000
- 38 Ryan, Chris : The travel career ladder : An Appraisal, *Annals of Tourism Research*, 25(4) : 936-957, 1998
- 39 林幸史・藤原武: 訪問地域, 旅行形態, 年令別にみた日本人海外旅行者の観光動機, 実験社会心理学研究, Vol48, No1, pp.17-31, 2008
- 40 Crompton, J.L. : An assessment of the image of Mexico as a vacation destination and the influence of geographical location upon that image, *Journal of Travel Research*, Vol.17, No.4, pp.18-23, 1979
- 41 Iso-Ahola, S.E. : Toward a social psychological theory of tourism motivation: A rejoinder, *Annals of Tourism Research*, Vol.12, No.2, pp.256-262, 1982
- 42 Lee, T. H., and J. L. Crompton . : Conceptualizing and Measuring Novelty Seeking in Tourism, *Annals of Tourism Research*, Vol.19, No.4, pp.732-751, 1992
- 43 Pizam, A., Reichel, A., and Uriely: Sensation seeking and tourist behavior, *Journal of Hospitality & Leisure Marketing*, 9, pp.17-33, 2002
- 44 Hofstede, G. : *Cultures and Organizations: Software of the Mind*, New York: McGraw-Hill, 1991.
- 45 The Chinese Culture Connection : Chinese values and the search for culture-free dimensions of culture. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 18(2), pp.143-164, 1987
- 46 佐藤一: 国民文化と組織文化: Hofstedeは何を測定したのか?—経営学論講Hofstede(1991)—, 赤門マネジメント・レビュー7巻11号, pp.821-832, 2008
- 47 Sussmann, S. and Rashcovsky, C. : A Cross-Cultural analysis of English and French Canadian's vacation travel Patterns, *International Journal of Hospitality Management*, Vol.16, No.2, pp.191-204, 2005
- 48 Richardson, S. and Crompton, J.L. : Cultural variations in perceptions of vacation attributes, *Tourism Management*, pp.128-137, June, 1988
- 49 Truong, T. and King, B., Comparing Cross-Cultural Dimensions of the Experiences of International Tourists in Vietnam, *Journal of Business Systems, Governance and Ethics*, Victoria University, Australia, Vol.1(1), pp.65-74, 2006
- 50 Nawarat Phlainoi: รายงานการวิจัยพฤติกรรมนักท่องเที่ยวภายในประเทศของนักท่องเที่ยวชาวไทย , *e-TAT Tourism Journal*, Vol.4, pp.23-33, 1995
- 51 Factors Affecting the Decision Making of Thai Tourists to Favor Travelling within the Country, Chiang Mai University, [http://library.cmu.ac.th/digital\\_collection/etheses/](http://library.cmu.ac.th/digital_collection/etheses/), Viewed on 2014.2.5

- 52 Information Technology Department Marketing Database Group, Tourism Authority of Thailand: โครงการศึกษาวิจัยพฤติกรรมนักท่องเที่ยวกลุ่มผู้มียาได้สูงสำหรับนักท่องเที่ยวคนไทย, *e-TAT Tourism Journal*, Vol.2, 2005
- 53 National Statistical Office of Thailand, <http://service.nso.go.th/nso/web/survey/surpop2-3-5.html>, Viewed on 2014.1.11
- 54 Woodside A. and Dubelaar, C.: A General Theory of Tourism Consumption Systems, *Journal of Travel Research*, Vol.40, pp.120-132, 2002
- 55 古屋秀樹, 兵藤哲朗, 森地茂: 発生回数の分布に着目した観光交通行動に関する基礎的研究, 第28回都市計画学会術研究論文集, pp.319-326, 1993
- 56 Khairani and Hapsari Setyowardhani: Analysis on Variables Affecting the Creation of Tourist Destination Image: Case Study on Domestic Tourists Visiting Yogyakarta between 2007 to 2009, *Asean Marketing Journal*, Vol.2, No. 1, pp.43-54, 2010
- 57 森地茂, 轟朝幸: 海外観光旅行需要の国内地域格差構造と将来行動, 運輸政策研究, Vol.4, No.1, pp.8-18, 2001
- 58 安居和博, 田村亨, 五十嵐日出夫: 国際観光交通の需要分析に関する研究, 土木学会第42回年次学術講演会講演集, No.4, pp.476-477, 1987
- 59 西村和夫, 森地茂, 岡本直久: 観光目的地選択行動の地域特性に関する研究, 土木学会第49回年次学術講演会講演集, No.4, pp.806-807, 1994
- 60 栗原剛, 岡本直久: インバウンド需要に影響を与える政策および外的要因の考察, 土木計画学研究論文集, Vol.27, pp.399-406, 2006
- 61 日比野直彦, 森地茂: 世代の特徴に着目した国内観光行動の時系列分析, 土木計画学研究・論文集, Vol.23, No.2, pp.399-406, 2006.11.
- 62 Fodness, D.: Measuring tourist motivation, *Annals of Tourism Research*, 21(3), pp.555-581, 1994
- 63 Beerli, A. and J. D. Martin: Tourists' characteristics and the perceived image of tourist destinations: a quantitative analysis - a case study of Lanzarote, *Spain, Tourism Management*, Vol.25, pp.623-636, 2004
- 64 野瀬元子, 古屋秀樹: 日光・箱根における外国人観光者と日本人観光者の評価特性分析, 都市計画学会論文, 43-3, pp. 595-600, 2008.
- 65 Krairerk KLAYSIKAEW, 古屋秀樹: タイ・アユタヤ来訪者の再訪意向分析, 第48回土木計画学研究発表会講演集, No.15(CD-ROM), 2013
- 66 Muller, T. E.: The two nations of Canada vs. the nine nations of North America: a cross cultural analysis of consumers' personal values, A cross-cultural analysis of consumers' personal values, *Journal of International Consumer Marketing*, Vol. 1, pp. 57-79, 1989.
- 67 Muller, T. E.: Using personal values to define segments in an international tourism market, *International Marketing Review*, Vol. 8, No. 1, pp. 57-70, 1991.
- 68 Turner, L. and Reisinger, Y.: *Cross-Cultural Behavior in Tourism: Concepts and Analysis*, A Butterworth-Heinemann Title Publishing, 2002.
- 69 Armstrong, R. W., Mok, C., Go, F. M. and Chan, A.: The importance of cross-cultural expectations in the measurement of service quality perceptions in the hotel industry, *International Journal of Hospitality Management*, Vol. 16, No. 2, pp. 181-190, 1997.
- 70 Hofstede, G.: *Cultures and Organizations: Software of the Mind*, McGraw-Hill, 1991.
- 71 Beerli, A. and Martin, J. D.: Tourists' characteristics and the perceived image of tourist destinations: a quantitative analysis - a case study of Lanzarote, Spain, *Tourism Management*, Vol. 25, pp. 623-636, 2004.
- 72 野瀬元子, 古屋秀樹: 日光・箱根における外国人観光者と日本人観光者の評価特性分析, 都市計画学会論文集, Vol. 43, No. 3, pp. 595-600, 2008.
- 73 Dann, G. M.: Limitations in the use of 'nationality' and 'country of residence' variables, In Pearce, D. and Butler, R. (Eds.), London: Routledge, *Tourism Research: Critiques and Challenges*, pp. 88-112, 1993.
- 74 Bystrzanowski, J.: *Tourism as a Factor of Change: A Socio-Cultural Study*, International Social Science Council, European Coordination Centre for Research and Documentation in Social Sciences, Vienna, Austria, p. 115, 1989.

- 
- <sup>75</sup> Pearce, P. L.: *Tourist Behavior: Themes and Conceptual Schemes*, Channel View Publications, p. 79, 2005.
- <sup>76</sup> Ryan, C.: The travel career ladder: An appraisal, *Annals of Tourism Research*, Vol. 25, pp. 936-957, 1998.
- <sup>77</sup> Kim, E. Y. J: Korean outbound tourism: Pre-visit expectations of Australia, *Journal of Travel & Tourism Marketing*, Vol. 6, pp. 11-19, 1997.
- <sup>78</sup> Pizam, A. and Sussmann, S.: Does nationality effect tourist behavior, *Annals of Tourism Research*, Vol. 22, pp. 901-917, 1995.
- <sup>79</sup> Kozak, M.: Comparative analysis of tourist Motivations by nationality and destinations, *Tourism Management*, Vol. 23, pp. 221-232, 2002.
- <sup>80</sup> Pizam, A., Neumann, Y. and Reichel, A.: Dimensions of tourist satisfaction with a destination area, *Annals of Tourism Research*, Vol. 5, No. 3, pp. 314-322, 1978.
- <sup>81</sup> Kozak, M. and Rimmington, M. : Tourist satisfaction with Mallorca, Spain, as an off-season holiday destination, *Journal of Travel Research*, Vol. 38, No. 3, pp. 260-269, 2000.
- <sup>82</sup> Aleage, J. and Garau, J. : Tourist satisfaction and dissatisfaction, *Annals of Tourism Research*, Vol. 37, No. 1, pp. 52-73, 2009.
- <sup>83</sup> Pearce, P. L.: *The Ulysses Factor: Evaluating Visitors in Tourist Setting*, Springer-Verlag, p. 86, 1988.
- <sup>84</sup> 牧野博明, 加藤浩徳, 藤田哲男, 小久保恵三 : 観光地特性を考慮した観光地魅力度の定量的評価に関する調査分析, 土木計画学研究・講演集, 第24巻2号, pp.509-512, 2001.
- <sup>85</sup> Ekinci, Y., Riley, M. and Chen, J.: Review of comparisons standards used in service quality and customer satisfaction studies : Emerging issues for hospitality and tourism research, *Tourism Analysis*, Vol.5, No.2-4, pp.197-202, 2001
- <sup>86</sup> Yoon, Y. and Uysal, M. : An examination of the effects of motivation and satisfaction on destination loyalty : A structural, *Tourism Management*, Vol.26, No.1, pp.45-56, 2005
- <sup>87</sup> 古屋秀樹 : 旅行満足度の構造分析, 第41回土木計画学研究・講演集, CD-ROM, 2010.
- <sup>88</sup> Wooside, A. G. and Jacobs, L. W.: Step two in benefit segmentation: Learning the benefits realized by major travel markets, *Journal of Travel Research*, Vol. 24, No. 1, pp. 7-13, 1985.
- <sup>89</sup> 佐々木土師二 : 旅行者行動の心理学, 関西大学出版, 2000.
- <sup>90</sup> Bigne, J.E., Sanchez, M.I. and Sanchez, J. : Tourism image, evaluation variables and after purchase behavior : Inter-relationship, *Tourism Management*, Vol.22, No.6, pp.607-616, 2001
- <sup>91</sup> Chen, C.-F. and Tsai, D. : How destination image and evaluative factors affect behavioral intentions?, *Tourism Management*, Vol.28, No.4, pp.1115-1122, 2007
- <sup>92</sup> Chigako, Y. and Kei'ichi, S. : Study on Methods for Analyzing User Needs: Survey on the Needs of Overseas Visitors for Tourism Policy Development, Hokkaido University, [http://www.gradus.net/new%20HP/kenkyuronbun/pdf/Study%20on%20Methods%20for%20Analyzing%20User%20Needs\(2005\).pdf](http://www.gradus.net/new%20HP/kenkyuronbun/pdf/Study%20on%20Methods%20for%20Analyzing%20User%20Needs(2005).pdf), Viewed on 2012.9.29, 2005.

## 第 3 章 タイにおける観光行政の成立・発展過程

### 3.1 タイにおける観光政策の変遷に関する研究

#### 3.1.1 はじめに

タイでは、1960年にタイ国観光局が独立行政機関として設立された。これがタイにおける観光立国政策の始まりであり<sup>1</sup>、1965年にはアメリカ・ニューヨークに海外観光事務所を初めて開設した。タイ国観光局の設立時、タイを訪れる外国人旅行者数は年間わずか8万1千人に過ぎなかった<sup>2</sup>。しかしながら、1970年代からは、タイ国政府の外資主による導経済発展政策、多国籍企業による投資などによって、経済規模が急速に拡大し、これと相まってタイの観光産業も着実な成長を遂げてきた。

さらに、1979年にタイ国観光局はタイ国政府観光庁に再編成され<sup>3</sup>、クーデター等の政情不安や経済危機などを乗り越えながら、1998年から2000年まで「AMAZING THAILAND」と称する観光誘致キャンペーンが実施された。この結果、タイを訪れる外国人旅行者数は、2001年には1,000万人の大台を超えた<sup>4</sup>。そして、観光収入も上昇し、経済成長と経済開発に占める観光の重要性が増大した。外貨収入のうち観光の占めの割合は最大であり、唯一恒常的な拡大を続けてきた主要外貨獲得源として注目されている<sup>5</sup>。

さらに、観光発展を成長するために、2002年には観光・スポーツ省が設置されて、タイ国政府観光庁も附置される。観光とスポーツの振興を行う所管組織であり、主に政策や規制を担当している。また、内局である観光局は、2002年10月に関係組織の再編により設立されたもので、タイ国政府観光庁より観光地の発展、観光産業の育成、持続可能な産業とするための国内向け標準ガイドの作成等の役割を引き継いでいる。これにより、タイ国政府観光庁は、海外向けプロモーションにより一層の重点を置くこととなる<sup>6</sup>。

国の観光振興に対する政府をはじめとする行政の取り組みは、国内外の社会経済環境をはじめとする外部要因、観光に係る組織などの内部要因の変化に対応し、政策過程が変化したと考えられる。

特に、観光政策の定義は、「行政機関が、観光振興のために企画及び立案をする行政上の一連の行為についての方針、方策」に基づいて、観光関連事業の実施主体と施策の種類（ハード、ソフト）との対応関係を表3-1のように示した。

その中で民間主体が行うものとして、旅行業、宿泊業によるサービスの提供があげられる。これらの事業に対して、観光行政は様々な規制によって品質保持、消費者保護などを行なっている。一方、行政自体が主体となるものとして、空港、鉄道、道路整備を始めとするインフラ整備と経済政策、プロモーションの実施などソフト対策が考えられる。これらの整理の中で、本論文では行政が実施主体となる行政行為に着目して分析することとなった。

表 3-1 観光関連事業の実施主体と施策の種類

	行政	民間
ハード	インフラ (空港, 鉄道, 道路)	
ソフト	経済 プロモーション	旅行業, 宿泊業 (サービス)

出典：筆者作成

本章では、① タイの観光政策の体系的な方針，方策に着目する．初期から現代に至る観光産業に関係がある政府，自治体による観光政策の発展過程をとりあげ，現在の観光行政の成り立ちを明らかにする．具体的には，観光・スポーツ省の内局であるタイ国政府観光庁，観光局の報告年報，政策概要，事業概要を対象とした文献調査により，タイの観光政策の変遷を明らかにする．そして，② タイの観光政策に影響を与える外部要因，内部要因もあわせて考察することを目的とする．

### 3.1.2 従来の研究と本研究の位置づけ

タイの観光全般に関する研究は，過去及び将来におけるタイ観光開発に関する研究として Paradej<sup>7</sup>，タイ国政府観光庁設立 50 周年と世界経済変化の記録<sup>8</sup>，経済開発の初期段階で観光の拡充を果たしたタイを中心とする東南アジア諸国の事例研究として城前<sup>9</sup>，タイのホテル産業における環境行動を対象とした研究<sup>10</sup>，タイ国の経済開発と観光産業の役割の研究<sup>11</sup>，観光地やリゾートの開発における環境問題の分析事例<sup>12</sup>，また，観光資源として文化遺産に着目したタイにおける文化遺産管理とツーリズムのスコータイ歴史公園を事例として研究<sup>13</sup>，タイにおける国家遺産と世界観光に論じたもの<sup>14</sup>，タイの古都としてアユタヤにおける建築遺産を解釈した Patiphol<sup>15</sup>，観光政策に関するものでは，現在，航空利用動向と観光政策を論じた塩谷・中条<sup>16</sup>，鎌田<sup>17</sup>，東京都の観光政策の変遷に関する研究した野瀬<sup>18</sup>，タイにおける観光地開発に関する政策を論じた Niti<sup>19</sup>，タイにおける国際観光開発の分析<sup>20</sup>，ロングステイの定義，観光政策とロングステイ観光の位置づけ，定年退職者のロングステイ先としてのタイの選択要因，日本ロングステイ財団によるロングステイに関する意識を検討した原田<sup>21</sup>などの研究がある．

一方，観光政策の評価に関しては，観光と交通産業の政策を収益管理・イールドマネージメントから論じた藤井<sup>22</sup>，タイで施行している投資奨励法と外国企業規制法を取り上げ，外国企業の導入戦略および規制を論じた城前<sup>23</sup>，タイにおける観光商品開発の政策と計画を論じた Manat<sup>24</sup>など，さまざまな蓄積がみられる．しかしながら，タイの観光政策，観光行政・制度の変遷を通史で検証したものはみられない．そこで，本章は初期 1960 年にタイ観光局を設置から現在までのタイの観光政策の変遷を把握する点が特徴である．

### 3.1.3 タイの観光行政, 政策の変遷

#### (1) タイの観光の概要

タイにおける国際観光の発端は12世紀にまで遡る。スコータイ王朝期に初めて、近隣諸国の中国や日本などと貿易交流が始まった。日本とタイ両国は、600年以上にわたる交流関係があり、江戸時代の朱印船貿易や山田長政の活躍でもみられるように、交易の歴史も長い<sup>25</sup>。アユタヤ王朝期の17世紀になると、ヨーロッパ商人や軍人、行政官などがタイを訪問するようになり、精巧な寺院に驚嘆することになる。黄金で覆われた美しい寺院の塔と膨大な富の蓄積により、タイは国際旅行者にとってハブ地点となっていく。

1900年代以降についてみると、1930年ごろまでは1年間にタイを訪れる外国人商用客や旅行者は5万人にとどまっていた。しかし、1960年代のベトナム戦争時には、冷戦体制の中で米国によるパイロット・ファームとしての援助資金の集中投下を受けていたタイは、アメリカのベトナム介入に積極的な協力体勢をおき、北爆のための米空軍の空港使用、後方休養地として前線兵士の受け入れを行っていた。

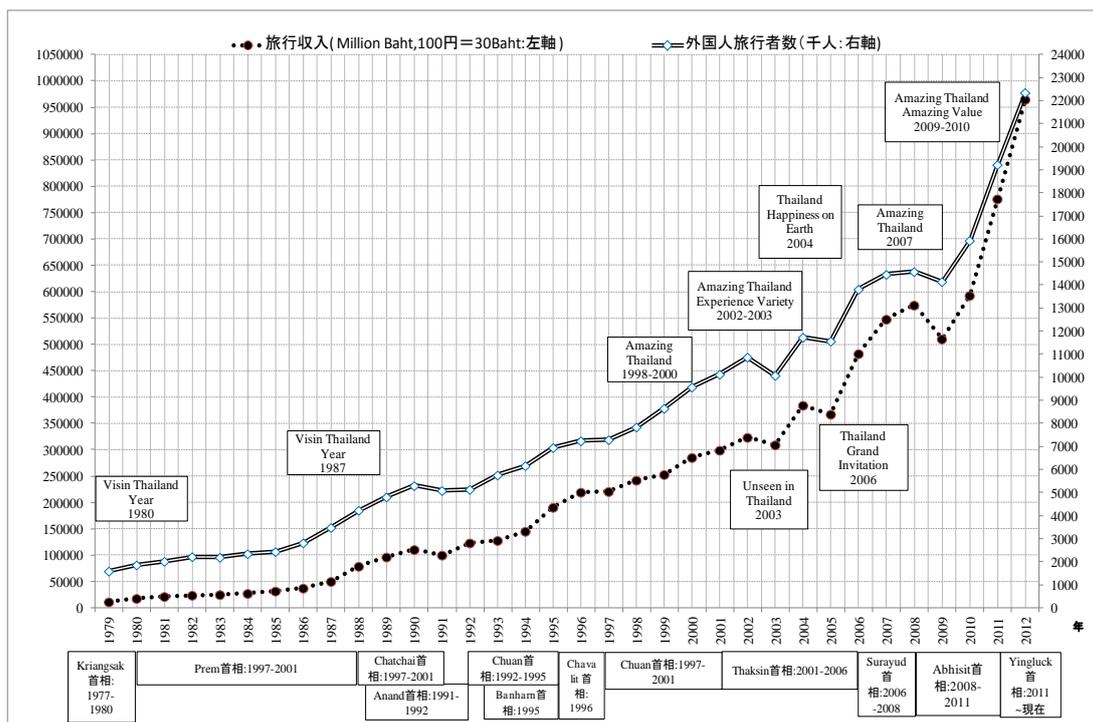


図 3-1 タイの首相在任期間・キャッチフレーズ, 来訪者外国人旅行者数, 旅行収入の推移  
出所: Tourism Authority of Thailand: Annual report 2003, 2004-2012

Asian Development Bank: Key Indicators for Asia and the Pacific<sup>26</sup>により, 筆者作成

この受け入れは、タイに莫大な外貨をもたらし、これに呼応して巨額の資本投資が観光インフラに対して行われた。その結果、米軍のベトナム撤退後、こうした観光インフラの

減価償却のために、タイは積極的な観光振興をはかっていくのであるが、それが現在に至るタイの観光事業の第一歩であった。特に、そのベトナム戦争時には、訪タイ外客数の中で日本人旅行者が非常に増加し、主要なタイの外国人旅行者のマーケットになっていた<sup>27</sup>。

図 3-1 に示すように訪タイ外国人旅行者数は、695 万人(1995 年)から 2,235 万人(2012 年)へと過去 18 年間で約 3 倍強増加しており、それにとまなう旅行収入も上昇している。タイの観光産業は、図 3-2 により 2006 年の同国 GDP の 6.1% を占める主要産業の 1 つとされており<sup>28</sup>、ホテル、エアライン、旅行代理店、観光物産や各種のサービスなど観光産業の裾野は広く、直接、間接の雇用規模も大きいと考えられる。

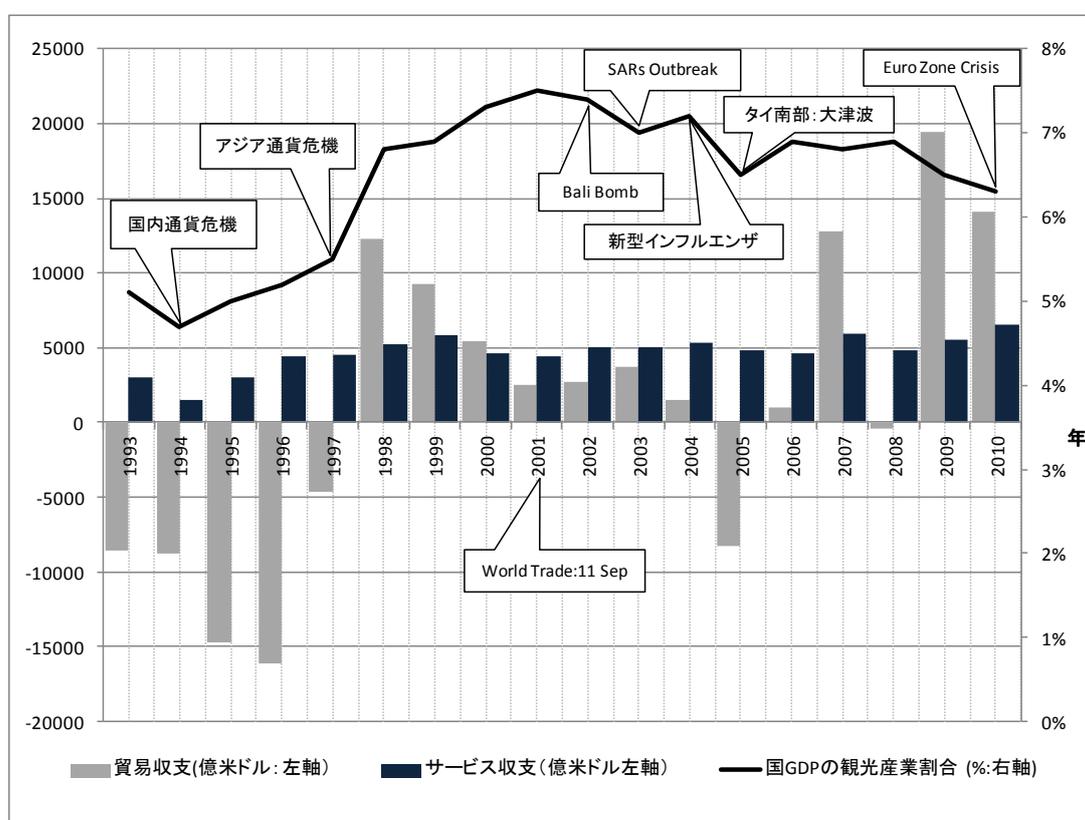


図 3-2 貿易収支、サービス収支と国 GDP の観光産業割合の時系列推移

出所：Bank of Thailand : Economic and financial,

World Travel and Tourism Council: Economic Impact Research により，筆者作成

## (2) タイの観光行政機構の変遷

タイの観光行政のはじまりを「タイ国政府観光庁設立 50 周年と世界経済変化の記録」<sup>29</sup>から確認すると、表 3-2 に示すように、観光局(TOT: Tourism Organization of Thailand)は 1960 年 3 月 18 日に観光促進のために首相府に所属する機関として設立された。タイ国政府観光庁(Tourism Authority of Thailand)は 1979 年に再編成されたタイ国政府観光庁の前身である。

しかし、国の行政組織における観光行政の位置付けが公社組織のため不明確だった。そのため、タイ国政府観光庁の職員が自身の職権に属さないさまざまな職務（特に観光関連のインフラ施設整備等の推進）を執行することが求め、職務執行にあたって他の政府機関、自治体との調整に大変に難攻した。

そこで、2002年に観光行政組織の再編が進められ、観光・スポーツ省(Ministry of Tourism and Sport)を新たに設立するとともに、タイ国政府スポーツ庁とタイ国政府観光庁を所管することとなった。

表 3-2 タイの観光行政機構の変遷

年	観光行政機構
1960	Salit Thanarat首相は3月18日に観光局(Tourism Orgaization of Thailand)を設立 ・開発面より主に国の広報活動を目的とするマーケット面が注目される。
1965	アメリカ・ニューヨークに海外観光事務所を初めて開設
1968	初めての地方事務所をチェンマイに設置
1979	内閣は観光推進機関の名称をタイ国政府観光庁に変更した。 ・ Authority of Thailandの英語名称が設定 ・タイ国政府観光庁法に施行
1992	観光産業及びガイド法を施行
1994	タイ国政府観光庁はEcotourismの開発のため、 Ecotourism委員会を設置する。
1998	国立Ecotourismの施策を施行宣言 国立Ecotourismの委員会を設置
2002	内閣は観光・スポーツ省を設置 観光開発事務局を設置
2007	1979年観光産業法(1979年制定)を改訂 観光産業及びガイド法(1992年制定)を改訂
2010	観光開発事務局が観光局に改称

出所：Market Research Division of Tourism Authority of Thailand, E-TAT Tourism Journal, pp.1-4,2007 により，筆者作成

観光・スポーツ省は、タイ国政府において観光産業とスポーツの振興を行う所管組織であり、主に政策や規制を担当している。その中央組織は、大臣官房、次官事務局、体育教育局、観光局、体育教育研究所、観光警察部からなり、地方組織として県観光・スポーツ

事務所が設置される<sup>30</sup>。

タイ国政府観光庁は、首相府長官に直轄され、同長官を委員長とする諮問委員会が設置され、活動の方針策定を担当する。委員会の委員は、外務省情報局長、運輸通信次官、内務次官、環境政策・計画局長、法務局長、国家経済社会開発委員会政策・計画アドバイザー、タイ航空社長、ラムカムヘン大学法学部教授等であり、タイ国政府観光庁総裁が委員会議長を務める。

さらに、タイ国政府観光庁の主管業務はマーケティングであり、国内に 22 箇所、海外では 18 カ国に事務所を開設し、国内外で活発なプロモーション活動を展開している。タイ国政府観光庁の主たる役割は下記の通りである。

- ・タイ観光に関する情報やデータをワンストップで提供すること
- ・国民の海外観光と外国人の国内観光の両方を促進するためのプロモーション活動を行うこと
- ・国内事務所は、タイ国民が国内旅行をする際のプロモーションを担当すること
- ・外国借款の受入及び債券発行
- ・他の政府機関や内外民間資本との事業の調整

また、政策立案では、基本方針は本庁で作成するものの、マーケティングの対象となる国によって対応の違いが大きいこともあり、各国事務所から出された提案も政策に反映される仕組みになっている。

観光局は、2002 年 10 月に関係組織の再編により観光開発事務局を設立したが、2010 年に観光局に改称された。タイ国政府観光庁からは、観光地の開発、観光産業の育成、持続可能な産業とするための国内向け標準ガイドの作成等の役割を引き継いでいる。これにより、タイ国政府観光庁は海外向けプロモーションにより一層の重点を置くことが可能になった。一方、広報局広報計画・政策管理室からは、タイにおける映画産業の育成の役割を引き継いだ。観光局の主たる役割は下記の通りである。

- ・持続可能な観光地を作り、支援し、維持し、復旧し、開発すること
- ・観光ビジネスへの参画、ビジネス効率向上の推進と強化
- ・観光産業の標準の開発と更新
- ・観光客の安全向上 ・ 観光における国際協力の開発
- ・海外映画をタイで撮影することの支援・推進
- ・タイ映画産業の支援と育成 等

一方、多くの地方自治体では、観光行政を商工・農林・水産行政などと同じ産業振興に位置付けている(図 3-3)。

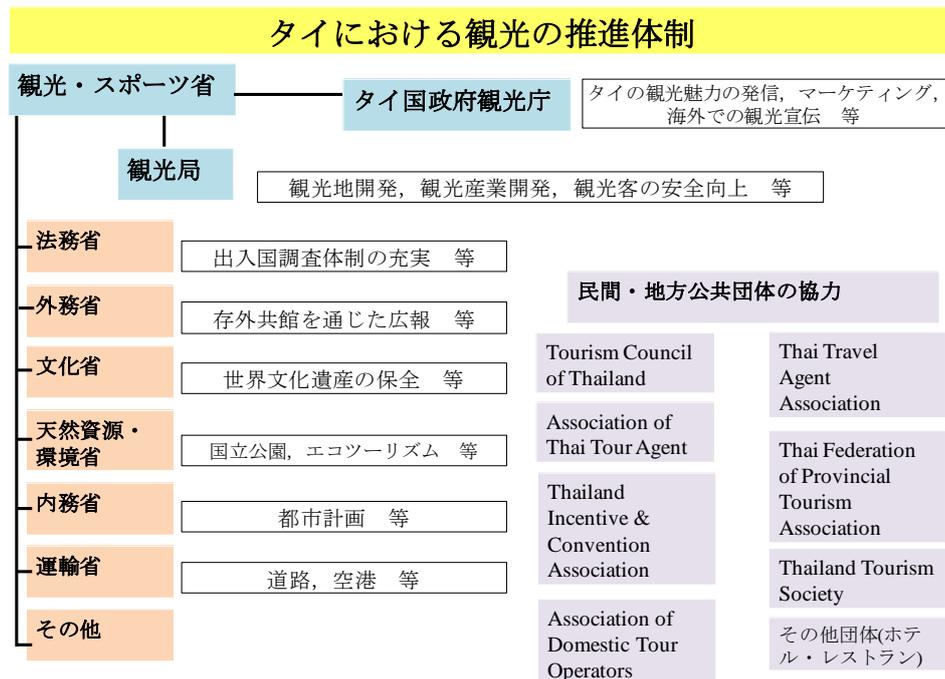


図 3-3 タイにおける観光の推進体制

出典：筆者作成

また、タイの観光振興を取り組む役割に関して政府と民間企業はそれぞれ活動している、しかし、政府の政策や情報が民間に伝わっていない現状がある。なぜなら、政府と民間との間で情報交換が効果的にできていないからである。タイにおける観光行政の果たす役割と本研究に関連する分析内容は、タイ国政府観光庁でのタイ人旅行者及び外国人旅行者向けのプロモーションを行う際、施策の対象となる具体的なターゲットの把握が可能となった。つまり、旅行者の旅行行動特性に関するデータである。また、観光局で担当する観光地評価に対する観光客増加変化・ニーズの把握、リピーター構成、観光地の環境整備に対するイメージ改善、分析方法を提示することができた。

### (3) タイの観光政策の変遷

観光開発において、インフラの未整備や制度の未発達というような市場の未発達といった段階では、市場原理に基づいた観光産業の確立が厳しいといえる。そこで、タイが外貨獲得を至上命題としてもっている開発国家は、観光産業の誘致を図り、道路などのインフラの整備を実施し、観光市場の創設を促進配慮が必要となる。タイ政府の取り組みも、市場形成に向けて国家の介入が図れてきた<sup>9</sup>。

国家経済社会開発庁(National Economic and Social Development Board : NESDB)によって施行されている国家経済社会開発計画(The National Economic and Social Development Plan)を取り上げ、その中でどのように観光産業を位置づけ、どのような観光開発に取り組んでい

るのかを検討する。タイが観光立国を目指して国家レベルの観光政策を実施したのは 1970 年代後半以降である<sup>31</sup>。

表 3-3-1~3-3-3 に示すように、タイの経済発展を目指す経済社会開発 5 ヶ年計画は 1961 年に開始されたが、国内経済発展の最適化分散や観光開発の優先を掲げた第 4 次と第 5 次の経済社会開発計画（1977 年—1986 年）によって観光産業は強化されていくこととなる。さらに、世界銀行などの財政支援なども受けて、タイにおける観光開発は急激に成長し、1982 年には米の輸出高を抜いて観光産業は外貨獲得源の第一位になった。

第 6 次経済社会開発計画（1986-1991 年）に相当する 1980 年代の好況下で、タイ経済は世界でも最高レベルの成長率を示し、1986 年から 1990 年までの間の年平均 GDP 成長率は 10% を記録した<sup>32</sup>。農業中心の産業構成から工業、サービス中心の産業構成へと移行するにつれて、経済成長と経済開発に占める観光の重要性が増大した。外貨収入の中で観光は最大のものであり、GDP に占める割合はおよそ 5% となっている<sup>32</sup>。強力な国際需要と相まって急速な観光成長が高い経済的利益を生み出し、国民経済を刺激し、雇用を創出し、投資の加速と生活水準を引き上げることとなった。

観光産業は貿易支出が赤字拡大を辿る中で唯一恒常的なプラス拡大を続けてきた主要外貨獲得源となった。さらに、Elliott<sup>33</sup>はこの期間から、タイ国政府観光庁の行政的市場が強化されたと指摘している。この間のタイ国政府観光庁の予算配分は、プロモーション、観光開発、観光警察のそれぞれ 14 億 9280 万バーツ、7 億 3810 万バーツ、2 億 5490 万バーツである<sup>9</sup>。タイ国政府観光庁の活動は、地方への観光促進を図る、様々なプロモーション活動に実施している。

そして、第 7 次経済社会開発計画(1991-1996 年)以降の特徴として、外需に留まらず、国内の内需の開発を初めて盛り込んだことがあげられる。さらに、輸出部門の中で取り上げるのではなく、サービス部門として観光産業を取り上げ、より質の向上に努めた構成となっている<sup>9</sup>。国民による国内観光の活性化に基づき、外貨獲得だけではなく雇用拡大効果や地域格差是正を図っていた。1991 年の外貨持ち出し制限の緩和、出国税の撤廃は、外貨節約のためであった規制を緩和させ、政府の役割は外貨獲得を図った政府主導の国際観光開発から、市場の利益を優先させた規制緩和へと移行しつつある。

第 8 次経済社会開発計画(1997-2001 年)では、タイ国政府は外国人旅行者の誘致力を高めるために下記に示す 7 つの行動プログラムを設定した。

1. 観光地や観光スポットの改善
2. 航空産業の自由化
3. 旅行者向けのサービス向上
4. コンベンション施設整備と改善、国際会議の誘致
5. 国内観光の促進
6. 観光産業を発展させるための官民一体化体制の設立
7. 国際観光振興活動の強化

現在、第10次経済社会開発でも観光開発が重要として継続的な取り組みを行っている。

一方、観光資源開発、観光施設整備や観光振興強化と並び、外国人旅行者の受け入れ体制整備の中で、ビザ発行制度や関税検閲などが積極的に改善されている。入国ビザ発行体制に関して、2000年から、タイが観光ビザを廃止した対象国は53カ国となっている。また、旅行者の安全を保障するために観光警察局も設置している。

以上から、タイの経済開発を目指す経済社会開発5ヵ年計画に基づいて経済開発である第一手段として観光産業は、図3-4に示すように、政府から観光行政予算の推移による毎年観光行政予算規模の増加がわかった。

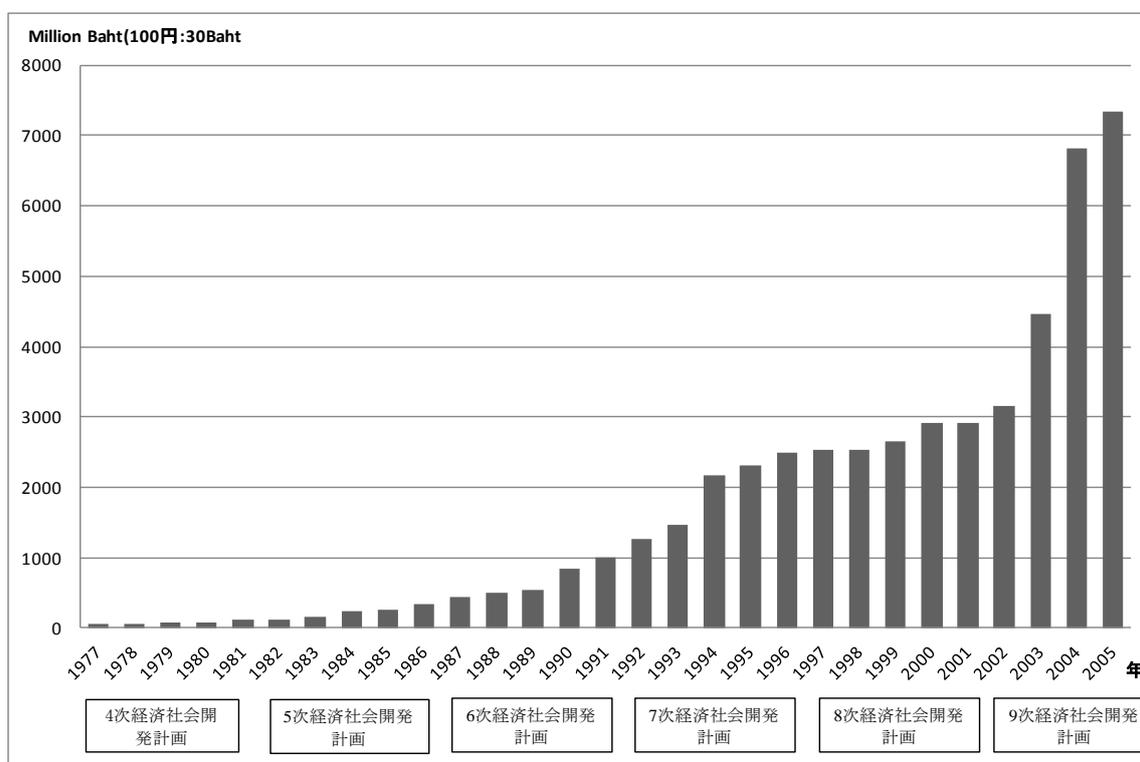


図 3-4 観光行政予算の推移

出所：Tourism Authority of Thailand: Annual report 2003,2004-2005 により，筆者作成

これら訪タイ外国人数をあわせて考えると、1980年にはタイ政府は「タイ観光年」(Visit Thailand Year)の観光振興対策をはじめて実施した。それから、1987年には「タイ観光年2期」を、1988年には「タイ手工芸品年」(Thai Handy Craft Year)のキャンペーンを実施した。このキャンペーンは成功をおさめ、タイへの国際観光客数は1985年の244万人から1990年には523万人に増加した。

また、1998-2000年における「Amazing Thailand」のキャンペーン後には、国際観光客数は1,006万人(2001年)に増加した。継続的な観光開発の一方、2003年アジアにはSARsウイルス流行により、外国人観光客数が減少することになった。

そこで、国内観光の活性化のため、2003年には「Unseen in Thailand」のキャンペーンにつづいて、国際観光の復興のため、2004年に「Thailand Happiness on Earth」のキャンペーンが実施された。これは、タイで「安心感」、「平和感」と「快適感」を有する旅行先として観光客に認知させるコンセプトであった。

そして、国王即位60周年記念とあわせて、2006年に「Thailand Grand Invitation 2006」の観光振興対策キャンペーンを実施するとともに、新空港であるタイ「スワンナプーム国際空港」を供用開始した後、国際観光客数は1,382万人に増加した。

表 3-3-1 タイの観光政策変遷 (1960-1980年代)

年	観光政策	観光振興 キャンペーン	成長(観光客数) (人)	国家経済社会開発計画	世界経済・政治・ 環境の状況
1960	Salit Thanarat 首相は3月18日に観光局 (Tourism Organization of Thailand) 設立: 主に国の広報活動を目的とするマー ケット面に注目		81,340		
1973			♣ 1,037,737 (はじめて観光客数 が100万人を超え る)		
1974					1st World Oil Crisis
1976			♣ 1,098,442 (-6.92%)		タイの政治危機 (Bloody right wing coup:10月6日)
1977	初めての観光開発計画を第4計画国家 経済社会開発に含める。国の観光開発 計画はオランダコンサルティング会社 が策定。主に経済開発と環境保全と目 標			<b>第4次国家経済社会開発(1977-1981)</b> 1.外国為替を重視して、赤字を減らす 2.観光に対する振興対策を立案する。 3.観光客数の11%と観光収入の19%増 加と目標設定する。	
1979	タイ国政府観光庁に改称された。 (Authority of Thailand)。1979年タイ国 政府観光庁法が施行される。				2nd World Oil Crisis
1980	パタヤ観光地開発計画1980-1981年	初"Visit Thailand Year"宣言			
1981	ブーケット観光開発計画1981-1986年		♣ 2,015,615 総合製品輸出額に おいて観光収入が 第1位(Visit Thailand Year が成功)		
1982				<b>第5次国家経済社会開発(1982-1986)</b> 1.外国人観光客数・滞在数と消費を 増加を目的する。 2.海外旅行を減らす。 3.観光客数の8.5%と観光収入の 21.5%増加を目的する。 4.観光資源保護対策を設計する。 5.公共部門と民間の投資を推進する。 6.諸国と観光競争が出来るよう、観光 産業に投資する民間企業に対して 低いコストで高品質なサービスの 提供を推進する。	世界的な景気後退 (World Economic Recession) 観光競争の激化
1983			♣ 2,191,003 (-1.24%)		
1987		国王が還暦の ため、第2回目の "Visit Thailand Year 1987"宣言 を行う。	♣ 3,482,958 (観光客数が300万 人以上)		
1988	Chatchai Shunghawan 首相は「観光市場 の拡大や海外投資を増加させるために、 全ての公共部門と民間企業の協力」を 依頼 タイ国政府観光庁はサムイ島における 観光開発のための許容人数を制限し、観 光地を開発する。		♣ 4,230,737	<b>第6次国家経済社会開発(1987-1991)</b> 1.開発面と推進面の関連を設計する 2.観光商品質を改善する。 3.基本的なサービス産業を促進。 4.安心と信頼を作る。 5.マーケティング面の国際協力を推進 6.国内旅行を推進する。 7.国の良いイメージを創出。 8.小・中型の投資を促進する。	

出所：Market Research Division of Tourism Authority of Thailand, E-TAT Tourism Journal,  
pp.1-4,2007 により，筆者作成

表 3-3-2 タイの観光政策変遷 (1990年代)

年	観光政策	観光振興 キャンペーン	成長(観光客数) (人)	国家経済社会開発計画	世界経済・政治・ 環境の状況
1990			↳ 5,298,860		
1991	Arnan Panyarashun首相による観光開発政策 1.経済,貿易,投資と観光の関連性を明確にし、良好な関係を構築する。 2.観光地を改善する。 3.水辺を開発する。	The World our Guestのプロジェクト			ベルシャ湾岸戦争 3rd Oil Crisis
1992	Chuawn Leekpai首相による観光開発政策 1.観光産業を開発するために、政府が民間を支援する。 2.東南アジアの観光地の中心的存在を目指す。 3.観光資源を保護する。 4.国際,国家と地方の協調を促進する。	観光産業とガイド法を施行。		<b>第7次国家経済社会開発(1992-1996)</b> 1.東南アジアの観光地の中心的存在を目指す。 *東南アジアのゲートウェイ機能。 *民間企業の投資を推進する。 2.観光資源の保護をとまう開発する。 3.人材の水調を改良する。	タイ国内における政治問題 (May Incident)
1994	タイ国政府観光庁はEcotourismを開発のため、Ecotourism委員会を設置		↳ 6,166,496		
1995	Banhan Silapa-arsha首相による観光開発政策 1.観光産業の投資を推進する。 2.国内旅行を推進する。 3.定常に観光開発をさせる。 *臨時Ecotourimに対する方針を提案する。1995年から1996年かけて施行する。				
1996	Chawalit Yongjaiyut首相による観光開発政策 1.国内旅行を推進する。 2.タイの文化歴史観光資源を保護				
1997	Chuawn Leekpai首相による観光開発政策 1.観光市場の拡大を促進する。 2.基本的サービス産業を改善し、観光地質を強調する。 3.外交や観光協力を推進する。 *環境保護に対する観光の施策を設定				
1998	国立Ecotourismの施策を施行宣言する。また、国立Ecotourismの委員会を設置する。	"Amazing Thailand"(1998-1999)キャンペーンを開始			
1999			↳ 8,000,000		

出所：表 3-3-1 に同じ

表 3-3-3 タイの観光政策変遷 (2000年代)

年	観光政策	観光振興 キャンペーン	成長(観光客数) (人)	国家経済社会開発計画	世界経済・政治・ 環境の状況
2000		"Amazing Thailand 2000" 連続施行	↳ 9,000,000		
2001	Taksin Shinawat 首相による観光開発政策 1. サービス産業を開発する。 2. 国立観光へ向かう促進する。	長滞在を促進のため, Thailand Longstay Management 会社を設立	↳ 10,000,000		World Trade : 11 Sep 2001
2002	内閣は観光&スポーツ省を設置する。	"Thailand Smiles Plus" プロジェクトを開始。 "Amazing of Thailand Experience Variety 2002-2003" プロジェクトを開始。		<b>第9次国家経済社会開発(2002-2006)</b> 1. コミュニティに所得分配し, 雇用率を増加するために, 持続的観光を開発 *国内及び外国人観光客数の拡大に対応するために, 観光地を開発 *地元人の役割を推進 *外国人観光の長期滞在を推進 2. 潜在性があるサービス産業を促進 *健康やスポーツ観光を推進 *飲食産業を推進 *国際教育施設を推進 *観光商品質及びサービス品質を改善	10月12日 "Bali Bomb"
2003		"Unseen in Thailand" キャンペーンを開始。	↳ 10,004,453 (-0.57%) Tourism Capital of Asia を目標として 2008年に外国人観光客数は20万人を目指す。		"SARs Outbreak"
2004		"Thailand Happiness on Earth" キャンペーンを開始	↳ 11,650,703		新型インフルエンザ *深南部三県問題が発生。 *12月26日 南部地方に大津波
2005			↳ 11,516,936 (-1.15%)		
2006	Surayut Julanon 首相の政府は国民立法機関に観光における方針を掲げる。内容は, 1. 世界基準的な観光産業を目的する。 2. 文化・歴史的な観光特徴が目され, 自然環境保護も実施する。				
2007	観光産業の委員会は国民立法機関に (1979年)観光産業法と(1992年)観光産業及びガイド法の改訂を提案する	再び "Amazing Thailand" キャンペーンを実施する。		<b>第10次国家経済社会開発(2007-2011)</b> 1. 人材の潜在性を開発のために, 持続的な観光を開発する。 2. 平等な作業を実施する。 3. 持続的な自然資源と環境を開発する。 4. 国の観光力制限を改善する。	

出所：表 3-3-1 に同じ

### 3.1.4 まとめ

本研究はタイの観光政策の変遷に着目し, 外部要因, 内部要因との関連性把握を目的として文献調査を行った。分析の結果は以下がわかった。

- ① 当初の観光促進のために首相府直轄で設置された観光局(TOT: Tourism Organization of Thailand)から, タイ政府観光庁(Tourism Authority of Thailand)に改称された後, 観光・スポーツ省を再編してきたが, それにあわせて, 旅行者数が増加傾向を示している。

- ② 経済開発の初期段階で、潜在的観光地域へ優先的にインフラ整備が行われたことは、サービス輸出産業として観光産業を振興させる基盤をつくりあげた。そして、それは外貨獲得の糧となり、工業化におけるマクロ経済の不安定性を克服することに貢献することができた。
- ③ 観光政策をタイ国政府観光庁が国家経済社会開発庁の作成した国家経済社会開発 5 年計画に基づく遂行してきた。タイ国政府観光庁が実施してきた政策は、経済的に開発途上の段階でも可能な事例であり、効率的なキャッチアップができたことが確認され、他の途上国の開発政策の策定に際しても有意義なものと考えられる。
- ④ 第 7 次計画以降、観光産業は経常収支対策だけでなく、内需に目を向けた開発へ力を入れつつある。これは、外貨獲得を目的とした経済開発のための観光開発とともに、経済開発に伴う内需の消費拡大のための観光開発へ、政策的志向が変化していることを示す。

## 3.2 アユタヤにおける観光概要

### 3.2.1 アユタヤの歴史的成り立ち

アユタヤは、タイ中部に位置し、現在タイの首都バンコクより北方約 76 km にある(図 3-5)。アユタヤは、正式名称をプラ・ナコーン・シー・アユッタヤーであり、昔のアユタヤ王朝の首都であった。地理的には、チャオプラヤ川平原地帯にして、昔から米の生産に適した地域で、タイを代表する稲作地帯でもある。また、米の生産・運搬のための運河が数多く掘られている。人口は 138,746 人(2009 年)である。

バンコクから利用交通機関は、鉄道、バスと(船舶)船である。鉄道は、バンコクのフアランポーン駅発、チェンマイまたはウボンラチャタニー行きが 1 日 15 本(所要約 1 時間半)である。バスは、バンコク北バスターミナルから 1 時間に 2-4 本出ている(所要約 1 時間半)、船は、現在バンコクからアユタヤまで行けるが、普通な船ではなく、たいてい観光的な船であり、会社によって運賃が違う<sup>34</sup>。

アユタヤは水の都である。町も中心地は、チャオプラヤ川とパーサク川とロップリー川の三つの河川の合流地点にできた中州であり(写真 3-1)、内外に今でも幾筋もの水路が残っている。かつてアユタヤに来た欧州人に「東のベネチア<sup>35</sup>」と呼ばれた。船で中州を一周するには 1 時間くらいかかる。小船を雇って細い水路を探索するのも味わい深い。通勤や買出しに向かう船、洗濯や漁捕りをする人々、象の浴び、工場への物資を運ぶ貨物船など、そこには水と共に生活する人々の姿を見ることができ、遺跡や古刹という、観光都市アユタヤのイメージとは違った一面をみることができる。



図 3-5 アユタヤの位置  
 出典 : <http://www.google.co.jp>



写真 3-1 アユタヤ全域の遠景  
 出典 : [http://world\\_heritage.jaxa.jp](http://world_heritage.jaxa.jp)

当地では、アユタヤが都に定められたのは1351年のこと。初代の王ウートーンの首都建設から、1767年にミャンマーとの戦いに敗れて王朝が滅びるまで、実に417年もの長きにわたってアユタヤ王朝は続いた。ウートーン王は、王朝年代記ではラーマーティボーディーという名で記述されている。ラーマーティボーディー（1世）は国内統一のため、セイロンから仏僧を招いて上座部仏教（小乗仏教）を国家の公式な宗教とするとともに、ヒンドゥーの法典であるダルマシャストラやタイでの慣習を元に（三印法典）を整備した。この三印法典は、近代的な法典が整備される19世紀まで、タイの基本法典として機能することになる<sup>36</sup>。

14世紀末までにはアユタヤ王朝は東南アジア最大の勢力として見なされるようになるが、完全に東南アジア地域を圧倒するほどの人口に欠けていた。このため、当時衰退しつつあったクメール王朝へ勢力を伸ばしつつあったベトナム勢力に対抗するため、ラーマーティボーディーは晩年アンコール（現在はカンボジア）を攻撃し、アユタヤの版図に加えた（1362年）。しかし、アユタヤはアンコールの完全な掌握を遂行することはできなかった。スコータイ王国との関係は、スコータイがアユタヤに朝貢する形となったが、その後、100年かけてアユタヤ朝がスコータイ朝を併合し、スコータイ朝は消滅される。

15世紀には、マレー半島のマラッカ王国がアユタヤの悩みの種となる。マレー半島ではマラッカやタンブラリング以南のマレー半島諸都市が15世紀早くからイスラム教に改宗するようになり、独立を宣言するようになったためである。結果的に、アユタヤはマレー半島南部を失うが、マレー半島北部を維持し、高級品を求めてやってきた中国出身の商人により国内の経済は潤うことになる。

一方、天敵ともいえるのがミャンマー軍であった。14世紀以降しだいに国力をつけてきたミャンマーは、チェンマイ、チェンセーンなど現在のタイ北部を勢力下に置くと、タイ中部の覇権を奪う機会を虎視眈眈とかがうようになる。ミャンマーは16世紀ころから、たびたびアユタヤに攻め入って来るようになり、ついに1569年、アユタヤはその軍門に降る。その後、再興を果たしたものの、1767年、やはりミャンマー軍の攻撃で王朝はその最期を迎えた。このときアユタヤの町は徹底的に破壊されていたため、ビルマ軍が退却した後、新たに王となったタークシンはアユタヤ再興をあきらめてトンブリー（現在はバンコク中に位置）へと遷都する<sup>37</sup>。

### 3.2.2 アユタヤと諸外国との接触

#### (1) 西洋諸国

1511年、アユタヤに同年にマラッカを占領したばかりのポルトガルから外交使節が到来した。これはタイの歴史上における最初の欧米勢力との接触といえる。5年後にはポルトガルの使節が再びアユタヤに渡り、ポルトガル勢力のアユタヤ領内での通商許可を得た。1592年にはオランダがアユタヤに使節を送り通商許可を取得し、国内の米の輸出に関して大きな影響力を得ることになった。

外国との貿易を積極的に推進したとされるナーラーイ王は、17世紀頃からフランス勢力と友好関係を結んでおり、チャオプラヤー・コーサーパーンらタイの官僚がフランスに外交使節として派遣されている。また、イギリスやオランダはタイに工場を建設する許可を与えられていた。一方、ポルトガルは日本人勢力の台頭（その後ナーラーイ王までに没落）や本国の没落と相まって陰を薄めており、新興勢力であるイギリス・フランス勢力と古参勢力のオランダがアユタヤにおいて対立し始めた。

ところが、1664年にオランダ勢力であるオランダ東インド会社が通商の独占を求めて、ポルトガル国旗を掲げ武装した船でチャオプラヤー川河口を封鎖し、中国商人を捕らえるという事件が発生した。結局のところ、オランダはナーラーイの信用を失い、アユタヤ内で没落の憂き目を見ることになる。一方ナーラーイは当時、外交の権威であったコンスタンティン・フォールコン<sup>8)</sup>を通じてフランスにこの助けを求めた。この後、ロブリーに緊急用の副首都の建設をルイ14世の技術的援助のもとで行い、ついでフランスから医学などの専門的知識を持った宣教師や印刷機などが送られてきた。このルイ14世の目的は、すなわちナーラーイ王の改宗にあったと考えられている。

一方、これらのキリスト教の拡大とフォールコンなどの西洋人勢力の台頭は中国商人の援助の元にあった官吏や仏教勢力により敵視された。ナーラーイ王が1688年に死亡すると、ペートルチャーを中心とする勢力がナーラーイの息子、フォールコン、宣教師などを殺し、フランス勢力や親フランス勢力を排除した。この後、ペートルチャーは白人を国内から追放し、アユタヤを鎖国国家へと導いた<sup>36)</sup>。

## (2) 中国

アジア地域からの中国との交流は、ラーマーティボーディ1世の時代、すなわち建国当初から、アユタヤと中国商人とは良好な関係を維持した。外国人はアユタヤの市街地に住むことは許されなかったが、中国商人だけは例外であった。その後、日本人勢力や西洋人勢力の没落と共に力をつけていき、アユタヤ王朝のドル箱であり鎖国国家であった日本も中国船の入港は認めていたことからペートルチャー以降目立って力を付けた。また、アユタヤの主要輸出品目である米の消費も中国南部で目立って需要が高かったことも大きな要因である<sup>36)</sup>。

## (3) アユタヤと日本国際交流

日本でアユタヤとの貿易を最初に行ったのは、当時まだ琉球王国であった沖縄の人々だったといわれる。最も古い記録では1425年となっているが、実際にはさらに古く1300年代末期にはすでに交易があったと考えられている。これは、西欧列強のポルトガルがアユタヤと交易を始めた1511年、オランダの1592年と比べてもはるかに早い<sup>37)</sup>。

さて、琉球王国時代の沖縄に始まり、江戸時代半ばまで続いた日本との貿易では、いったい何が取引されたのだろうか。まず、アユタヤから日本に運ばれた品としては、蘇芳、

動物の皮、鉛、錫、陶磁、香木、香辛料などがあつた。蘇芳は染料の原料になる南洋植物で、赤から紫にかけて発色する。蘇芳で染められた赤紫は高貴な色として珍重されたという。沖縄の泡盛もタイ米を原料としており、そのルーツはアユタヤ時代のタイにあるという学者もいる。最近タイでは、これにちなんで「南蛮古酒」という焼酎が発売された。

アユタヤ王朝は、建国当初からすでに独占的な官営貿易制度が確立されていた。輸出入品目の中には、商人が自由に売買できるものもあつたが、利益の大きい品目はすべて専売とされ、国が売買に関わつたのである。一方、的に公定価格での売買が強制されたが、商人たちは不満があつても言いなりになるしかなかつた。また、輸出品として重要な、米、蘇芳、香木、動物の皮などの多くは、アユタヤの支配下にあつた属国や地方小国家から王都に献上された貢納品だつた。

このように、ただ同然で仕入れた品物に勝手に値段をつけて売つていたからこそ、アユタヤ王朝は莫大な収入を得られたのである。本当に賢く、かつ強引なやり方であるが、当時のアユタヤは、それを押し付けることができるほど大きな権力を持つ東南アジア有数の貿易国家だつたと考えられる。

ところで、現在アユタヤを訪れる外国人観光客で、圧倒的に多いのは日本人である。政府観光庁の資料によれば、過去10年にわたつて不動の一位で、外国人観光客の半数を占めた年さえあつた。アユタヤが日本人にこれほど人気があるのは、世界遺産を中心とした寺院や遺跡以外に、かつての日本人町のロマンや、山田長政の伝説などに魅かれるからだと考えられる。

山田長政についての信憑性が高い資料というのは実はあまり多くはない。しかし、すでに江戸時代にはかなり脚色された書物などが出回り、現実とはかけ離れた海外武勇伝として長政は英雄化され、果ては一国の王にも匹敵する存在になつたと書かれた本まで現れる。本当のところ、山田長政やアユタヤ日本人町の実像とは、どのようなものだつたのだろうか。

すでに述べたように、日本は早い時期からアユタヤと交易をおこなつていたが、江戸時代の御朱印船貿易のころになつて交易は活況を呈した。それにともないアユタヤに居住して商業に従事する日本人が増え、最盛期の17世紀初頭には、約1500人の日本人が住んでたとされる。

日本で戦乱が続いた戦国時代以降、特に関が原の合戦などに負けて主君を失つた浪人たちの中には、流れ流れてアユタヤにたどり着き、傭兵になつた者がいた。たびたびの戦乱に頭を悩ましていたアユタヤは兵力を欲しており、実戦経験豊かな浪人たちを即戦力として雇入れたのである。この外人部隊の頭領というのが山田長政の役職である。最盛期には800名ほどが、「日本人義勇組」の名のもとに傭兵として働いていたという。義勇組は反乱の鎮圧などで功績をあげ、しだいに政治的影響力を持つに至つた。山田長政はこうした権力を背景に、軍人としてのみならず、商人としても、タイ米の輸出に関わつたり、江戸幕府にアユタヤとの貿易振興を促す書簡を送つたりしている<sup>37</sup>。

時代を経て、タイでは1970年代頃から、日系企業の急速な進出や日本商品の市場席卷で反日ムードが高まり日貨不買運動などが盛んにおこなわれた時期があった。日本人の商売に対するモーレツぶりは、すでにアユタヤ時代から発揮されていたと思えば、いにしへの日本人にも親しみがわくといえる。

さて、現代に目を向ければ、いうまでもなく、アユタヤは世界遺産として多くの人々を集める観光地であるが、これは対外的な顔である。タイ国内ではアユタヤは工業の町として知られ、多くの地方出身の若者が働いている。近郊に大きな工業団地を抱え、朝と夕方の通勤時には、送迎の大型バスが何十台も往来して道路が渋滞する。昼も夜も、工場のユニホームを着て歩いている若者の姿をみかける。日系企業の進出も盛んで、デジタルカメラやパソコンの部品、家電品など、アユタヤから日本に輸出される製品も数多い<sup>37</sup>。

### 3.2.3 アユタヤにおける主要な観光資源

アユタヤにある独自の観光資源<sup>38</sup>は、伝統文化や古都の遺跡であるタイ有数の観光地である。これらの観光資源はアユタヤの中州内と周辺地域に存在するが、それらについて説明する。

#### 1. 王宮跡 (The Old Royal Palace)



写真 3-2

アユタヤ王宮の面影を、今もその跡地にて伺い知ることが出来る。当初王宮は、初代ウートン王によりウィアン・レックの地に建設されたが、1353年、新都建設が完了すると、現在プラ・スィー・サンペット寺院のあるノン・サンの地に移された。全ての建物は木造であったと言われる。

その後1448年、ボロム・トライ・ロカナット王により、王宮はプラ・スィー・サンペット寺院に寄進され、新たに新王宮がロップリー川の北側に建てられた。新王宮内には、幾つものホールが建てられていたが、それが今も王宮跡として知られている。代々アユタヤ王の居城とされたこの新王宮は、北側市壁側、チャンカセム宮殿から2キロの場所にある。

## 2. ワット・プラ・シーサンペット (Wat Pra Srisanpet)

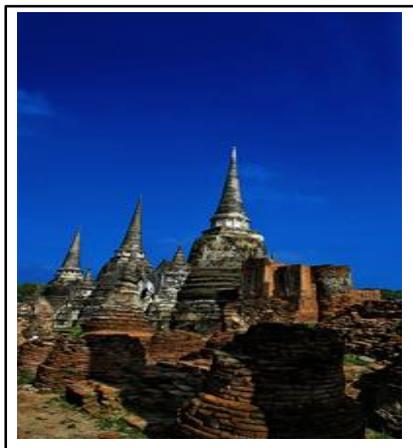


写真 3-3

アユタヤ王宮内にあった最も重要な寺院で、バンコク王朝におけるエメラルド寺院のような存在である。トライローカナート王時代の 1448 年に建立され、以降はここで宮中儀式が執り行われてきた。

寺院のシンボルは、東西に並ぶ 3 基の仏塔で、それぞれにトライローカナート王 (1448～1488 年) とその王子らの遺骨が納められていたと言われている。仏塔の東側に本堂が後に建立され、高さ 16 メートル重さ 171 キロの純金に覆われた立仏像が置かれていた。

この仏像が寺院名にもなった「プラ・シーサンペット」と言う。1767 年のビルマ軍による第 2 次アユタヤ侵攻で寺院そして仏像は悉く破壊されたが、戦後になって修復され、現在の姿となっている。

## 3. ワット・プラ・ラーマ (Wat Pra Ram)



写真 3-4

1369 年にラメスワン王 (1369～1370/1388～1395 年) によって建立されたとされるアユタヤ王朝初期の寺院である。ここはラメスワン王の父で初代のウートーン王の葬儀が営まれた場所と言われている。

また、初代王の命によって掘られたとされる池は「ブン・プラ・ラーム」池と呼ばれ、現在アユタヤ市民の憩いの公園として整備されている。境内には、トウモロコシ型の塔堂を中央に、本堂そして7つの礼拝堂の跡が残っている。

#### 4. ヴィハーン・プラ・モンコンボピット (Viharn Phra MongkolBopit)



写真 3-5

1603年にラーマティボディ2世により作られた、タイ最大の高さ17mのブロンズ製の巨大な仏像を安置する塔堂である。ビルマ軍に破壊されたあと、1951年の修理の際には仏像の体内から何百体もの小さな仏像が発見された。アユタヤの中心地では最も参拝者が多く、まわりには土産物屋、ろうそく、花などを売る屋台で賑わっている。

#### 5. ワット・マハタート (Wat Mahathat)



写真 3-6

1369年～70年の2代ラーメスアン王が建てたという説と、1370～88年の3代ボロムラーチャー1世が建てたという説がある13世紀の重要な寺院の一つである。

かつては塔の頂上が黄金に輝いていたこの寺院もビルマ軍の侵略により廃墟と化し、今は木の根の間に埋め込まれた仏像の頭や、頭部がない仏像、崩れ落ちたレンガの壁や礼拝堂の土台が残るのみとなっている。1956年の修復の際、塔の跡から数々の黄金仏や宝飾品などが発見され、これらは現在チャオ・サン・プラヤー国立博物館に提示されている。

## 6. ワット・ラーチャプーラナ (Wat Rajaburana)



写真 3-7

マハタート寺院の向かい側に建つ。1424年、ボーロマラーチャ2世（チャオ・サンブラヤ王）の命により、王位継承争いの中、象に乗って一騎打ちを演じ、共に討ち死にした二人の兄ジャオ・アイとジャオ・エイを弔うため、その火葬の地に建立された。

二人の王子が実際戦いを繰り広げた地は、マハタート寺院とラチャブラナ寺院の間、パタン橋付近である。仏塔が2基建てられたが、現存するのはその基礎部分のみとなる。

この寺には、アユタヤ後期の建築様式を取る御堂の正面扉、アユタヤ中期建立で、窓代わりの細長い四角の穴が特徴のルアン礼拝堂など、見所が多い。大仏塔は、聖鳥ガルルーダ、鬼（ヤック）、猿、獅子などの像で飾られ、その仏塔内の二つの地下室からは、仏像や石版など王家の黄金の財宝が見つかった。それらの発掘品は、現在チャオ・サンブラヤー国立博物館に展示されている。

## 7. ワット・スワン・ダーララム (Wat SuwanDararam)



写真 3-8

チャクリ王朝の初代ラーマ1世の父が建立した寺院であるが、後に修復され、現在はチャクリ王朝の王室寺院として使用されている。輝かしく彩られたフラスコ画の壁画、繊細な彫刻を施した柱など当時の典型的な建築様式が特徴である。

#### 8. ワット・ローカヤ・スター (WatLokayaSutha)



写真 3-9

西方, クン・ペーン・ハウスの北側のうっそうと生い茂る広大な草原に悠々と寝そべる高さ 5m, 全長 28m の巨大寝釈迦仏である. 1956 年に復元されたもので, 80 歳で入滅した仏陀をあらわしている. まわりには寺院も本堂もなく真っ青な空, 澄みきった空気のもと, 長い手足をゆったりと伸ばし, 静かな笑みを浮かべているかのように横たわりながら, 時代の栄枯盛衰を見つめ続けている.

#### 9. チャンタラカセム国立博物館 (Chantrakasem National Museum)



写真 3-10

ナレースワン王そしてその弟のエカタット王が即位する前に暮らしていた宮殿で, 現在はアユタヤ時代の仏像やさまざまな品物を展示している博物館である. この宮殿は 1477 年, マハタマラチャー王時代に香りの良い梅檀 (チャン) の木を使って副王のナレースワンのために建てたもので, 後にここを修復したバンコク王朝のラーマ 4 世が, 改めて「チャンタラカセム宮殿」と命名した.

見どころとして, アユタヤ時代の美しい仏像が展示されている「ピマーンラッタヤー宮殿」や, ラーマ 4 世が星を観察するために建てた天文台などがあげられる. また, ここから徒歩数分でホアロー市場があり, 合わせて訪ねることもできる.

10. チャオ・サーム・プラヤー国立博物館 (Chao Sam Phraya National Museum)



写真 3-11

1956年～57年、政府の発掘調査によってワット・プラマハタートとワット・ラチャ・ブ  
ラナから発見された黄金の仏像、木彫りの扉、仏像など多数を展示する貴重な資料館であ  
る。

11. アユタヤ歴史研究センター (Ayutthaya Historical Study Center)



写真 3-12

日タイ友好 100 年の記念行事の一環として 1990 年に設立した。適切な縮尺、歴史的証  
拠に基づき復元された模型やビデオを使ってアユタヤの歴史やタイの文化を分かりやすく  
展示するほか、併設の図書館には歴史資料が約 3000 冊収蔵されている。

## 12. ワット・チャイ・ワタナラーム (Wat Chai Wattanaram)



写真 3-13

1630年、第24代王・プラサートトーンが亡くなった母を偲んでチャオプラヤー川の西側に建設した寺院。建築様式はカンボジアのアンコール・ワットに似ていることから、カンボジアとの戦争に勝利を収めたことを記念して建てたとの説もある。

寺院の四角い境内の中央には35メートルの主塔が聳え立ち、四方に4基の塔堂を従えて、その回りには回廊が取り巻く、というアンコール・ワット様式のうえ、八方には須弥山（しゅみせん）を表現する塔も設けられている。また、建立の1630年からアユタヤ王朝の滅亡まで、王の法事を執り行う王室寺院でもあった。ここも他の寺院と同様1767年のビルマ軍によって焼かれ、1987年になって改修され、現在ではアユタヤでもっとも美しい寺院と同様1767年のビルマ軍によって焼かれ、1987年になって改修され、現在ではアユタヤでもっとも美しい寺院遺跡のひとつとなっている。

## 13. ワット・ナー・プラメーン (Wat Na Phramen)



写真 3-14

アユタヤの北側をゆったり流れるムアン運河の対岸にあり、幾度にもおよんだビルマ軍の破壊からも奇跡的に逃れた13世紀の貴重な寺院である。入り口には、ガルーダにまたがり威風堂々と立つヴィシュヌ神のレリーフが当時のままの姿で残されているが、寺院全体は

15 世紀にラーマ 4 世の手により修復された。本堂にはアユタヤ最大規模を誇る高さ 5m の巨大な仏像が王の正装を纏って安置されている。

#### 14. ワット・パナンチューン (Wat Phananchoen)



写真 3-15

アユタヤが首都となる 26 年前, 1324 年に建てられた。幾度となく繰り返されたビルマ軍の破壊から奇跡的に残った寺院でもあり, 縁起がよい寺として, 今も多くの人々の厚い信仰を集めている。本尊である高さ 19m の黄金仏の座像を安置している中国風の装飾で飾られた堂内に, タイ様式のほかの寺院とはまた違った魅力を感じることがある。

#### 15. ワット・ヤイ・チャイモンコン (Wat Yai Chaimonkol)



写真 3-16

1357 年, アユタヤを建都した初代ウートン王がセイロン(現スリランカ)に留学中の修行僧たちの瞑想のために建てた寺院で, 別名を「ワット・プラ・チャオプラヤータイ」と言う。

また, 遠くからでもひときわ目立つ高さ 72m の仏塔は, 1592 年に 19 代ナレスアン王が象にまたがり一騎打ちでビルマ王子を破り, ビルマ軍との戦いに勝利した記念の塔である。当時, ナレスアン王はビルマが先に建てたチェディ・プカオ・トンのパコダに対抗してこの仏塔を建立したが, 高さはわずかに及ばなかった。

## 16. ワット・プーカオトーン (Wat PhuKhao Thong)



写真 3-17

1569年、ビルマのバイナウン王がアユタヤを占領した時に建てた高さ80mを誇る寺院である。当初はビルマ様式があったが、その後アユタヤ王朝を再興したナレスアン王がタイ様式に改め、現在の塔は1754年に造られた。

1956年には仏歴25世紀を祝って頂上に2.5kgの黄金の珠が付けられ、別名「黄金の仏塔寺院」と呼ばれている。仏塔は階段で上に上れるようになっており、頂上からは遠くアユタヤの街が一望できる。

## 17. ワット・マヘーヨン (Wat Mahaeyong)



写真 3-18

1438年、チャオサームプラヤー王(1424～1448年)によって建立されたとされる寺院。鐘形の塔や、80体の象が基壇を囲むチェディ・チャー・ローム(仏塔)など、スコータイやシーサッチャナライにも広く見られるスリランカ様式が取り入れられている。

ターイサ王が3年間かけて大規模な修復を終了させた1713年には、建設工事の視察ができるようにと、近くに宮殿も建てられた。比較的きれいな形で残っている長方形の境内の、東側の正面入り口からレンガ塀に囲われた通路を行くと、布薩堂に出る。布薩堂には、本尊が祀られた跡が残っていて、その先にチェディ・チャー・ロームがある。象は仏教の教えとつながりが深い動物だが、ターイサ王は象狩りを愛好していて、ある年は30頭の象を乗せた船を建造して、インドへ象を輸出したと伝えられている。

## 18. ワット・クディーダーオ (Wat Gudi Dao)



写真 3-19

もともとは、マヘーヨン寺院とともにアユタヤ王朝前からあったと推測され、1715年にはターイサ王によって大規模な修復が行われた。2ヶ所ある境内への出入り口は道路に面していて、どちらも大きなアーチ型である。これがアユタヤ後期に見られる建築の特徴である。本堂は正面にあり、その西にはスリランカ様式の仏塔、北側には後にボロマコート王（1732～1758年）として即位するターイサ王の弟で、副王のボウンサターンモンコンが建設工事を指示するのに使ったとされる「カマリエン宮殿」が残っている。

## 19. 日本人町跡 (Japanese Settlement)



写真 3-20

6世紀初め、御朱印船貿易に携わった日本人たちが築き、最盛期には2000～3000人以上もの日本人が住んでいた。日本人の多くは、アユタヤの傭兵としてビルマ軍との戦いにも参戦したといわれる。日本人町の町長、山田長政は22代ソントム王から官位を与えられるほど大活躍したが、1630年に憤死し、日本の鎖国で18世紀初めにはこの街も消滅した、敷地内には石碑や2007年に日タイ修交120周年記念館が設立され、友好の歴史を知ることができる。

## 20. バン・パイン宮殿 (Bang Pa-In Palace)



写真 3-21

1637年、アユタヤ王朝24代目のプラサート・トオン王が建てた宮殿で、歴代の国王たちが夏を過ごす別荘として利用された。1767年のビルマ軍攻略以降、しばらく放置されたが、チャクリ王朝のラーマ4世と5世によって、現在のように再興された。離宮にはパビリオンと呼ばれる5つの館が点在している。湖の中央で華やかな光を放つタイ風建築のプラ・アイサワン・ティッパート、内部見学も可能な中国風建築が美しいプラ・ティナン・ウィハット・チャムルン、ルネッサンス風のプラ・ティナン・ワロパット・ピマンなどが存在している。

## 21. バンサイ民芸文化村 (The Bangsai Arts and Crafts Village)



写真 3-22

バンサイ民芸文化村は、タイのシリキット王妃による支援施設、バンサイ民芸文化センターの一部として1995年に設立された。バンコクから北へ車で約50分、アユタヤ遺跡へ行く途中にあるこの文化村はタイ4大地方(北・東北・中央・南)の伝統家屋、工芸・民芸品、生活用品が展示されている。4万平方メートルの敷地には、湖やトロピカルガーデンなどもあり、美しい景観の中でタイの生活や文化に触れることができる。

## 22. ワット・プッタイスワン (Wat PutthaiSawan)



写真 3-23

アユタヤ島外の南側に建つ寺院で、アユタヤ朝初代ウートーン王は、島内で都を構えるまで、ここを宮殿として3年間暮らしていたが、即位後、ここを修復して寺院名を現在の「ワット・プッタイスワン」に改名したと伝えられる。寺院のシンボルである白くてトウモロコシ形の塔堂＝プラーンは、アユタヤ初期に建てられたクメール様式のものがあるが、1898年に現在の姿に改築した。その正面には、ウートーン王の神像が祀られている。境内の西側には、僧侶が住む「僧域」があるが、その一角には船底を模した2階建ての建物があり、ここはアユタヤ後期の歴代王や市民らに広く尊敬された高僧のソムデット・プラプッタ・コーサーチャーンが住んだ場所であった。

## 23. ワット・タンミカラート (Wat Thammikarat)



写真 3-24

王宮跡東側に位置し、言い伝えによると、サイ・ナム・ブン王の息子であるプラ・ヤ・タミガラット王子が、自分の即位を記念して建てたと言う。当初はムカラット寺院と名付けられたが、後に現在の名前に改名されている。パナン・チェン寺院と同じ頃の建立と言われ、後々プラ・スィー・サンペット寺院に寄進された王宮の堀の側にある。ソントム礼拝堂には、以前ブロンズ製の大神像が祭られていたが、現存するのはその頭部のみで、チャオ・サン・プラヤー国立博物館に展示されている。それ以外にも、獅子像と13基の小仏塔に囲まれたセイロ

ン様式の大仏塔，プラノン礼拝堂に祭られている涅槃像の色とりどりのガラスで細工された足の裏などの見どころがある。

## 24. ポルトガル人町跡 (Portugal Settlement)



写真 3-25

チャオブラヤー川岸，町の西側サンパオロム地区に位置．ポルトガル人はアユタヤを訪問した最初の西欧人で，1151年，ラーマティボディ2世の時代，アジア総督 A Fonco de Al Buquerq の命令で，Du Arte Fernandes 率いる外交団がアユタヤを訪れたのが始まりである．現存するのは，サンパオロ，サン・ドミンゴ，サン・プレドの3つの教会跡のサン・プレド教会は，タイ国内に建てられた最初の教会で，ポルトガル人のためにソントム王が建てさせたと言われる．1984年に，文芸省芸術局とベン・ジエン協会の手により，ポルトガル人町跡の遺跡の修復工事が行われた．サン・ペトロ教会の古い場所からは，人骨や国内外の大量の土器，古美術品が発見されている．

### 3.3 アユタヤに対する観光地振興・観光都市計画

1991年，ユネスコにより「古代都市アユタヤと周辺の古代都市群」(Historic City of Ayutthaya and Associated Historic Towns)の名称で，世界文化遺産の登録を受けた<sup>39</sup>．アユタヤには廃墟になったものを含めると大小200以上の寺院が点在する．それによって，タイ国内のみならず世界中から多くの観光客が訪れ，独自の観光資源は伝統文化や古都の遺跡として年々増加傾向にある欧米とアジア諸国の観光者に注目されている．

その古都観光都市として現在のアユタヤに対する観光開発のため，遺跡保護だけではなく，観光振興や都市観光地のインフラ整備が重点と考えられる．それでは，今までアユタヤに対する観光地振興と共に都市観光計画に関してどんな対策方法を実施しているだろうか．以下に説明を行う．

#### 3.3.1 アユタヤの復旧経緯

世界遺産の登録以前にアユタヤでは，1767年にミャンマーとの戦後から，アユタヤ市内の建造物や石像は徹底的に破壊され，ほとんどの寺院は廃寺となり，王宮も台座を残すの

みとなったままであった。それから、1908年、国の根本的な文化歴史としてアユタヤが国家貴重品をとして重視する国王ラマ5世がアユタヤ島全体を国土保護区であると宣言されて以来、アユタヤの建造物や遺跡寺院を復旧することがはじまる時代といえる。

1932年、立憲革命を迎えたタイは、アユタヤを中部で最初の中州に制定し、1935年に史跡の復興を重要点と考えて、芸術局により大事な69個所の史跡に国立史跡に指定された。タイの芸術局は、国民の価値とアイデンティティを保全し、タイ社会が持続可能で豊かな発展に向かうために国家の芸術文化遺産や芸術の保存、教育、研究、普及、奨励、継承、開発の業務について責任を負っている。

1938年に財務省が中州内の土地私有制限を一部解放したため、市民が中州の土地に自由に入り込んで住んで居住しており、これが、現在までの史跡保護と復旧に際して大きいな問題の原因といえる。

そして、1956-57年には教育省の芸術局の手によって遺跡修復事業行われたが、政治状況の変化により事業は中止された。1966年、議会はアユタヤ中州の設備プロジェクトを承認し、保護と復旧に対して現地の調査に基づき考古学的計画を立てるために、初めて政府が芸術局に1,000,000 バーツ（現在の日本円約250万円）の予算を決定した<sup>40</sup>。

1976年は、内務省の都市計画局のアユタヤ都市計画提案に基づき、アユタヤの中州の遺跡を含む地域が正式にタイ芸術局により中州の20%、1,810 ライ（1ライ=1.6ha）アユタヤ歴史保全公園に指定された。

特に、第4次国家経済社会開発（1977-1981年）から国の観光産業開発時代がはじまり、国民に基本的な国文化歴史を重視計画であるが、芸術局の訪歴史公園来訪者数推移データによる1976年から1990年まで当時タイ人の人口約6000万人のうち12万人だけが、アユタヤ歴史公園を訪れた。

そのアユタヤ歴史公園の改善や観光開発をすべきこととなって、1991年バンコクまで繋がる6車線幹線道やパサク川には、より大きな橋が建設された<sup>40</sup>。その後、世界文化遺産に登録され、観光開発も目覚ましく行われた。その開発によって現在のアユタヤ観光状況は活発しつつである。

### 3.3.2 アユタヤの観光地整備に関する計画

#### (1) アユタヤ県の共同公共部門民間委員会の提案項目

タイのいくつかの県・自治体は地元開発のために、地域特性を考えて都市基本計画を策定することができる。そして、1998年3月20日アユタヤ県の共同公共部門民間委員会の提案をうけた閣議によって、アユタヤ県はタイの観光地と承認された<sup>40</sup>。

さらに、国家経済社会開発委員会の提案により、タイ中部の北部地域における観光産業において、アユタヤ県は、その中心に指定された。そのため、アユタヤ観光産業は急激に成長し、元々県民の主な収入は農業であったが、それ代わりに当時から現在のアユタヤ県民の主な収入は観光産業になってくる。

## (2) 古代都アユタヤにおけるマスタープランの改善計画

国の古都としてのアユタヤ歴史公園に対する保護、復旧と都市観光計画するため、1987年にはマスタープラン策定プロジェクトが承認され、第6と8次国家経済社会開発（1987-2001年）の予算をもって1991-2002年に第1期プロジェクトを実行期間としてきた。1995年度芸術局による歴史公園の大規模な再設備を含むマスタープランが提案され、この計画案に基づき重要な遺構の集中するアユタヤ島を再設備する事業が進行中である。この計画は下記の8計画から構成されている<sup>40</sup>。

- 第1.考古学的、歴史、旧跡に対して復旧と研究する計画
- 第2.インフラ整備改善計画
- 第3.環境及び景観改善計画
- 第4.コミュニティ改善計画
- 第5.内島の工場移動、風景整備計画
- 第6.観光情報提供計画
- 第7.経済社会開発計画
- 第8.事務所及び人材開発計画

上記より、アユタヤの地域住民の経済社環境の向上や地域開発のために、この計画を実施している。つまり、この全8計画の関連をみると、観光地を発展に応じることであり、特に第6計画の目的は、観光景観・観光地の駐車場改善作業、博物館改善作業身体障害者人むけのトイレ設備作業、観光情報提供センター改善作業を通じたアユタヤの観光地設備とに指定されている。

さらに、最初古代都アユタヤにおけるマスタープランの目標を達成できるよう、さらに、継続的作業するため、第2期プロジェクトを存在する。

これらのアユタヤ都市計画および土地利用計画<sup>41</sup>と古都アユタヤにおけるマスタープランの関連によってアユタヤの観光資源を有するアユタヤの中州内と周辺地域は、3種類のゾーンに分けられる。図3-6に示すよりそれぞれ具体的に説明である。

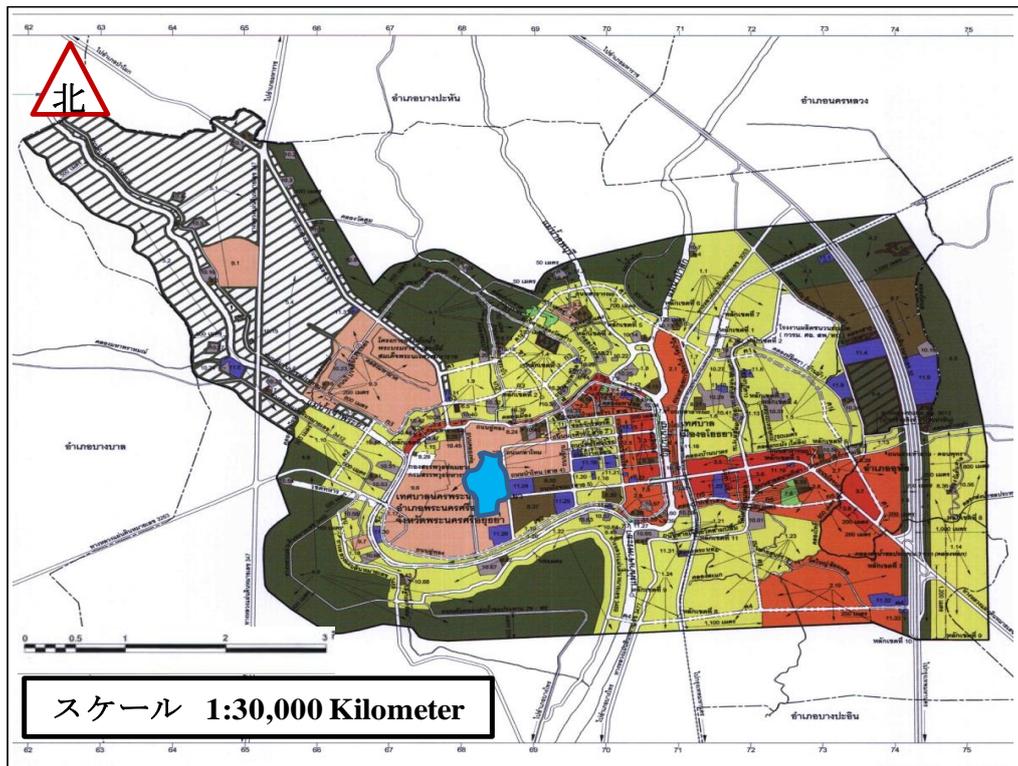


図 3-6 アユタヤの都市計画および土地利用計画 2009 年  
 出典：タイの内務省，公共事業及び都市計画局

-  1. 歴史と建築的な観光地ゾーン：世界遺産を中心に，遺跡が存在するため，居住や建設を禁止する地域。
-  2. 芸術と文化的な観光地ゾーン：伝統的な芸術と文化を促進するため，居住や他の活動を禁止する地域。
-  3. 自然教育とレクリエーション観光地ゾーン：地元の人のために，公園として指定する地域。

さらに，次の標記はそれぞれ土地利用目的計画で指定される地域である。

	低密度住居地域		教育施設地域
	中密度住居地域		教育施設地域
	高密度住居地域		農地改革地域
	教育施設地域		宗教施設地域

上記に示したより色は地目計画が有効期間 5 年(2010-2015 年)のアユタヤの都市計画および土地利用計画であって、観光地整備保存・世界遺産保全管理規制および将来、持続可能な観光地に対する適切効果があるかどうか考えられる。

### 3.4 アユタヤの観光状況

2007 年、タイ・観光スポーツ省観光部のアユタヤ観光客数経年変化データ<sup>42</sup>(図 3-7)によると、タイを訪れた外国人旅行客数はのべ 1446 万人で、このうち 119 万人がアユタヤを訪れた。

しかしながら、訪タイ外国人来訪者数と訪アユタヤ外国人来訪者数推移を比較すると、アユタヤにおける来訪者はまだまだ多くないと考えられる。さらに、図 3-8 に示す全アユタヤ来訪者数と居住地別来訪数推移に見ると、外国人来訪者より国内タイ人來訪者の割合が高く上回っている。

詳しくこれを見ると、図 3-9 に示す 2002-2008 年居住地別アユタヤ来訪者を見ると、現在アユタヤを訪れる外国人観光客で、日本人が第 1 位であり、外国人来訪者の半数の割合になった。アジアから来訪者は日本人以外に中国人と台湾人もいるが、アユタヤ観光地にとって、割合が高い居住地来訪者は遠く欧米から来る来訪者と分かる。これより、日本と欧州の旅行者に対して、アユタヤの魅力が高く、効果的な持続的文化歴史観光地促進対策をする必要があると考えられる。

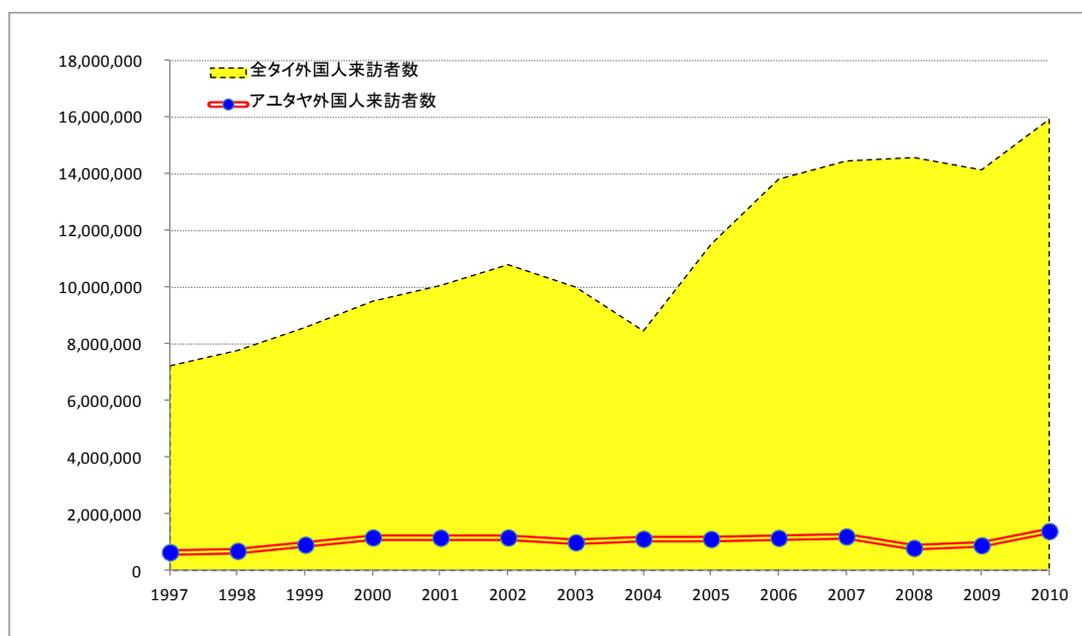


図 3-7 全タイ外国人来訪者数とアユタヤ外国人来訪者数の推移

出典：Thailand Department of Tourism, <http://www.tourism.go.th/home/listcontent/11/221/276>, 2012.11.20より筆者作成

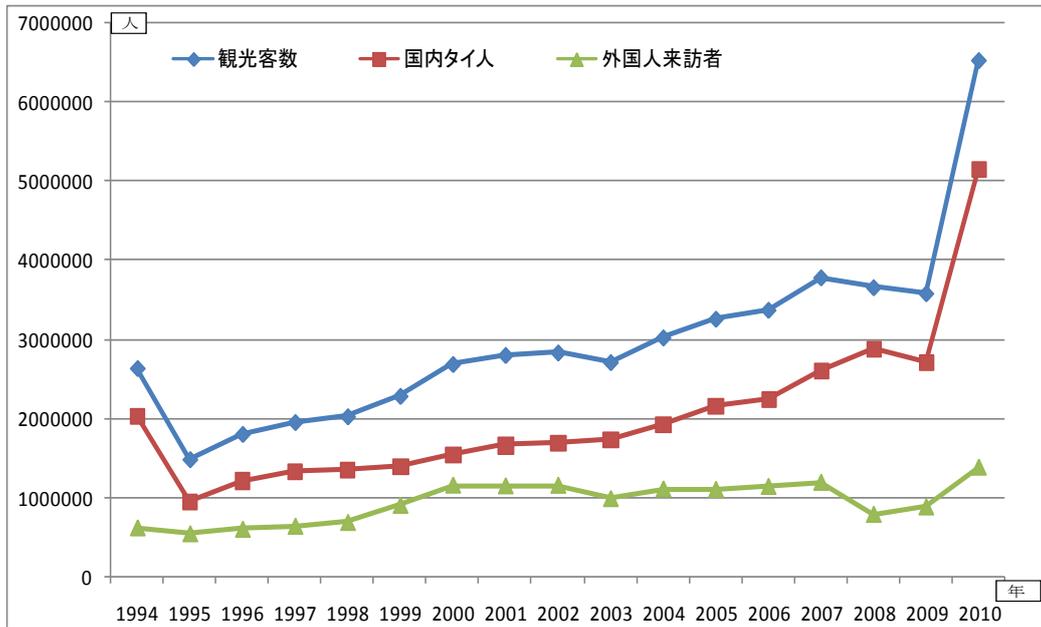


図 3-8 全アユタヤ来訪者数と居住地別来訪者数推移

出典：Thailand Department of tourism, [www.tourism.go.th/home/listcontent/11/221/276](http://www.tourism.go.th/home/listcontent/11/221/276),  
2012.11.20 より筆者作成

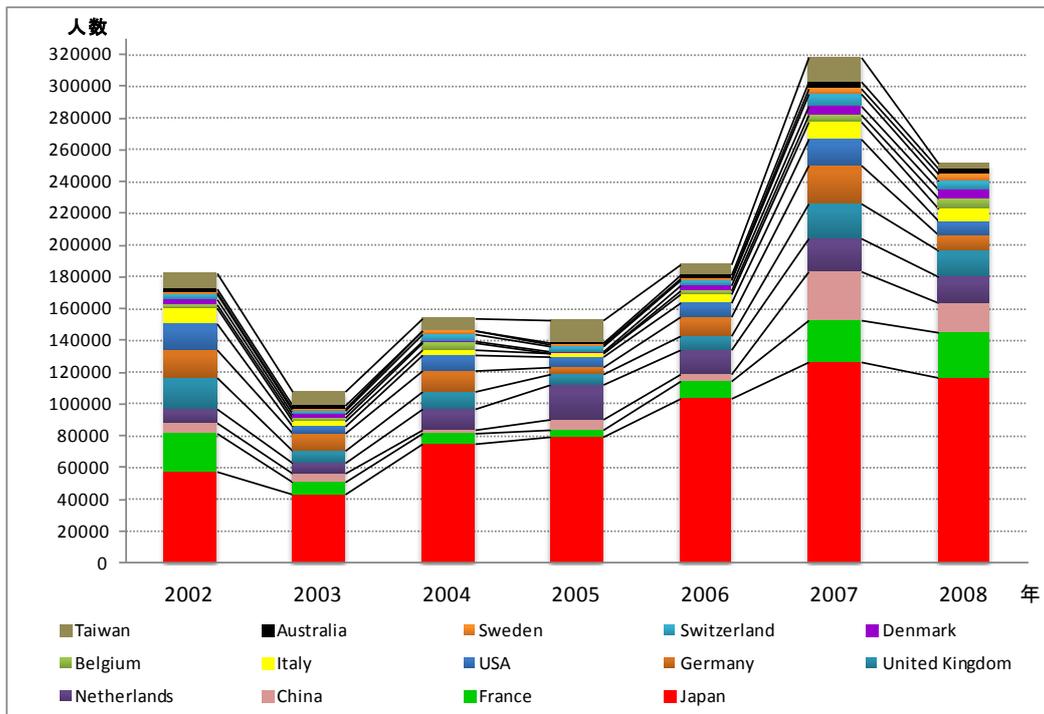


図 3-9 居住地別アユタヤ外国人来訪者数の推移

出典：Thailand Department of tourism, [www.tourism.go.th/home/listcontent/11/221/276](http://www.tourism.go.th/home/listcontent/11/221/276),  
2012.11.20より筆者作成

さらに、図 3-10～図 3-12 に示すように、タイの国際に有名な観光都市としてバンコク、チャンマイ、パタヤ、プーケット等をアユタヤとの比較し、アユタヤ観光都市のポジショニングを把握する。2009～2012 年、タイにおける観光客推移でみると、アユタヤは観光客数が多い。逆に、観光収入と宿泊数平均では、他の観光都市より低いと分かった。アユタヤは日帰り旅行が一般的であると考えられる。

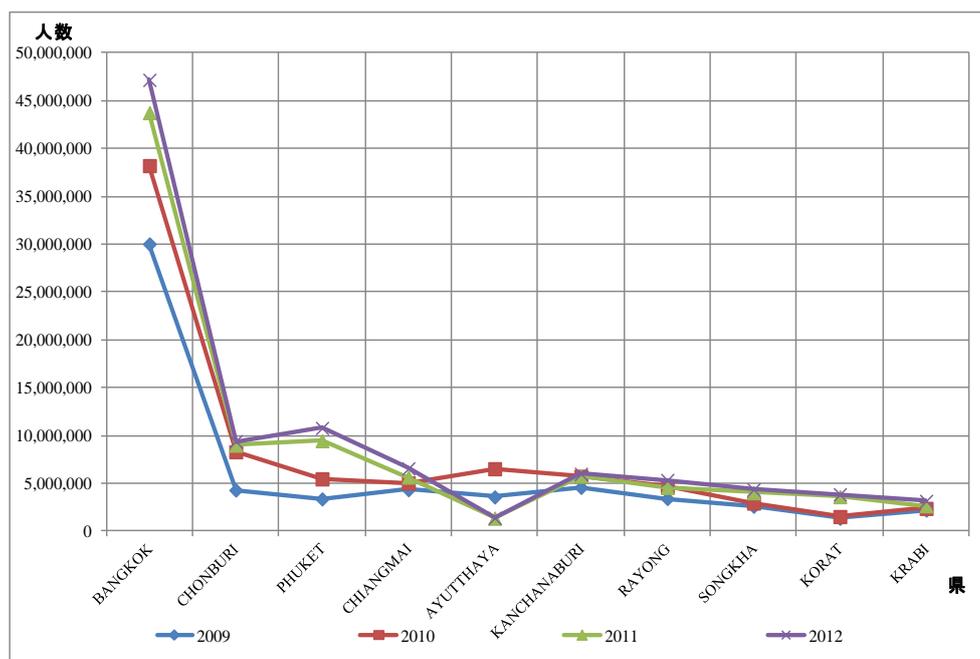


図 3-10 2009-2012年タイにおける各観光都市の観光客数推移

出典：Thailand Department of tourism, [www.tourism.go.th/home/listcontent/11/221/276](http://www.tourism.go.th/home/listcontent/11/221/276),  
2012.11.20より筆者作成

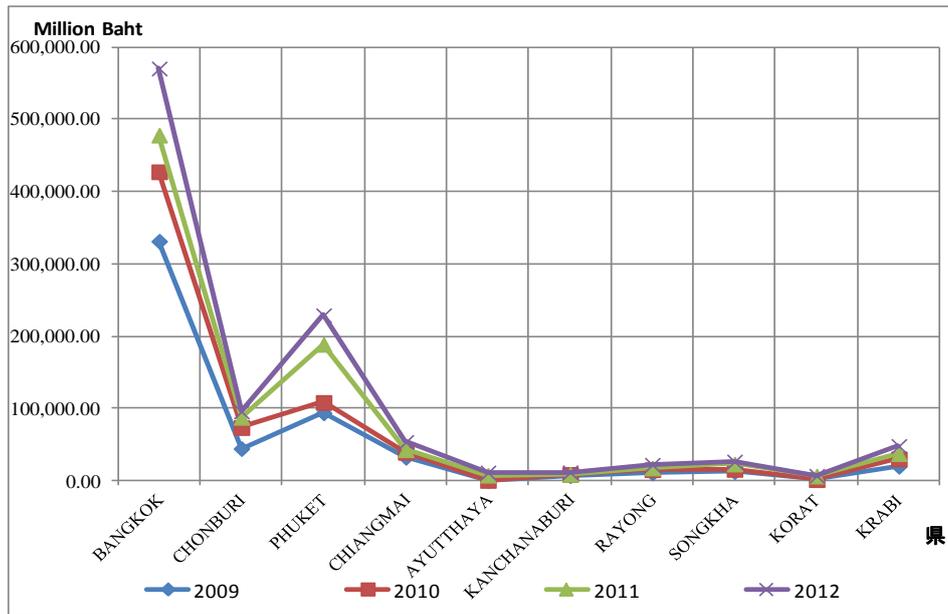


図 3-11 2009-2012年タイにおける各観光都市の観光収入推移

出典：Thailand Department of tourism, [www.tourism.go.th/home/listcontent/11/221/276](http://www.tourism.go.th/home/listcontent/11/221/276),  
2012.11.20より筆者作成

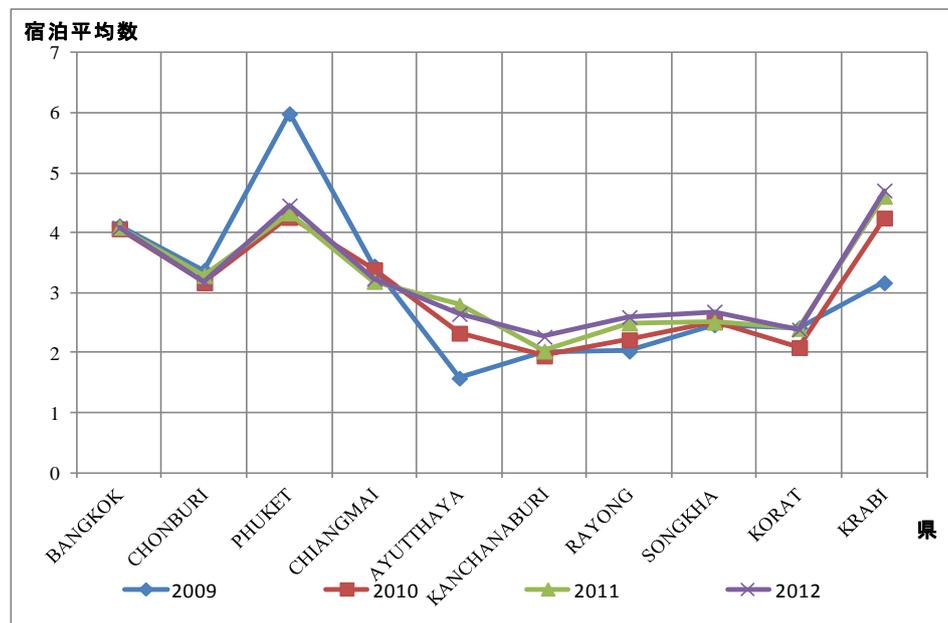


図 3-12 2009-2012年タイにおける各観光都市の宿泊数平均推移

出典：Thailand Department of tourism, [www.tourism.go.th/home/listcontent/11/221/276](http://www.tourism.go.th/home/listcontent/11/221/276),  
2012.11.20より筆者作成

### 3.5 アユタヤとアジア観光都市のポジショニング比較分析

本節は、5章における分析対象着地であるタイ・アユタヤ観光のポジショニングを明らかにするため、アユタヤにおける観光状況を把握した。アユタヤを訪れる外国人旅行者で、多いのは日本人である。

そこで、日本人の旅行先満足度を提供する統計ウェブサイト [www.4travel.jp](http://www.4travel.jp) の 38 アジア都市観光地に対する日本人海外旅行の人気アジア都市観光地の満足度評価<sup>43</sup>に基づいて、各アジア都市観光地の特徴的を把握し、アユタヤとアジア都市観光地と比較することを目的とする。それを対して主成分分析、クラスター分析手法を適用して、アユタヤと各アジア観光地を確認した。国際交流的なアユタヤにおける観光地発展に関してポジショニング特性を明らかにできると考えられる。

主成分分析(PCA; Principal Component Analysis)とは、多数の変量の値をできるだけ情報の損失なしに、1個または少数個( $m$ 個)の総合的指標(主成分)で代表させる方法である。 $p$ 変量( $p$ 次元)の観測値を  $m$ 個( $m$ 次元)の主成分に縮約するという意味で、次元を減少させる方法と言うこともできる。

主成分は、持っている情報量の順に第1主成分、第2主成分、...となり、データの持つ変数の数だけ求まるが、一般に累積寄与率が0.8を超えるまでの主成分を用いる。各対象を関連属性について評価(属性データアプローチ)する方法である。

表 3-4 38 アジア都市観光地の満足度評価

NO.	国	都市名	観光	ホテル	グルメ	ショッピング	交通
1	韓国	ソウル	4.07	4.08	4.40	4.26	4.24
2	インドネシア	バリ島	4.28	4.49	4.27	4.03	3.75
3	タイ	バンコク	4.18	4.02	4.04	3.98	3.95
4	香港	香港	4.14	4.00	4.19	3.85	4.21
5	台湾	台北	4.13	3.88	4.36	3.75	4.26
6	中国	上海	4.13	3.81	3.91	3.34	3.91
7	シンガポール	シンガポール	3.94	4.13	4.19	3.71	4.21
8	中国	北京	4.38	4.09	3.89	3.60	3.94
9	ベトナム	ホーチミン	4.06	4.06	4.29	4.04	3.48
10	タイ	チェンマイ	4.23	3.88	4.06	3.86	3.63
11	カンボジア	シエムリアブ (アンコールワット)	4.72	4.18	3.69	3.41	3.61
12	タイ	ブーケット	4.14	4.25	4.31	3.70	3.64
13	中国	マカオ	4.24	4.22	4.26	3.43	3.47
14	マレーシア	クアラルンプール	3.74	4.06	4.07	3.96	3.97
15	韓国	釜山	4.22	4.13	4.57	4.29	4.27
16	マレーシア	コタキナバル	4.00	4.42	4.25	2.87	3.67
17	ベトナム	ハノイ	3.86	3.79	4.01	3.63	2.68
18	フィリピン	セブ島	3.43	3.47	4.17	3.20	2.71
19	マレーシア	ベナン島	3.82	3.94	4.11	3.53	3.61
20	中国	西安	4.63	4.05	4.08	3.84	3.88
21	マレーシア	ランカウイ島	3.68	4.25	4.14	3.21	3.38
22	タイ	サムイ島	4.02	4.13	4.42	3.74	3.75
23	フィリピン	マニラ	3.33	4.05	3.64	3.31	3.40
24	タイ	アユタヤ	4.41	3.75	3.73	3.53	3.94
25	タイ	パタヤ	4.18	3.90	3.97	3.86	4.26
26	インド	デリー	4.13	3.46	3.94	3.12	2.81
27	中国	広州	3.75	4.00	4.07	3.64	3.85
28	韓国	チェジュ	4.00	4.03	4.32	3.50	3.65
29	ラオス	ルアンプラバン	4.02	4.28	3.83	3.32	3.33
30	中国	杭州	4.56	3.79	4.03	3.43	3.50
31	台湾	桂林	4.55	4.00	3.78	3.57	3.92
32	ラオス	ビエンチャン	4.14	3.67	3.28	3.07	3.33
33	ネパール	カトマンズ	4.28	3.32	3.91	3.25	3.00
34	中国	高雄	3.71	3.85	3.96	3.43	3.92
35	中国	九寨溝	4.80	3.62	3.02	2.91	3.37
36	台湾	九分	4.39	3.95	4.33	3.73	4.25
37	ベトナム	ホイアン	4.38	4.12	3.98	3.55	3.29
38	インドネシア	ジャカルタ	3.43	4.00	3.33	3.00	2.83

出典：日本人海外旅行のアジア人気都市ランキング, [www.4travel.jp](http://www.4travel.jp), 2010.11.20より筆者作成

使用データは、数多くの観光地を取り上げ、要因別に評価している [www.4travel.jp](http://www.4travel.jp) のサイトから 2010 年 11 月 20 日に掲載される 38 アジア都市観光地に対する日本人の観光地評価である(表 3-4)。それぞれ観光、グルメ、ショッピング、ホテル、交通について満足度評価得点が 5 段階評価 (1 点～5 点) であるデータを用いて主成分分析を実施した。

表 3-5 に示すように、第 3 主成分まで累積寄与率が 85% となっていることがわかり、主成分 1 は、グルメ、ショッピング、交通の評点が高ければ高いほど、マイナス値が大きくなる軸“観光消費、交通”と解釈できる。主成分 2 は、観光資源に示す軸である。主成分 3 は、ホテルの評点が高ければ高いほど、マイナスの値が大きくなる軸“宿泊施設整備”と解釈できる。3 主成分に集約でき、イメージが形成されていると考えることができる。

表 3-5 主成分分析結果：主成分負荷量

	主成分1 観光消費・交通	主成分2 観光資源	主成分3 宿泊施設整備	寄与率
ショッピング	-0.90	0.16	-0.11	0.85
グルメ	-0.84	-0.24	-0.19	0.81
交通	-0.66	0.45	-0.32	0.74
観光	-0.01	0.95	0.04	0.90
ホテル	-0.21	-0.02	-0.97	0.98
負荷量の二乗和	2.00	1.19	1.09	
寄与率	40.04	23.72	21.84	
累積寄与率	40.04	63.76	85.59	

出典：筆者作成

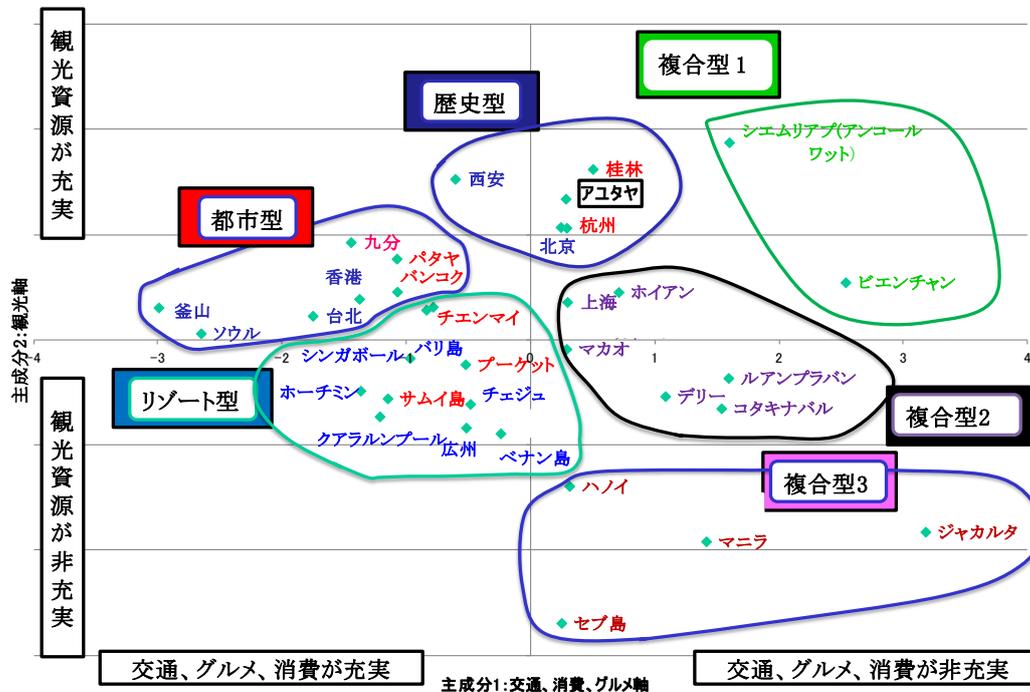


図 3-13 プロダクトマップ(クラスター分析適用後)

出典：筆者作成

さらに、サンプルをセグメント化するために、導出された第 3 主成分まで主成分得点を用いてクラスター分析を行った。「観光地型」で 6 セグメントに分類することができると仮定している。なお、プロダクトマップ(クラスター分析適用後)を作成したところ、3 つの評価パターンに分類することができた。3 つの評価パターンを解釈すると、ソフトを用いて表示下記のようなになる。

1. 第1主成分と第2主成分得点(観光諸費・交通と観光資源)
2. 第1主成分と第3主成分得点(観光消費・交通と宿泊施設整備)
3. 第2主成分と第3主成分得点(観光資源と宿泊施設整備)

図3-13に示すより、日本人海外旅行の人気アジア都市観光地の評価を基づいて、アユタヤと各都市観光のポジショニングを明らかにした。さらに、アジア都市観光地は、歴史型、都市型、リゾート型、複合型6グループに分けることができた。アユタヤは、観光評価において、アユタヤと中国・杭州は類似していると考えられる。

しかし、観光消費・交通・グルメは観光資源より充実しておらず、宿泊施設整備は、観光消費・交通・グルメより充実していないと考えられる。特に他のタイ都市観光地としてバンコク、チェンマイ、プーケット、パタヤとサムイ島との観光評価を比較すると、アユタヤでは、観光消費・交通・グルメと宿泊施設整備という面で観光評価が低いと明らかとなった。将来に観光地振興を考えることに対して、宿泊施設整備、交通システム、お土産商品の戦略を考えられる。

### 3.6 第 3 章まとめ

本章では、まず、タイ国の観光産業の歴史とタイにおける国際観光行政の成立・発展戦略を明らかにした。タイの観光産業では、国家経済発展を目指す経済社会開発 5 ヶ年計画は 1961 年に開始されたが、国内経済発展の最適化分散や観光開発の優先を掲げた第 4 次と第 5 次の経済社会開発計画（1977 年～1986 年）によって観光政策は強化されていくこととなると分かった。

さらに、第 7 次計画以降、観光産業は経常収支対策だけでなく、内需に目を向けた開発へ力を入れつつある。これは、外貨獲得を目的とした経済開発のための観光開発とともに、経済開発に伴う内需の消費拡大のための観光開発へ、政策的志向が変化しつつある。また、タイの主要外貨獲得源となってきた観光産業は、現在までにも、観光振興や開発対策を実行して進んでいる。

これらの分析を通じて、供給面である国の観光政策の取り組みは、需要面に相当する観光旅行者、観光旅行者に対応できるだろうか、観光地と観光者の評価がどのような評価特性を有するか考察し、反映することが重要と考えられる。さらに、今後に予想される一層の経済発展を考えると、個人個人の観光行動の実態詳細に把握することも重要となる。

まず、着地であり分析対象地であるアユタヤでは、1991 年世界文化遺産に登録を指定される前、アユタヤの歴史文化・史跡などに関する保護、復旧、と観光地開発および都市観光計画の対策を実行してきて、現在まで継続している。世界文化遺産に登録した後、タイ国内のみならず世界中から多くの観光客が訪れ、独自の観光資源は伝統文化や古都の遺跡として年々増加傾向にある欧米とアジア諸国の観光客者に注目されている。

そこで、アユタヤの観光地整備に対することは、タイのいくつかの県・自治体は地元開発のために、地域特性を考えて都市基本計画を策定することができる。そして、1998 年 3 月 20 日アユタヤ県の共同公共部門民間委員会の提案をうけた閣議によって、アユタヤ県はタイの観光地と承認された。

さらに、国家経済社会開発委員会の提案により、タイ中部の北部地域における観光産業において、アユタヤ県は、その中心に指定された。そのため、アユタヤ観光産業は急激に成長し、元々県民の主な収入は農業であったが、それ代わりに当時から現在のアユタヤ県民の主な収入は観光産業になってくる。

また、アユタヤの観光状況によって、その遺跡や歴史文化とした観光地特性であるアユタヤを訪れる外国人観光客で、圧倒的に多いのは日本人である。外国人来訪者の半数の割合になった。さらに、アジアから来訪者は日本人以外に中国人と台湾人もいるが、アユタヤ観光地にとって、割合が高いの居住地来訪者は遠く欧米から来る来訪者であり、同アジア諸国の来訪者が非常に低い状況を明らかにした。これは、居住地別によって文化感覚が違ふことがあると考えられる。

また、タイの国際に有名な観光都市としてバンコク、チャンマイ、パタヤ、プーケット

等をアユタヤとの比較し、アユタヤ観光都市のポジショニングを把握した。2009～2012年、タイにおける観光客推移でみると、アユタヤは観光客数が多い。

逆に、観光収入と宿泊数平均では、他の観光都市より低いと分かった。アユタヤは日帰り旅行としての旅行形態が一般的であると考えられる。

そのため、日本人海外旅行の人気アジア都市観光地の評価を基づいて、アユタヤと各都市観光のポジショニングを明らかにした。アユタヤは、観光評価において、アユタヤと中国・杭州は類似していると考えられる。しかし、観光消費・交通・グルメは観光資源より充実しておらず、宿泊施設整備は、観光消費・交通・グルメより充実していない。宿泊施設整備は、観光資源の豊かさに反して未充足状態にあるといえるより充実していないと考えられる。

### 第3章 参考文献

- <sup>1</sup> Pearce :Tourist Development, Longman Pub Group, p.257, 1989
- <sup>2</sup> Market Research Division of Tourism Authority of Thailand: タイ国政府観光庁設立 50 周年と世界経済変化の記録,*E-TAT Tourism Journal*,pp.1-4, 2007
- <sup>3</sup> Chantouch Wannathanom :Tourism Industry, Wirat Education Publishing,p.308,2009
- <sup>4</sup> Market Research Division of Tourism Authority of Thailand: タイ国政府観光庁設立 50 周年と世界経済変化の記録,*E-TAT Tourism Journal*,pp.1-4, 2007
- <sup>5</sup> Friedland, J.: Tourists stay away in droves, *Far Eastern Economic Review*, 155(22), pp.56-57,1992
- <sup>6</sup> Chantouch Wannathanom : Tourism Industry, Wirat Education Publishing,pp.299-339,2009
- <sup>7</sup> Payakawichean Paradej: 過去及び将来におけるタイの観光開発, *E-TAT Tourism Journal*,pp.1-16,2006
- <sup>8</sup> Market Research Division of Tourism Authority of Thailand: タイ国政府観光庁設立 50 周年と世界経済変化の記録,*E-TAT Tourism Journal*,pp.1-4, 2007
- <sup>9</sup> 城前奈美: 途上国における経済開発と国際観光 - 東南アジア諸国の経験 -, 博士学位論文要旨, 桜美林大学大学院, 2007
- <sup>10</sup> 金原達夫・金子慎時治・藤井秀道: 国際開発研究,第 18 巻第 1 号,2009
- <sup>11</sup> 城前奈美: タイの経済開発と観光産業の役割-貯蓄・投資ギャップの視点から-,日本観光学会誌第 36 号, 日本観光学会,pp.40-47, 2000
- <sup>12</sup> Boonyobhas Angsana :Tourism planning concept for Ko Samui, Thailand : A sustainable environment development approach, Doctoral Thesis, UMI, pp.13-18,1996
- <sup>13</sup> 橋爪紳也・神田考治・清水苗穂子:タイにおける文化遺産管理とツーリズム - スコータイ歴史公園を事例として - 国立民族学博物館調査報告 61, pp.83-95,2006
- <sup>14</sup> Maurizio Peleggi : National Heritage and Global Tourism in Thailand, *Annals of Tourism Research*, Vol.23, No.2, pp.432-448,1996
- <sup>15</sup> Patiphol Yodsurang : Architectural Heritage Interpretation; Case Study of The Historic City of Ayutthaya, The 1<sup>st</sup> International Graduate Study Conference, Silpakorn University pp.17-36, 2011
- <sup>16</sup> 塩谷さやか・中条潮 :「観光立国」への疑問-インバウンド観光政策と関連交通政策におけるオープン化の必要性 (統一論題 観光と交通) , 交通学研究 49, 日本交通学会, pp. 31-40, 2005
- <sup>17</sup> 鎌田裕美:航空を利用する観光客の動態と観光政策のあり方 ,2005 年度航空政策研究会研究助成論文集, 航政研シリーズ 465, 航空政策研究会,pp. 1-21, 2006
- <sup>18</sup> 野瀬元子: 東京都の観光政策の変遷に関する研究,東洋大学院紀要, 47, pp.55-89, 2010
- <sup>19</sup> Wirudchawong Niti : Policy on Community Tourism Development in Thailand, グローバル化とアジアの観光研究会, pp.13-26,2012
- <sup>20</sup> Siriporn McDowall and Youcheng Wang : An Analysis of International Tourism Development in Thailand : 1994-2007,*Asia Pacific Journal of Tourism Research*,Vol.14, Issue4,pp.351-370, 2009
- <sup>21</sup> 原田優也: タイのロングステイ観光の現状と課題, 産業総合研究, Vol.15, pp.119-135,2007
- <sup>22</sup> 藤井秀登: イールド・マネジメントと観光・交通産業, 明大商學論叢 89(1), 明治大学商学研究所, pp. 75-89, 2000
- <sup>23</sup> 城前奈美: タイにおける観光産業開発 - 投資奨励と外資規制 -, 長崎国際大学論議第 8 巻, pp.75-84, 2008
- <sup>24</sup> Manat Chaisawat: Policy and Planning of Tourism Product Development in Thailand :A proposed model, *Asia Pacific Journal of Tourism Research*,Vol.11,Issue1,pp.1-16,2006
- <sup>25</sup> 株式会社国際協力銀行: タイの投資環境, p.31, 2012

- 
- <sup>26</sup> Asian Development Bank: Key Indicators for Asia and the Pacific 2011, <http://www.adborg/key-indicators/2011/part-iii-regional-tables>, Viewed on 2011.12.5
- <sup>27</sup> タイ国政府観光庁: Office of Tourism Development, タイ語, <http://www.tourism.go.th/2009/th/statistic/tourism.php?cid=12>, Viewed on 2010.6.15
- <sup>28</sup> Thailand National Statistical Office: *Core Economic and Social Indicators of Thailand* 2011, p.29, 2011
- <sup>29</sup> Market Research Division of Tourism Authority of Thailand:タイ国政府観光庁設立 50 周年と世界経済変化の記録, *E-TAT Tourism Journal*, pp.1-4, 2007
- <sup>30</sup> Chantouch Wannathanom : Tourism Industry, Wirat Education Publishing, pp.305-339,2009
- <sup>31</sup> Pearce :Tourist Development, Longman Pub Group, p.257, 1989
- <sup>32</sup> Friedland,J.:Tourists stay away in droves, *Far Eastern Economic Review*,155(22),pp.56-57,1992
- <sup>33</sup> Elliott, James : Government Management of Tourism – A Thai Case Study-, *Tourism Management*, Sep.1987, pp.223-232, 1987
- <sup>34</sup> Charnvit Kasetsiri: *Discovering Ayutthaya* ,Dream Catcher Graphic Co., Ltd, 日本語版: 初版第 1 刷, 2007 年 4 月
- <sup>35</sup> Derick Garneir : *Ayutthaya : Venice of the East*, River Books, Thailand, 2004.
- <sup>36</sup> Charnvit Kasetsiri : *Discovering Ayutthaya* ,Dream Catcher Graphic Co., Ltd, 日本語版: 初版第 1 刷, 2007 年 4 月
- <sup>37</sup> 服部一人: 交易が築いた王朝の栄華世界遺産アユタヤ, <http://www.nikkei.asia/gallery/vol58/58tokushu.pdf>, Viewed on 2010.1.15
- <sup>38</sup> Unseen Tour Thailand: [http://www.unseentourthailand.com/pgaller/?module=gallery&cate\\_id=5&id=49&page=all](http://www.unseentourthailand.com/pgaller/?module=gallery&cate_id=5&id=49&page=all), Viewed on 2010.1.15
- <sup>39</sup> UNESCO World Heritage Centre, <http://whc.unesco.org/en/list>, Viewed on 2010.1.15
- <sup>40</sup> SJA and Three D Consultants A Final Report on the Revision of the Master Plan for Ayutthaya Historic City: A Final Report(In Thai),for the Department of fine Arts, NSP Printing Group,Bangkok, 1994
- <sup>41</sup> タイの内務省: 公共事業および都市計画局, 2009
- <sup>42</sup> タイ国政府観光庁 Office of Tourism Development, <http://www.tourism.go.th/2009/th/statistic/tourism.php?cid=12>, Viewed on 2010.1.15
- <sup>43</sup> 日本人海外旅行のアジア人気都市ランキング : [www.4travel.jp](http://www.4travel.jp), Viewed on 2010.11.20

## 第 4 章 タイ人の観光実態分析

### 4.1 はじめに

2013年に、はじめて1,000万人を超えた訪日外客数であるが、その国・地域の構成比率は韓国、台湾、中国、香港、米国、タイの順となっている。タイは6位であるものの、2012年に対する伸び率は74%とその中でも最も高く、その原因として同国の経済発展や各種観光プロモーションによる効果、円高の是正やビザの免除措置などの原因が考えられ<sup>1</sup>、経済発展を示す実質GDP成長率は6.5%（2012年）<sup>2</sup>である。その一方、1人当たりGDPは5678ドル<sup>3</sup>（日本：370.7万円<sup>4</sup>、2012年）、自動車保有台数は人口千人当たり165台<sup>5</sup>（日本：591台<sup>6</sup>、2010年）と経済発展の余地は大きく、旅行の質や頻度など観光行動への影響が考えられる。

さて、タイにおける個人の観光行動把握のために、タイ政府観光庁とタイ統計局によって、国内観光旅行回数、国内と国外観光行動実態を明らかにするために、2009年から全国の世帯主を対象としてアンケート調査が実施されているが、日帰り、宿泊、国外旅行という旅行形態間の競合関係や、収入の増加が旅行需要に及ぼす影響について、十分考察がなされていない<sup>7</sup>。

さらに、タイでは、1970年代以降の経済発展につれて、観光収入を着実に増大させてあり、外国人観光客の主要マーケットとなっているが、国内タイ人は、少ないのが現状である。また、2012年タイ観光客入り込み数に含める割合は、タイ人旅行者：75%、外国人旅行者：25%であり、主なマーケット外国人旅行者よりタイ人旅行者の割合が高い。さらに、人口減少・少子高齢化が進展しており、国民のゆとりを求める志向の高まり等を背景とした観光旅行者の需要の高度化、少人数による観光旅行の増加等、観光旅行の形態の多様化の近年の観光をめぐる諸情勢の著しい変化への的確な対応は、十分に行われていない。そのため、本章では、発地としてタイ国民以外居住地を含めず、タイ国民観光実態を主として明らかにする。

タイ政府による観光振興をみると、外国人観光客増加のために観光誘客キャンペーンが繰り返される一方、国内のタイ人観光客に対する観光施策が少ないことから、2003年に「UNSEEN IN THAILAND」と称する観光誘客キャンペーンが実施されている<sup>8</sup>。このことから、今後予想される一層の経済発展と観光客を受け入れ、彼らの満足度を満たすことを考えると、個人個人の観光行動の実態を詳細に把握するとともに、前述した旅行形態間の競合や将来の旅行需要の推定が重要と考えられる。

このような問題意識にたち、本論文では、タイ国民を対象としたWeb調査による個人の観光行動データを用いて、タイ国民の観光行動実態を把握するとともに、タイ国民の観光行動に影響を与える要因の同定を目的とする。

## 4.2 従来の研究と本研究の位置付け

タイの国内観光行動に着目した研究は、個人属性、収入、旅行中に実施する活動、旅費などによるタイ国内観光行動構造を明らかにしたもの<sup>9</sup>、タイ人国内旅行の意思決定に影響を与える要因に関する研究したもの<sup>10</sup>、高収入国内観光客行動を研究した事例はあるものの<sup>11</sup>、タイの国内観光行動構造に着目して性年齢階層や収入などの個人属性との関連性を把握した分析は十分行われていないと考えられる。

また、タイ統計局とタイ国政府観光庁は、2009年に初めてタイ国民観光行動調査を実施しており、前年度に実施した観光旅行の回数、目的、目的地、旅行形態、同行者、利用交通機関、利用情報媒体、利用宿泊施設、旅費などの旅行実績が聞き取られているが<sup>12</sup>、その分析は単純集計が主なもので、データの公表も限定的である。

以上から、独自に調査を行い、日帰りから国外旅行までの旅行形態を包含した分析が必要と考えられる。

さて、従来の研究と本研究の位置づけであるが、観光行動を中心とした研究は、個人属性による宿泊観光旅行発生量への影響を分析し、月別発生量の変動を明らかにした。従来、観光発生量予測では単に属性毎の平均値の算出に留まっていたが、時間的変動をも考慮した点が研究の特徴と述べている<sup>13</sup>、観光旅行発生に対する地域格差は個人属性によっても異なると考え、性別や年齢、所得などの個人属性セグメント別を分析している<sup>14</sup>。経済状況の影響を明らかにしたことであり、高度経済成長期前後で経済指標に対する旅行発生量の反応が異なり、高度経済成長後の方が、経済指標の増分に対する旅行発生量の増加が大きいことが確認された。なお、旅行先分布モデルの中に査証変数を導入し、査証規制緩和政策による来訪者数の増加を定量的に示した<sup>15</sup>、行動変化を世代、時代、年代による影響を受けているのかの整理を行った。特に「世代」という視点で時系列変化を分析したものなどがみられる<sup>16</sup>。

さらに、Fodness (1994)による人の行動や態勢による旅行を意思決定過程に影響を与える研究したもの<sup>17</sup>。野瀬(2008)による日光・箱根における外国人来訪者と日本人来訪者を対象として、来訪者の個人属性、居住地、行動や評価特性を明らかにした研究<sup>18</sup>、タイ・アユタヤにおける来訪者の個人属性や居住地を対象として、観光地評価特性を明らかにして再訪意向に影響を与える研究<sup>19</sup>を事例がある。本研究はこれらと同様のアプローチであり、観光行動と個人個人属性などで来訪者をセグメントした分析から、よりタイ人の観光実態を詳細な特性が把握できるものと考えられる。

## 4.3 アンケート調査の概要ならびに個人属性

### 4.3.1 調査対象者の概要

既出の調査目的を達成するため 2014 年 3 月 7 日～31 日までタイ国民に対して Web アンケート調査を実施して、1,007 サンプルを収集することができた。その主要調査項目は、下記のとおりである。

- I. 個人属性（性別、年齢階層、居住地、家族形態、職業、月收入、自動車保有、オートバイ保有、休日、利用情報媒体、興味ある旅行形態、過去 1 年間旅行）
- II. 過去 1 年間の国内旅行
  - ・日帰り旅行（旅行回数、旅行目的、目的地、交通機関、費用）
  - ・宿泊旅行（旅行回数、旅行目的、目的地、交通機関、宿泊数）
- III. 過去 1 年間の国外旅行（旅行回数、目的地、旅行目的、旅行期間、同行者、旅行形態、宿泊数）

アンケート調査実施にあたっては多様な属性の被験者を収集できるように心がけていた。また、住民基本台帳を個人研究者が利用できないため、厳密な意味でのランダムサンプリングになっていないことは事実である。しかしながら、年齢階層別の旅行形態別旅行回数の推定に当たっては属性別の集計を行っているため、収集したサンプルの構成比率の母集団とのかい離は問題とならない。

以上から、母集団全体からの構成比率の偏りは考えられるものの、推定値における偏りは問題とならないため、導出された結論に問題はないと考えられる。

観光行動の分析に先立ち、回収されたサンプルの個人属性を明らかにする。表 4-1 は、性別年齢階層別サンプル数を示したものである。性別では女性の構成比率が高く、また、年齢では、20 代と 30 代の構成比率が高い反面、60 代以上のそれが低い。

「2010 年度タイ国民の人口と住居調査」<sup>20</sup>によると、性別の構成比率は、男性：49%、女性：51%である。年齢階層別の構成比率は、20 歳未満：27%、20 代：15%、30 代：17%、40 代：17%、50 代：12%、60 代：7%、70 歳以上：6%となっている。タイの平均寿命は 74 才(WHO)で日本の 83 才より短いため、60 才以上の構成比率が 13%にとどまる。

表 4-1 性別年齢階層別の構成比率

年齢階層	サンプル数			構成比率			タイ国民人口 構成比率(2012)		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
20歳未満	19	24	43	5%	4%	4%	28%	26%	27%
20-29歳	113	240	353	30%	38%	35%	15%	15%	15%
30-39歳	113	215	328	30%	34%	33%	17%	17%	17%
40-49歳	52	63	115	14%	10%	11%	16%	17%	17%
50-59歳	44	53	97	12%	8%	10%	12%	13%	12%
60-69歳	30	17	47	8%	3%	5%	7%	7%	7%
70歳以上	10	14	24	3%	2%	2%	5%	6%	6%
総計	381	626	1007	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表 4-2 職業・休日・居住地・未既婚の構成比率

職業	サン プル 数	構成 比率	休日日数	サン プル 数	構成 比率
自営業	175	17%	月3日以下	119	12%
公務員	206	20%	4日	148	15%
会社員	292	29%	5日	48	5%
農家	29	3%	6日	61	6%
パート	66	7%	7日	25	2%
工場勤務	5	0%	8日	415	41%
学生	145	14%	9日以上	149	15%
主婦	21	2%	その他	42	4%
定年	19	2%	居住地		
無職	24	2%	首都近郊	465	46%
その他	25	2%	中部	138	14%
未既婚			北部	78	8%
未婚	578	57%	東部	74	7%
既婚	401	40%	東北部	176	17%
その他	28	3%	南部	76	8%
合計	1007	100%	合計	1007	100%

表4.1-4.2：出典：筆者作成

さらに、表 4-2 は、職業、休日日数、居住地、未既婚、家族形態を示したものである。構成比率が高いものに注目すると、職業は会社員(29%)となっており、休日では月 8 日の構成比率が高い。未既婚は、未婚の構成率が高い。なお、タイ国民観光行動調査<sup>7</sup>の居住地の区分を参考に居住地区分を設定すると、被験者の構成比較は、首都近郊(46%)、東北部(17%)、

中部(14%), 北部(8%), 南部(8%), 東部(7%)の区分で収集した居住地である。

次に、表 4-3 は、家族形態、月收入と自家用車保有を示しているが、「親と自分」の構成比率が非常に高い。自動車保有構成比率が高く、月收入は、46,875-93,750 円の割合が高いと分かった(100 円 : 31.25 パーツ)。なお、サンプル数ある程度確保するために、月收入を 1~5 のセグメントに設定した。

表 4-3 家族形態・月收入と自家用車の構成比率

家族形態	サンプル数	構成比率	セグメント	月收入	サンプル数	構成比率
単身	174	17%		無し	92	9%
親と自分	381	38%	収入1	31,250円以下	88	9%
自分自身と子	40	4%		31,250-46,875円	125	12%
夫婦	108	11%	収入2	46,875-93,750円	298	30%
夫婦と18才未満の子	114	11%		93,750-140,625円	158	16%
夫婦と18才以上の子	74	7%	収入3	140,625-187,500円	91	9%
親と夫婦	30	3%		187,500-234,375円	45	4%
親と夫婦と子	60	6%	収入4	234,375-281,250円	21	2%
その他	26	3%		281,250-312,500円	22	2%
自家用車			収入5	312,500円以上	67	7%
保有	813	81%				
非保有	194	19%				
合計	1007	100%	合計		1007	100%

出典：筆者作成

#### 4.4 観光行動属性について

本研究の目的であるタイ国民の観光行動実態を把握するとともに、個人属性など観光行動に影響を与える要因を明らかにするために、まず、国内日帰り旅行、国内宿泊旅行及び国外旅行との競合、関連性に明らかことが必要と考えられる。

#### 4.4.1 国内日帰り・宿泊旅行の特性

2013年の1年間の日帰り旅行と宿泊旅行参加回数を聞き取りした。表4-4は、参加率ならびに構成比率を示したものである。旅行回数では、日帰り旅行：81%、宿泊旅行：79%の参加率となっている。また、算出した旅行回数単位(ネット)では、日帰り旅行：3.2回、宿泊旅行：3.2回と高く、参加率も同様に高い特徴を有する。

さらに、観光の実態と志向(日本観光協会実施、平成24年度調査速報)では、日本の宿泊観光旅行 平均回数(グロス)1.41回、平均回数(ネット)2.60回、宿泊観光旅行の参加率54.4%となっており、タイ人の宿泊旅行と比較すると、タイ人より日本人は1年間宿泊旅行することが低いと分かった。

また、旅行目的にみると、観光旅行として観光目的の構成比率が高く、日帰り旅行において、参拝・祭の目的旅行も高いことがわかった(表4-5)。

表4-4 日帰り旅行及び宿泊旅行参加率・単位

年間旅行回数	日帰り旅行		宿泊旅行		日本・宿泊旅行
	サンプル数	構成比率	サンプル数	構成比率	
0回	188	19%	208	21%	
1回	122	12%	148	15%	
2回	228	23%	209	21%	
3回	183	18%	150	15%	
4回	74	7%	93	9%	
5回	37	4%	44	4%	
6回以上	175	17%	155	15%	
合計	1007	100%	1007	100%	
旅行参加率	81%		79%		54%
平均回数(グロス)	2.6		2.5		1.4
平均回数(ネット)	3.2		3.2		2.6

出典：筆者作成

表 4-5 旅行目的構成比率

旅行目的	日帰り旅行		宿泊旅行	
	サンプル数	構成比率	サンプル数	構成比率
観光旅行	546	67%	578	72%
親戚・友人訪問	66	8%	58	7%
帰省	37	5%	74	9%
参拝、祭	86	11%	23	3%
出張、仕事	45	5%	47	6%
買い物	25	3%	5	1%
学校関係	5	1%	7	1%
新婚旅行	0	0%	4	1%
不明	9	1%	3	0%
合計	819	100%	799	100%

出典：筆者作成

#### 4.4.2 観光情報利用媒体

表 4-6 は、日帰り旅行、宿泊旅行と国外旅行の目的地を決めるときに参考にする情報媒体について示したものである。タイ国民観光行動調査を参考に観光情報利用媒体を設定する。複数回答可として聞き取りしたところ、年齢階層別により口コミとインターネットの割合が高い。さらに、60代以上は、テレビと口コミの利用率の高さが特徴である。

表 4-6 利用情報媒体の指摘割合

	20歳以下	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70歳以上	サンプル全体
テレビ	23%	17%	26%	17%	20%	47%	67%	23%
新聞	2%	6%	8%	10%	12%	32%	42%	10%
雑誌	23%	29%	36%	19%	12%	19%	8%	27%
ガイドブック	19%	30%	29%	36%	16%	13%	4%	27%
口コミ	51%	58%	56%	67%	81%	72%	58%	61%
インターネット	74%	84%	86%	72%	59%	30%	4%	76%
パンフレット	14%	15%	19%	15%	10%	9%	0%	15%
旅行会社	12%	13%	14%	19%	14%	15%	13%	14%
その他	0%	1%	2%	1%	0%	2%	0%	1%

出典：筆者作成

#### 4.4.3 興味ある観光形態

表 4-7 は、タイ国民観光行動調査を参考に観光形態を設定され、「各自興味がある観光形態」について示した。各自に興味ある観光形態 (6 の観光形態, 上位 1~3 順まで複数回答可) を聞き取りしている。次に, 各の回答を「興味ある観光形態(最も興味ある: 3 点, かなり興味ある: 2 点, 興味ある: 1 点)まで」(択一選択, 3 段階評価)として全サンプルの平均値を算出した。観光形態において, 自然・海(2.5), 文化・歴史(1.9), 飲食・買い物とエンターテインメント(1.7) の順となっており, 性年齢階層別にみると, 若い者は自然・海が興味ある観光形態対象であることが理解できる。

表 4-7 興味ある観光形態平均値

	文化・歴史		自然・海		エンターテインメント		飲食・買い物		冒険・スポーツ		健康	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
20歳以下	1.6	1.6	2.7	2.6	2.0	1.6	1.8	2.0	1.7	1.6	1.0	1.4
20-29歳	1.9	1.8	2.5	2.6	1.8	1.5	1.6	1.9	1.8	1.5	1.1	1.4
30-39歳	2.1	1.9	2.6	2.7	1.7	1.5	1.6	1.7	1.6	1.4	1.2	1.4
40-49歳	2.0	1.8	2.3	2.5	2.1	2.1	1.5	1.7	1.6	1.4	2.3	1.9
50-59歳	2.1	2.1	2.2	2.2	2.4	1.2	1.9	1.9	1.6	1.6	1.7	2.0
60-69歳	2.1	2.0	2.4	2.3	1.5	3.0	1.7	1.9	1.8	2.3	1.5	1.4
70歳以上	2.1	2.6	2.7	2.0	1.0	0.0	1.6	1.3	0.0	0.0	1.8	2.0
合計	1.9		2.5		1.7		1.7		1.6		1.6	

出典：筆者作成

#### 4.4.4 利用交通機関

表 4-8 は、タイの日帰り旅行と宿泊旅行及び日本宿泊旅行の交通機関の分担率を示したものである。タイでは、自家用車として観光交通機関の構成比率が高く、宿泊旅行は、飛行機する交通機関を自家用車次に割合が高いとわかった。一方、日本では、宿泊交通機関に比較すると、タイは電車をする観光交通機関が少ない状況の差別である。今後、国の経済発展をもとにインフラを実施し、交通機関によりタイ人観光行動に与える影響があると考えられる。

表 4-8 タイ及び日本の利用交通機関構成比率

代表交通機関	日帰り旅行		宿泊旅行		日本・宿泊旅行
	サンプル数	構成比率	サンプル数	構成比率	構成比率
自家用車	613	75%	487	61%	47%
オートバイ	15	2%	4	1%	0%
路線バス	55	7%	58	7%	3%
貸切・旅行バス	16	2%	23	3%	10%
電車	28	3%	12	2%	26%
レンタカー	9	1%	25	3%	3%
タクシー	3	0%	0	0%	0%
飛行機	75	9%	186	23%	10%
船	0	0%	0	0%	1%
その他	5	1%	4	1%	1%
合計	819	100%	799	100%	100%

出典：筆者作成

#### 4.4.5 国外旅行の特性

表 4-9 は、国外旅行の回数と年齢階層に示したものである。タイ人の国外旅行回数平均(回/年/人)は、1.8 回となっており、国外回数が少ない。そして、年齢別による国外旅行回数は、50 歳未満の構成比率が高い特性が考えられる。

表 4-9 国外旅行回数構成比率

全体	0回	1回	2回	3回	4回	5回以上	合計
20歳以下	63%	21%	16%	0%	0%	0%	100%
20-29歳	52%	27%	14%	3%	2%	2%	100%
30-39歳	49%	28%	11%	5%	1%	5%	100%
40-49歳	56%	25%	12%	1%	3%	3%	100%
50-59歳	55%	28%	9%	4%	2%	2%	100%
60-69歳	70%	21%	9%	0%	0%	0%	100%
70歳以上	71%	25%	4%	0%	0%	0%	100%
合計	54%	27%	12%	3%	2%	3%	100%

出典：筆者作成

さらに、表 4-10 は、旅行形態、同行者と旅行目的の構成比率を示したものである。個人旅行の割合が高く、同行者は、友人・同僚と家族の割合が高いとわかった。旅行目的は、観光旅行である割合が非常に高い。以上、タイ人観光行動の特性を明らかにした。これらから、個人属性と実際の旅行行動との関連性を推察できると考えられる。

表 4-10 国外旅行目的・同行者及び旅行形態構成比率

旅行目的	サンプル数	構成比率	同行者	サンプル数	構成比率	旅行形態	サンプル数	構成比率
観光旅行	516	72%	一人	97	12%	個人	466	61%
新婚旅行	7	1%	家族	262	33%	団体	253	33%
親戚・友人訪問	23	3%	友人・同僚	331	42%	その他	44	6%
出張・経営関係	18	3%	恋人	88	11%	-	-	-
観光兼出張	116	16%	親戚	16	2%	-	-	-
買い物・料理	38	5%	-	-	-	-	-	-
合計	718	100%	合計	794	100%	合計	763	100%

出典：筆者作成

図 4-1 は、国外旅行目的地別訪問率を示したものである。ある目的国を回答したサンプル数の有効回答者数に含める割合を示している。これより、日タイの流動割合が比較的高く、これら以外に、国の地位にある東南アジアは、シンガポールの訪問率が高いとなっており、距離的な旅行目的地は、欧米州国までみられる。特に、これから、タイと日本観光流動を考えるためには、タイ人及び日本人の旅行行動と比較することが必要になる。

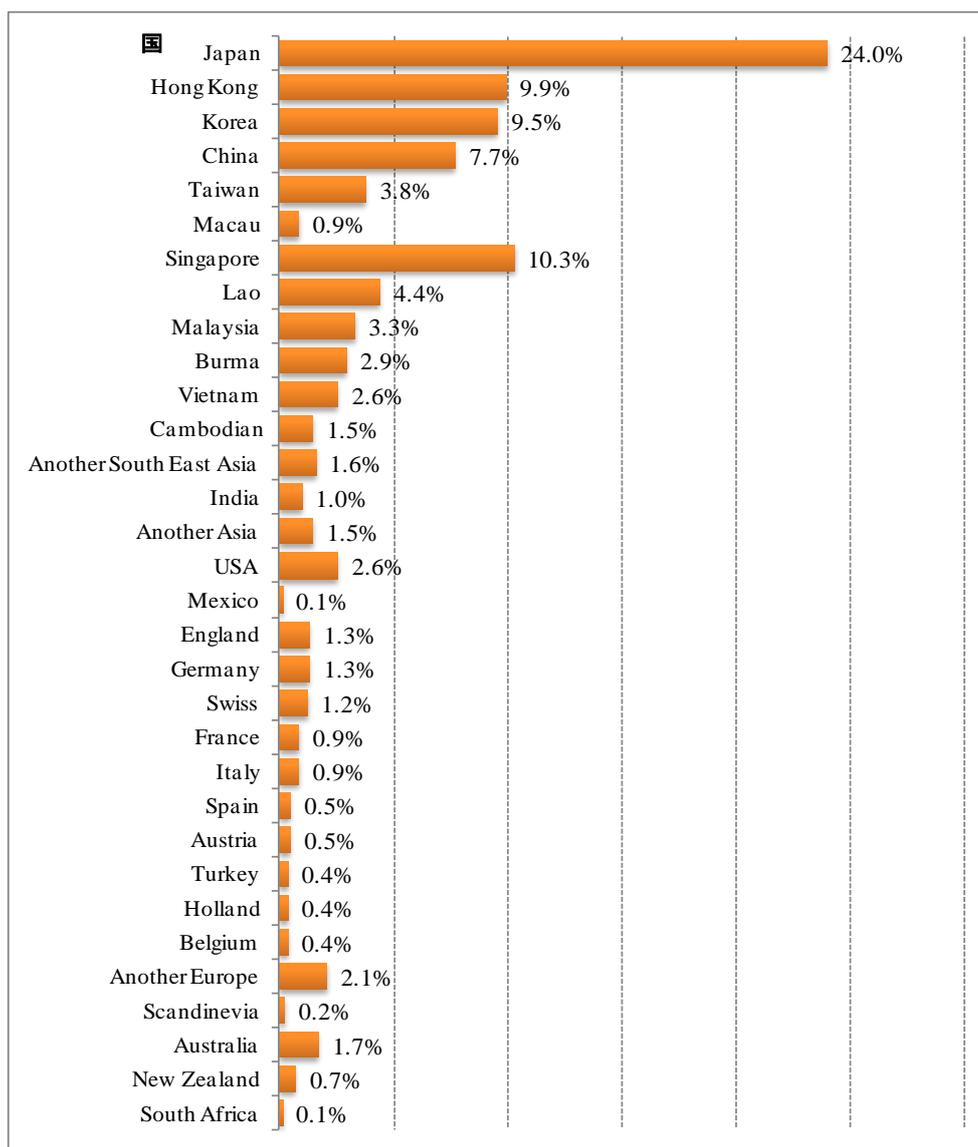


図 4-1 国外旅行目的地別訪問率

出典：筆者作成

次に、国内日帰り・宿泊旅行，国外旅行との競合，関連性が考えられるため，図 4-2～4-4 に「旅行回数」平均値(回/年/人)に限定した国内日帰り旅行と国内宿泊旅行，国内宿泊旅行と国外旅行，国内日帰り+国内宿泊旅行と国外旅行との関連性について示した。国内日帰り旅行から回数が多くと，国内宿泊旅行も多い。国内宿泊旅行から旅行回数が多いと，国外旅行回数が多い。さらに，国内日帰り+宿泊旅行が多くと国外旅行も多いと関連性が明らかとなった。

より詳細に明らかにするため，本研究は，国の経済発展の状況よりタイ国内観光旅行に関する設備投資を検討する際に，行動をはじめるとする旅行者に着目した分析が必要不可欠と考えられる。一方，今後，日本では，訪日タイ人旅行者に対する観光誘致政策も役に

立つことであると考えられる，そこで，国内日帰り旅行，宿泊旅行と国外旅行の旅行回数を用いてタイ観光旅行実態を把握ができると考える。

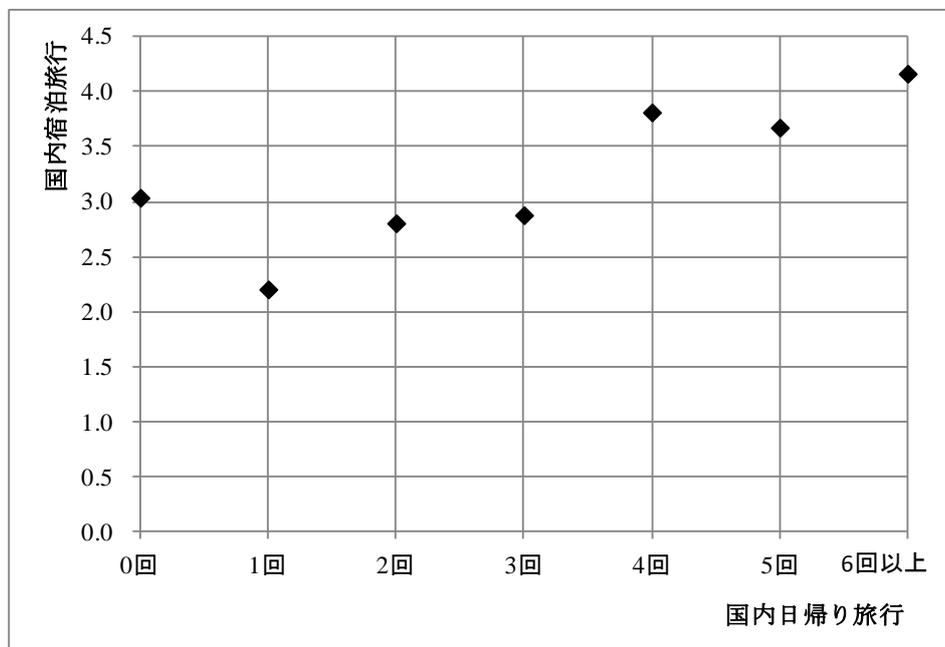


図 4-2 国内日帰り旅行/宿泊旅行回数平均値の比較

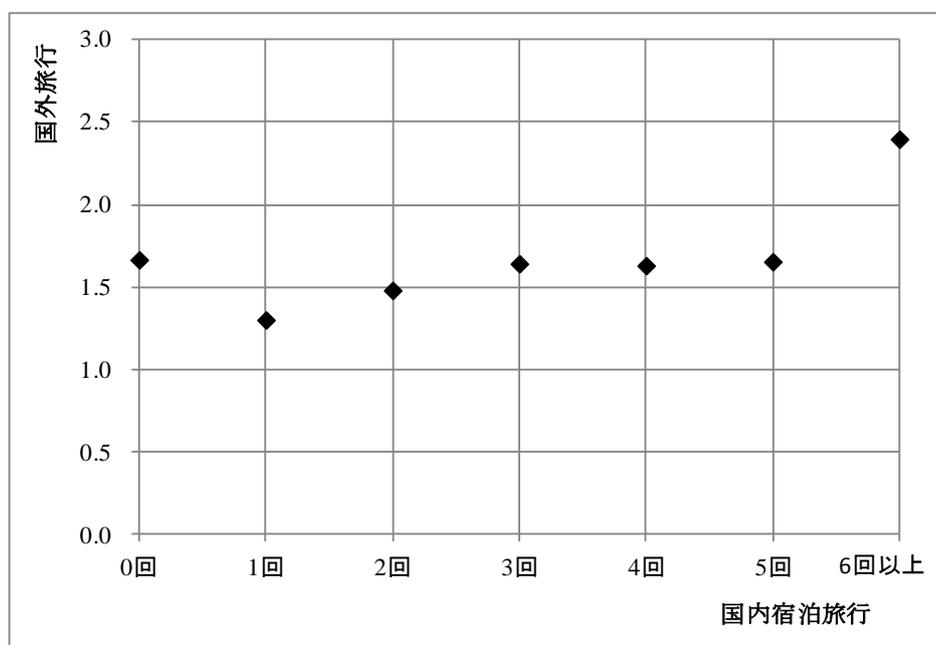


図 4-3 国内宿泊旅行/国外旅行回数平均値の比較

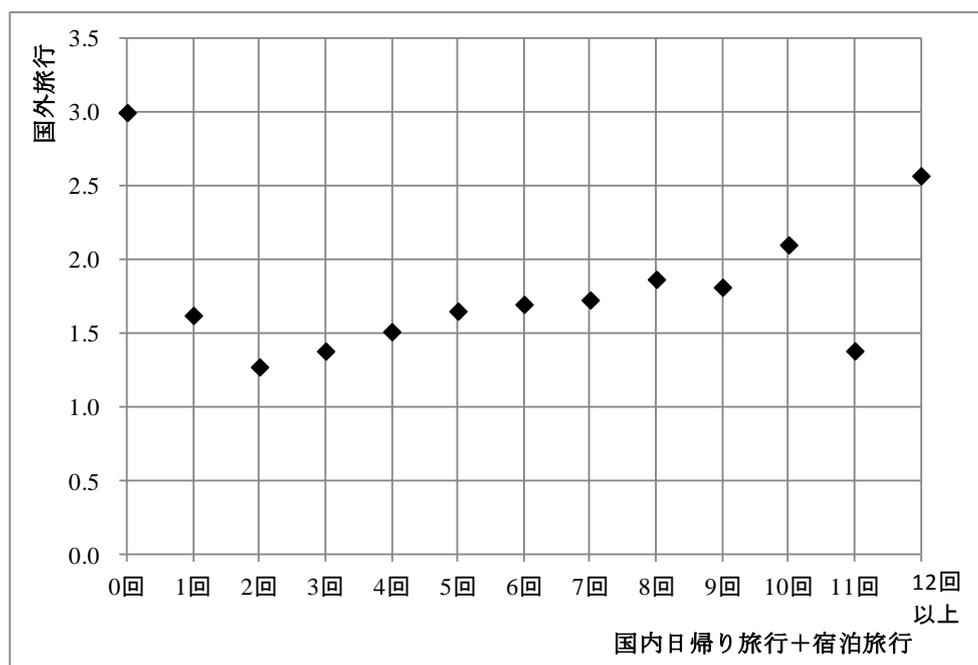


図 4-4 国内日帰り旅行と宿泊旅行/国外旅行回数平均値の比較

図4-2～4.4：出典：筆者作成

## 4.5 旅行行動について

### 4.5.1 年間日帰り・宿泊旅行，国外旅行回数の分析

本研究の調査では，タイ人観光旅行全般について聞き取りを行っている．国内年間日帰り旅行，宿泊観光旅行，国外旅行と旅行回数との関連性に着目した分析を行うと考える．具体的は，月収入，自動車保有，性年齢階層別により宿泊旅行回数に与える影響を明らかにするために重回帰分析によるパラメータ推定を行った．

推定では，回答が十分な 1,007 人のデータを用いたが，性別数のバランスがなかったため，本研究は男女別にモデル推定を行う．また，説明変数であるが，月収入(表 4-3 により収入 1-5 セグメントを設定する)，自動車保有，休暇制度，年齢に加え，個人属性のセグメントを用いた．なお，数量化 I 類では，説明変数を全てダミー変数として用いるため，同一説明変数において 1 つのカテゴリーを削除してカテゴリー変数を設ける．また，説明変数は，該当する場合：1，それ以外：0 とする．そのため，削除したカテゴリー変数による影響を 0 と比較して，各カテゴリーの影響の大小をパラメータで判断する．

表 4-11～4-13 に示すモデルは，セグメントの有無が相違点である．なお，全変数の影響，相対的大小関係を確認するために，t 値によらず全てのパラメータを示している．パラメータの符号条件，t 値(10%有意水準を採用)によって評価しながら，最終的に決定係数を判断した．

表 4-11 年間日帰り旅行回数のモデル推計結果

	男性1		男性2		女性1		女性2	
	係数	t	係数	t	係数	t	係数	t
定数項	2.91	5.89	2.23	9.59	2.43	5.74	2.80	30.00
20代	-0.68	-1.36			0.04	0.10		
30代	-0.64	-1.23			0.30	0.68		
40代	-2.00	-3.52	-1.46	-4.93	-0.48	-0.96	-0.65	-2.34
50代	-1.77	-3.12	-1.22	-3.90	-0.74	-1.45	-0.90	-3.09
60代以上	-1.94	-3.53	-1.34	-4.14	-1.03	-1.92	-1.24	-3.42
収入2	-0.11	-0.39			0.17	0.87		
収入3	-0.28	-0.79			0.85	2.96	0.84	3.38
収入4	-0.23	-0.49			1.09	2.33	1.07	2.40
収入5	0.62	1.46	0.73	2.13	1.38	3.47	1.35	3.62
自動車保有	0.70	2.63	0.68	2.67	0.16	0.79		
決定係数	0.12		0.11		0.06		0.06	
自由度調整済み決定係数	0.22		0.22		0.05		0.05	

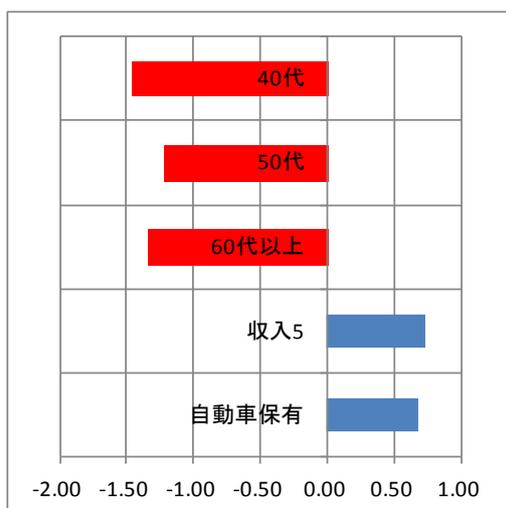


図 4-5 日帰り旅行男性のパラメータ

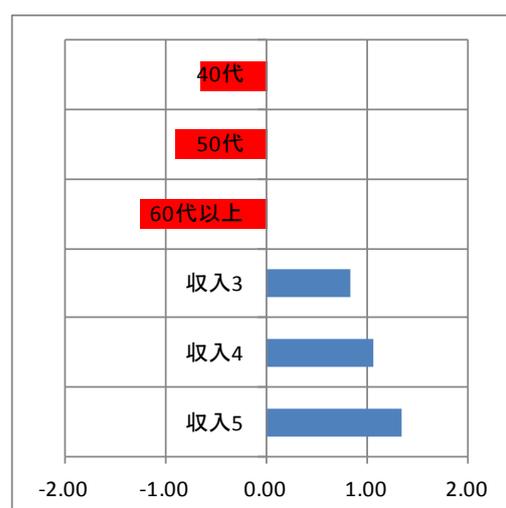


図 4-6 日帰り旅行女性のパラメータ

出典：筆者作成

表 4-11 に示す日帰り旅行モデルにより最終的に決定係数は、男性：0.11、女性：0.06 となるモデルを構築した。さらに、自由度修正済み決定係数では、男性：0.22、女性：0.05 となっており、絶対的な水準として小さいが、個人個人の旅行回数を被説明回数として設定しており、他の研究と同様の再現性と判断できたと考えることができる。

これをより詳細にみるためパラメータに着目すると(図 4-5、図 4-6)、男性は、収入、自動車保有が大きな影響を及ぼしている特性を有する。収入や自動車保有が増加するほど旅行回数に影響を与えることがわかる。それに対して、高齢化として 40~60 代以上でパラメータが負値となっている。これは、健康状況や仕事などで時間的な制約が大きいことから、

十分な時間を旅行行動に費やすことができないためと考えられる。

一方、女性は、収入が大きい影響をしていること、収入が増加するほど旅行回数に影響を与えることがわかる。それに対して、高年齢化として50代以上でパラメータが負値となっている。これは、健康状況などが大きいことから、なかなか旅行することができないためと考えられる。

表 4-12 年間宿泊旅行回数のモデル推計結果

	男性1		男性2		女性1		女性2	
	係数	t	係数	t	係数	t	係数	t
定数項	1.84	3.86	2.41	10.72	1.93	4.81	2.11	15.75
20代	0.46	0.96			-0.06	-0.14		
30代	0.76	1.51			0.15	0.36		
40代	-1.28	-2.34	-1.78	-6.24	-0.26	-0.55		
50代	-1.72	-3.14	-2.20	-7.30	-1.42	-2.96	-1.41	-5.17
60代以上	-1.54	-2.91	-2.08	-6.64	-1.38	-2.70	-1.37	-3.97
収入2	0.03	0.12			0.84	4.59	0.91	5.33
収入3	0.34	1.01			1.24	4.53	1.31	5.21
収入4	0.29	0.64			1.44	3.26	1.54	3.54
収入5	1.37	3.38	1.34	4.01	1.87	4.97	1.89	5.32
自動車保有	0.51	1.99	0.59	2.41	0.27	1.44		
決定係数	0.24		0.23		0.14		0.13	
自由度調整済み決定係数	0.22		0.22		0.12		0.12	

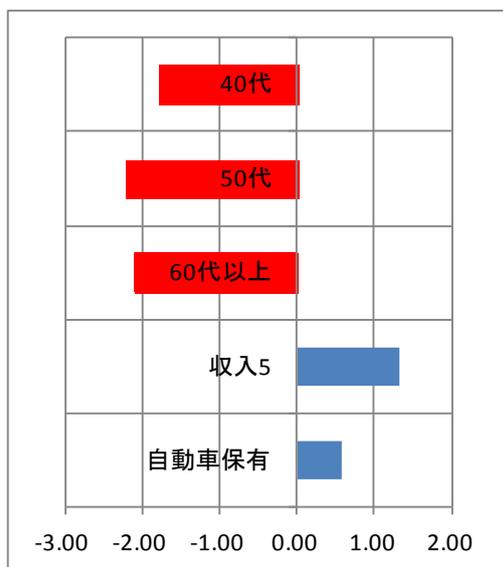


図 4-7 宿泊旅行男性のパラメータ

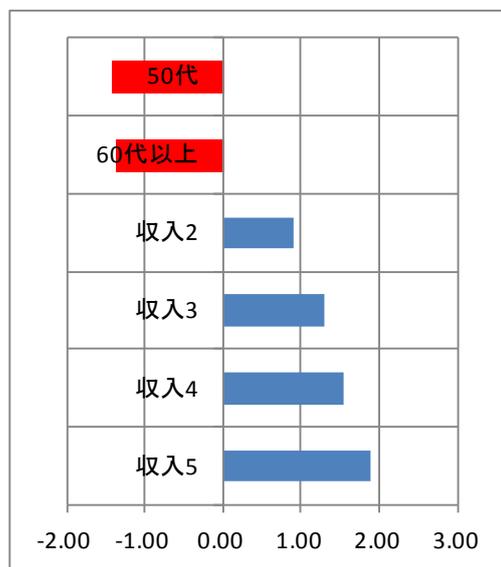


図 4-8 宿泊旅行女性のパラメータ

出典：筆者作成

次は、表 4-12 に示す宿泊旅行モデルにより最終的に決定係数は、男性：0.23，女性：0.13 となるモデルを構築した。さらに、自由度修正済み決定係数では、男性：0.22，女性：0.12 となっており、絶対的な水準として小さいが、個人個人の旅行回数を被説明回数として設定しており、他の研究と同様の再現性と判断できたと考えることができる。

さらに、パラメータに着目すると(図 4-7, 図 4-8), 男性は、収入、自動車保有が大きな影響を及ぼしている特性を有する。収入や自動車保有が増加するほど旅行回数に影響を与えることがわかる。それに対して、男女双方は高齢化として 50~60 代以上でパラメータが負値となっている。これは、健康状況や仕事などで時間的な制約が大きいことから、十分な時間を旅行行動に費やすことができないためと考えられる。一方、女性は、収入が大きい影響をしていること、収入が増加するほど旅行回数に影響を与えることがわかる。

表 4-13 年間国外旅行回数のモデル推計結果

	男性1		男性2		女性1		女性2	
	係数	t	係数	t	係数	t	係数	t
定数項	0.42	1.34	0.49	4.69	0.26	0.90	0.54	6.42
20代	-0.08	-0.30			0.14	0.56		
30代	0.00	0.01			0.03	0.12		
40代	-0.62	-2.01	-0.54	-3.33	-0.20	-0.68		
50代	-0.42	-1.36			-0.25	-0.82	-0.27	-1.60
60代以上	-0.70	-2.33	-0.55	-3.14	-0.42	-1.28	-0.38	-1.77
収入2	0.31	2.07	0.34	2.59	0.37	3.21	0.34	3.19
収入3	0.49	2.54	0.49	2.84	1.01	5.88	0.92	5.85
収入4	0.78	3.04	0.69	2.89	1.17	4.20	1.14	4.19
収入5	0.94	4.06	0.94	4.54	1.53	6.42	1.37	6.17
決定係数	0.12		0.09		0.12		0.10	
自由度調整済み決定係数	0.08		0.08		0.10		0.09	

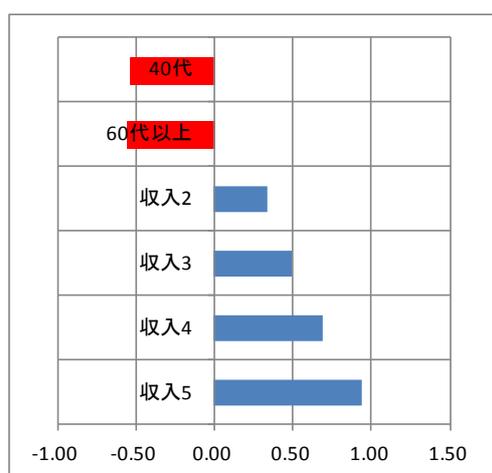


図 4-9 国外旅行男性のパラメータ

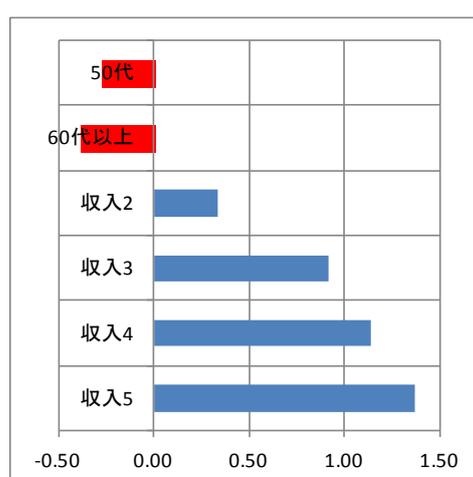


図 4-10 国外旅行女性のパラメータ

出典：筆者作成

表 4-13 に示す国外旅行モデルにより最終的に決定係数は、男性：0.09、女性：0.10 となるモデルを構築した。さらに、自由度修正済み決定係数では、男性：0.08、女性：0.09 となっており、絶対的な水準として小さいが、個人個人の旅行回数を被説明回数として設定しており、他の研究と同様の再現性と判断できたと考えることができる。

より詳細をみるためパラメータに着目すると(図 4-9, 図 4-10), 男女双方は、収入、が大きな影響を及ぼしている特性を有する。収入が増加するほど旅行回数に影響を与えることがわかる。それに対して、高年齢化として 40~60 代以上でパラメータが負値となっている。これは、健康状況や仕事などで時間的な制約が大きいことから、十分な時間を旅行行動に費やすことができないためと考えられる。

取り上げた 2 つの性別いずれともに、決定係数は低いものの、レンジから最も影響度合いの大きいものは旅行行動セグメントであり、個人属性として性年齢別、収入、自動車保有に移行する基盤になっていることがわかる。

#### 4.5.2 モデル感度分析

表 4-11~4-13 で提案されたモデルを用いて、将来における旅行発生量の国内日帰り・宿泊旅行、国外旅行の男女別変動特性を定量的に把握する。算出に用いる変数選択モデルの個人属性の説明変数が月收入および人口構成であるために、この変数を変化させた場合の感度分析を行った。

月収入の調査項目がカテゴリーであるために、各属性の 40%の人が 1 つ上位上がっていくことを考えたものである(図 4-11)。また、2040 年までの人口構成予測を変数に組み込み、2013 年現状存在する発生回数と将来として 2020 年、2030 年と 2040 年発生回数を明らかにした(図 4-12)。

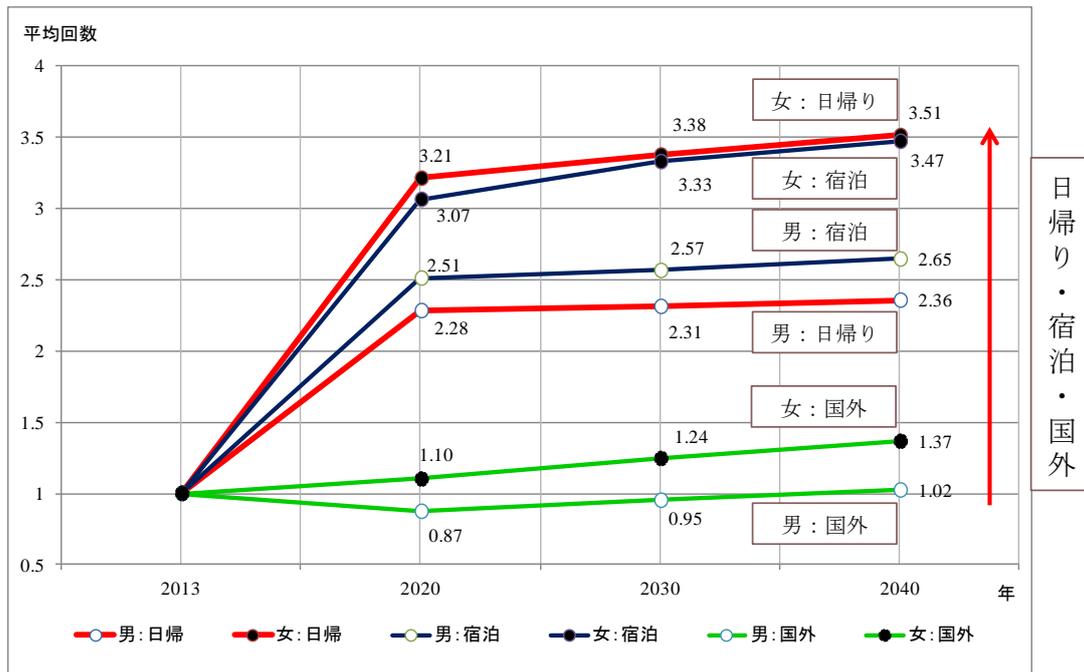


図 4-11 月収入層変化に関する感度分析結果

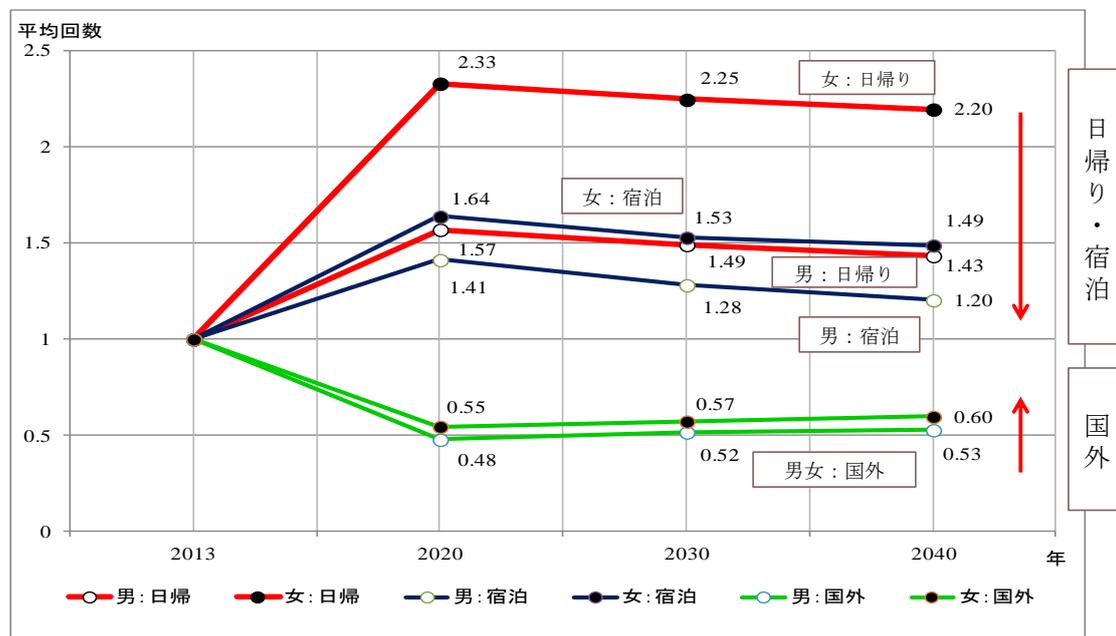


図 4-12 人口構成率変化に関する感度分析結果

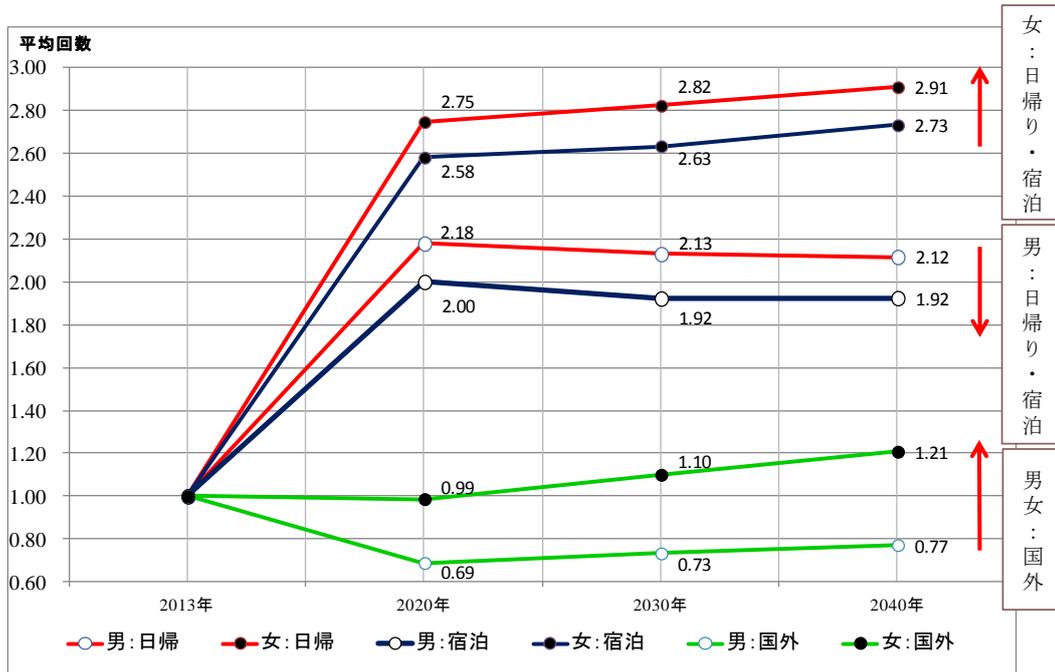


図 4-13 感度分析結果

出典：図 4-11～4-13 筆者作成

2040 年，国内日帰り・宿泊旅行および国外旅行において経済成長を背景として月収入層の変化では，男女双方の発生回数増加がみとめられる．さらに，国内日帰り・宿泊旅行において人口構成の変化をみると，男女双方の発生回数が減少している．逆に，国外旅行では，男女双方の発生回数が増加していくとみえる(図 4-13)．これは経済成長が相まって人口構成の変化として高齢者は国内旅行より国外旅行が増加していくと考えられる．

#### 4.6 第 4 章まとめ

タイにおける個人個人の観光行動把握のために，タイ政府観光庁とタイ統計局では，2009 年から全国の世帯主を対象としてアンケート調査が実施されているが，個人属性に関する国内日帰り・宿泊旅行と国外旅行との競合関係や収入の増加が旅行需要に及ぼす影響について，十分がなされていない．

本章では，タイ人観光旅行行動実態を対象として，性年齢別，収入，自動車保有などの個人属性国内宿泊旅行の回数を中心とした実際の観光行動との関連性を明らかにすることを目的とした．

まず，実態を明らかにするためにタイ国民に対して Web アンケート調査を行い，1,007 サンプルを収集した．このデータを用いて，個人属性，観光旅行について観光情報利用媒体，旅行目的，興味ある観光形態，利用交通機関，国内旅行の日帰り旅行と宿泊旅行と国外旅

行について明らかにした。さらに、国際交流的に比較視点として考え、日本人宿泊旅行の実態を通じて把握した。

その結果、性年齢階層別は利用情報媒体、興味ある観光形態など個人属性に対する観光旅行行動との関連性がわかった。また、利用交通機関について、タイ人と日本人と比較すると、タイ人では、非常自動車利用割合が高く、日本人では、自動車と電車を利用割合が高いという特徴であるとわかった。なお、国内宿泊旅行算出した旅行平均回数をみるとタイは3.2回と高く、参加率も同様に高い特徴を有する。一方、日本では、日本観光協会により平成24年度観光の実態と志向調査速報において旅行平均回数は2.60回となってタイ人より低いと把握できた。

表 4-11~4-13 の男性 2 及び女性 2 で示した、男性別モデル推定に観光旅行行動として年間国内日帰り旅行・宿泊旅行と国外旅行回数に与える影響に着目し、数量 I 類を用いて明らかにした。その結果、国内日帰りと宿泊旅行において、男性では、「収入」と「自動車保有」が宿泊旅行の形成に大きい影響を及ぼしていること特徴である。

一方、女性旅行回数に影響を与えることは、「収入」であることがわかった。特に、男性及び女性は高年齢化として 40~60 代以上でパラメータが負値となっている。これは、健康状況や仕事などで時間的な制約が大きいことから、十分な時間を旅行行動に費やすことができないためと考えられる。国外旅行では、男女双方は、収入、が大きな影響を及ぼしている特性を有する。収入が増加するほど旅行回数に影響を与えることがわかる。それに対して、高年齢化として 40~60 代以上でパラメータが負値となっている。

以上より、旅行回数の規定要因として経済的要因である収入、自動車保有が該当することが確認でき、タイ国民観光実態における旅行行動と個人属性との関連性が明らかとなった。なお、今後に予想される一層の社会的人口変化、経済発展を考え、数量化 I 類で提案されたモデルを用いて、将来における国内日帰り・宿泊旅行と国外旅行の旅行発生量の変動特性を定量的に把握行つた。今後発地と着地にて影響に与える国内旅及び国際交流的な国外旅行の行動変化に対応する観光政策をどのような取り組むことを提案するか、予想できると考える。

今後課題として、観光旅行行動の詳細な実態把握、観光旅行回数に与える影響を把握するため、旅行消費、観光形態などに加えた分析が考えられる。さらに、タイ人観光旅行行動を念頭に置き、時間評価と旅行目的地先選択を検討するために、離散型・連続選択モデルを用いて国内旅行と国外旅行による旅行行動との旅行者の志向をその意思決定過程を考慮したより特徴な分析が考えられる。

---

## 第 4 章 参考文献

- <sup>1</sup> 日本政府観光局プレスリリース資料, [http://www.jnto.go.jp/jpn/reference/tourism\\_data/visitor\\_trends/data\\_info\\_listing.html](http://www.jnto.go.jp/jpn/reference/tourism_data/visitor_trends/data_info_listing.html), Viewed on 2014.5.5
- <sup>2</sup> タイ王国国家経済社会開発庁 (NESDB) "Quarterly Gross Domestic Product:Q2/2011",(<http://www.nesdb.go.th>), Viewed on 2014.5.5
- <sup>3</sup> IMF "International Financial Statistics : database and browser", Viewed on 2014.5.5
- <sup>4</sup> 内閣府“国民経済計算 (GDP 統計) <http://www.esri.Cao.go.jp/jp/sna/menu.html>”, Viewed on 2014.5.5
- <sup>5</sup> Legislative institutional Repository of Thailand, <http://dl.parliament.go.th/handle/lirt/119616>, Viewed on 2014.5.5
- <sup>6</sup> World Bank “World Bank Data:Mator vehicles (per 1,000 people)”, Viewed on 2014.5.5
- <sup>7</sup> National Statistical Office of Thailand, <http://service.nso.go.th/nso/web/survey/surpop2-3-5.html>, Viewed on 2014.1.11
- <sup>8</sup> Tourism Authority of Thailand Information Technology Department Marketing Database Group, [http://marketingdatabase.tat.or.th/main.php?filename=index\\_en](http://marketingdatabase.tat.or.th/main.php?filename=index_en), Viewed on 2014.2.10
- <sup>9</sup> Phlainoi Nawarat :รายงานการวิจัยพฤติกรรมนักท่องเที่ยวภายในประเทศของนักท่องเที่ยวชาวไทย ,*e-TAT Tourism Journal*, Vol.4,pp.23-33,1995
- <sup>10</sup> Factors Affecting the Decision Making of Thai Tourists to Favor Travelling within the Country, Chiang Mai University,[http://library.cmu.ac.th/digital\\_collection/etheses/](http://library.cmu.ac.th/digital_collection/etheses/),Viewed on 2014.2.5
- <sup>11</sup> Information Technology Department Marketing Database Group, Tourism Authority of Thailand :โครงการศึกษาวิจัยพฤติกรรมนักท่องเที่ยวกลุ่มผู้มีรายได้สูงสำหรับนักท่องเที่ยวคนไทย, *e-TAT Tourism Journal*,Vol.2,2005
- <sup>12</sup> 前掲 7
- <sup>13</sup> 古屋秀樹, 兵藤哲朗, 森地茂 : 発生回数の分布に着目した観光交通行動に関する基礎的研究, 第 28 回都市計画学会術研究論文集, pp.319-326, 1993.11
- <sup>14</sup> 森地茂, 轟朝幸 : 海外観光旅行需要の国内地域格差構造と将来行動, 運輸政策研究, Vol.4, No.1, pp.8-18, 2001
- <sup>15</sup> 栗原剛, 岡本直久 : インバウンド需要に影響を与える政策および外的要因の考察, 土木計画学研究・論文集, Vol.27, pp.147-155, 2010
- <sup>16</sup> 日比野直彦, 森地 茂 : 世代の特徴に着目した国内観光行動の時系列分析, 土木計画学研究・論文集, Vol.23, No.2, pp.399-406, 2006.11.
- <sup>17</sup> Fodness, D : Measuring tourist motivation, *Annals of Tourism Research*, 21(3), pp.555-581,1994
- <sup>18</sup> 野瀬元子, 古屋秀樹 : 日光・箱根における外国人観光者と日本人観光者の評価特性分析, 都市計画学会論文, 43-3, pp. 595-600, 2008.
- <sup>19</sup> KLAYSIKAEW Krairerk, 古屋秀樹 : タイ・アユタヤ来訪者の行動評価特性分析, 日本観光研究学会第 26 回全国大会研究発表論文集, pp.301-304, 2011.
- <sup>20</sup> National Statistical Office of Thailand : Preliminary Report The 2010 Population and Housing census(Whole Kingdaom)<http://popcensus.nso.go.th/upload/popcensus-08-08-55-E.pdf>, Viewed on 2014.5.15

## 第 5 章 アユタヤにおける観光地の評価分析

### 5.1 はじめに

タイが観光立国を目指して国家レベルの観光開発プランを策定したのは1970年代後半以降である<sup>1</sup>。タイにおける観光開発は急激に拡大し、1982年には米の輸出高を抜いて観光産業は外貨獲得源の第1位になり、農業中心の産業構成から工業、サービス中心の産業構成へと移行するにつれて、観光の重要性が増大した。強大な国際需要と相まって急速な観光成長が高い経済的利益を生み出し、国民経済の増大、雇用創出、投資拡大などの効果を及ぼし、唯一恒常的な拡大を続けてきた主要外貨獲得源として注目されている<sup>2</sup>。

一方、タイの国際観光振興を考えると、タイ来訪者の情報が少ないこと、満足度の実態が把握されていないこと、各地域の開発データの公表が限定的なことから、分析が困難で、これまで研究事例が少ないといえる。

本章では、タイ有数の観光地であるアユタヤは、1991年に世界文化遺産に登録されて、世界中から多くの観光客が訪れ、独自の観光資源は伝統文化や古都の遺跡として諸国の観光客に注目されている。観光地としてのさらなる発展と観光振興のために、タイにおける代表的な国際観光地であるアユタヤを対象として、アンケート調査を実施し、クロス集計、偏相関係数分析、層別回帰分析などを用いてアユタヤ来訪者の行動や評価の実態を把握するとともに、再訪意向に影響を与える国籍等の個人属性をはじめとする要因の同定を目的とする。

### 5.2 既存研究と本研究の位置づけ

観光行動は、居住地をはじめとする個人属性によって異なることが考えられるが、例えば、Mullerは、国際観光において、文化による価値観の相違が旅行者の休暇目的地の選択や海外旅行に関する消費行動に影響を与えるため、国際観光者のセグメントを描き出すために文化交差的研究は有効であると述べている<sup>3, 4</sup>。

この文化交差的研究では、例えばTurner and Reisingerは、外国人旅行者とオーストラリア人観光サービス提供者の相互作用に着目しながら、観光満足度の構造分析を行っている<sup>5</sup>。また、Armstrong et al.<sup>6</sup>は、それまでアメリカ国内のホテルで用いられていたサービス評価指標を香港の3つのホテルに適用し、多文化の宿泊客を対象として、宿泊前の「期待」の評価や満足への影響を調べている。この研究の中で、Hofstede<sup>7</sup>の文化グループ分けによって重回帰分析を行い、決定係数で説明力を比較している。そして、Beerli and Martinは、旅行者の個人属性に着目されて旅行先イメージの影響要因に関する研究が行われている<sup>8</sup>。野瀬・古屋は、日光・箱根における外国人来訪者と日本人来訪者を対象として、来訪者の個人属性、

居住地、行動や評価特性を明らかにした<sup>9</sup>。以上のように、国籍などで来訪者をセグメントした分析から、より詳細な特性が把握できるものと考えられる。

一方、Dannは、観光研究における国籍、居住地をセグメントの変数とする限界を指摘し、それ以外の要因の影響が同じではない対象群を比較して導かれる知見に対する有効性に疑問を呈している<sup>10</sup>、また、Bystrzanowskiの研究のように、国籍や居住地よりも重要だったのは、旅行頻度、滞在期間、再訪意向であるとの事例もある<sup>11</sup>。

さて、観光者の評価や満足度についての研究では、心理学的研究の観光動機に着目した研究も多い。Maslowの欲求階層理論<sup>12</sup>、旅行キャリア<sup>13</sup>、発動要因と誘引要因<sup>14</sup>などに着目した研究がなされている。これらの先行研究では、個人属性や国民性及び文化的な特徴が観光動機や旅行先での行動に影響を与えていることが指摘されている<sup>15,16</sup>。

また、旅行者の評価や満足度についての研究をみると、Pizam et al.による旅行目的地での評価特性、満足度への影響要素を明らかにした研究<sup>17</sup>、目的地に対する評価から当該旅行の全体的な満足度を予測した研究<sup>18,19,20,21</sup>、古屋による目的地への旅行者の事前期待とのギャップから旅行満足度を測定した研究がある<sup>22</sup>。Woodside and Jacobs は、ハワイ訪問中のカナダ、アメリカ、日本の旅行者を対象に、旅行経験を多面的に調査し、3国の訪問者の評価に有意差が認められ、積極的評価の内容の差異による特徴を導いている<sup>23</sup>。

一方で、旅行の訪問地、行動内容などの特定の経験に関する事例分析から、一般的知見や体系的知識を導き、旅行満足度の一般構造を探る方向の必要性を佐々木は指摘している<sup>24</sup>。また、観光者の満足度に着目した研究として、Chigako et al.は、ニセコにおける観光政策策定のため、外国人来訪者の評価と旅行目的地選択要因をもとに、CSポートフォリオ分析を用いて明らかにしている<sup>25</sup>。

しかしながら、再訪意向と来訪者特性との関連性に着目し、定量的な再訪意向評価の構造を明確にした研究事例は少ない。そこで、本研究では、観光地における来訪者の行動や評価特性を明らかとすることを目的とする。具体的には、観光地への再訪意向を居住地と個別の評価項目の満足度との関連性に着目しながら、分析を行うものとする。

さらに、来訪者数の増加に対して、リピーターの確保が重要と考え、それに基づき「再訪意向」を評価指標として設定した。しかしながら、「満足度」を取り上げた場合、「満足したがもう二度と来なくてもよい」、「不満足であるが、もう一度来て取り戻したい」、という再訪との負の相関となる事象も想定できる。そのため、リピーターの確保との観点から、また、被験者の負担軽減する目的から、本研究では、再訪意向のみを聞き取ることにした。

図 5-1は分析フレームであるが、まず来訪前の期待に相当する「想起する観光資源」が設定され、当地での来訪行動を通じて、個別項目の評価が行われる。本分析では、文献<sup>8,9,21,26</sup>を参考にA~Dの4大項目を仮定する。

- A. 観光魅力要因：世界文化遺産(顕著な普遍的価値を有する建造物群、遺跡を構成する個々の寺院、文化的景観等を指し、未来へと伝えていかなければならない人類共通の

遺産)の構成要素に対する評価, 景観・雰囲気(観光地の空間), 観光活動(世界遺産の古都アユタヤ遺跡を象に乗って散歩, レンタサイクル, エンジン付けのボートでアユタヤを囲む川を一周, トウクトウクにのる体験, 夜のライトアップの祭り等)

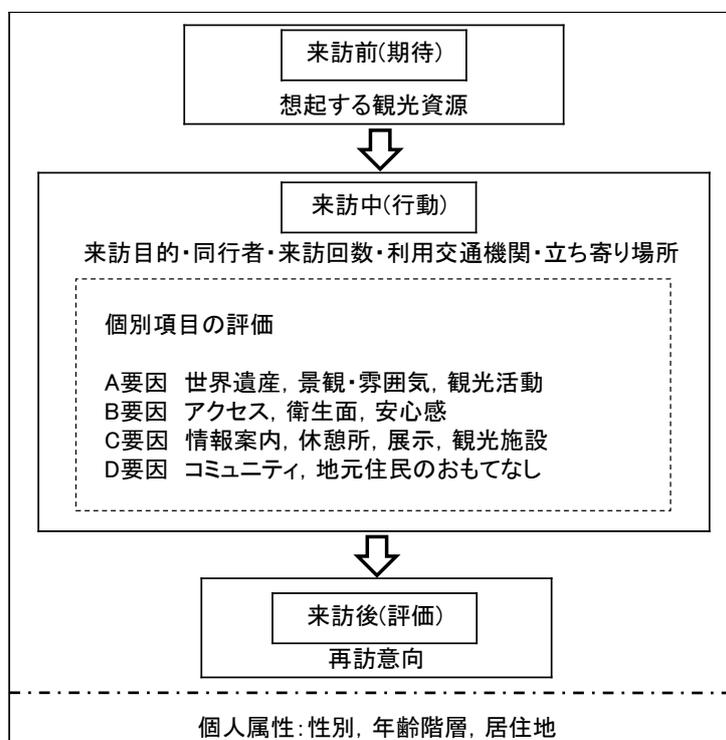


図 5-1 分析フレーム

- B. 観光環境要因：アクセス(出発地からアユタヤまで交通手段), 衛生面(レストラン, トイレ, ゴミ等), 安全・安心感(観光地の安全的)
- C. 観光サポート要因：情報案内(情報案内板やパンフレットの充実), 観光スポットの休憩所, 展示(各博物館内展示の充実), 観光施設(宿泊施設, レストラン数, サービスとコスト等)
- D. 人的要因：コミュニティ, 地元住人のおもてなし

最終的には, 来訪後に個別項目を総合化して「再訪意向」が形成され, それに対して個人属性が大きく影響を及ぼすと考える. ここで, 再訪意向と同様の傾向を示す変数として「他者への推薦意向」も考えられたが, 両者は高い相関を有すると考え, 被験者の負担を軽減する目的から, 本研究では再訪意向のみを聞き取ることとした.

### 5.3 タイならびにアユタヤの概要

タイ王国では国の経済発展を目指す経済社会開発5ヵ年計画が1961年に開始されたが、国内経済発展の最適化分散や観光開発の優先を掲げた4次と第5次の経済社会開発計画(1977-1986年)によって観光産業は強化されていくこととなる。現在までの第10次国家経済社会開発計画(2007-2011年)は、観光立国に向けた政策が含まれている<sup>1</sup>。

さて、訪タイ外国人旅行者数は695万人(1995年)から1,380万人(2006年)へと過去10年間で倍増しており、それにもなう旅行収入も上昇している(図 5-2)。タイの観光産業は、2006年の同国GDPの6.1%を占める主要産業の1つとされており<sup>27</sup>、ホテル、エアライン、旅行代理店、観光物産や各種のサービスなど観光産業の裾野は広く、直接、間接の雇用規模も大きいと考えられる。

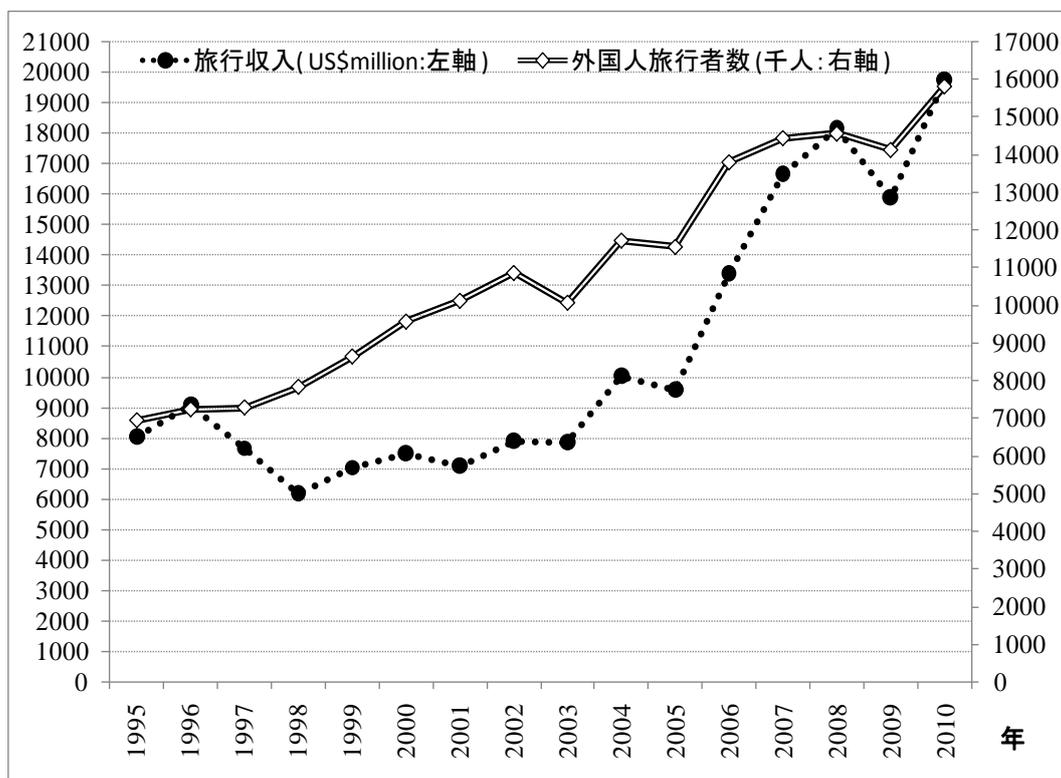


図 5-2 タイ来訪者外国人旅行者数，旅行収入の推移<sup>28</sup>

2010年度世界各国・地域の外国人旅行者数でタイは16位に入る<sup>29</sup>。国際的に有名な観光都市としてバンコク、チャンマイ、パタヤ、プーケットがあり、特に、タイ独自の伝統文化や古都の遺跡を諸国の旅行者が注目する。タイの古都は、多数あるが、代表的なものにアユタヤがある。1991年に世界文化遺産にも登録されたアユタヤ<sup>30</sup>は、現在、訪タイ外国人旅行者にとって主要観光目的地の1つである。

### 5.3.1 調査対象地域概要

アユタヤはタイ王国の中部、バンコクから北に約 76km 離れたチャオプラヤ川、パーサクク川とロップリー川に囲まれた中州内及び周辺地域である。

当地では、1351年にウートン王によって建都されてから、1767年にビルマ軍の攻撃で破壊されるまでの417年間、アユタヤ王朝の都としてタイの中心であり続けた都市である。チャオプラヤ川とその支流に囲まれた地形は水運に恵まれ、17世紀初めにはヨーロッパと東アジアを結ぶ国際貿易都市として繁栄し、欧州人には「東のベネチア」と呼ばれた<sup>31</sup>。苔むした仏塔のチェディ、大草原に悠然と横たわる涅槃像、素晴らしい建築美を誇る歴代王の離宮、かつて栄華を極めた古都の壮大な歴史が眠る遺跡を有し、現代にその当時の姿をつたえる荘厳な遺跡群は歴史公園として整備された。

### 5.3.2 アユタヤの現在の観光状況

アユタヤは UNESCO によって 1991 年に世界文化遺産に登録されて以来、タイ国内のみならず世界中から多くの観光客が訪れ、独自の歴史や景観を堪能している。

しかし、アユタヤ来訪者数と国籍別来訪者構成比率推移<sup>32</sup>をみると、外国人来訪者より国内タイ人来訪者の割合が上回っている(表 5-1)。

2002-2008 年にアユタヤを訪れる外国人来訪者で、圧倒的に多いのは日本人であり、外国人来訪者の半数を占めることがわかる。しかしながら、2009-2010 年における国内反政府勢力による大規模デモや、2011 年後半にもタイ中心地区(アユタヤ全面積を含む)に大洪水があつて、日本人来訪者が急減したと考えられる。日本人の減少に対して中国人が増加しているが、アジア以外でみると構成割合が高いのは欧米からの来訪者であり、2009 年以降国・地域別来訪者構成比率が大きく変わってきたことがわかった。

これらの国籍を有する来訪者の評価の特徴や再訪意向への影響要因を明らかにできれば、効果的な施策実施による再訪意向の向上が実現でき、多くのリピーター獲得が期待できる。

表 5-1 国籍別アユタヤ来訪者構成比率・来訪者数の推移 (2002-2011年)

国籍	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年
タイ	47.8%	51.6%	55.7%	58.4%	60.1%	58.5%	55.7%	78.7%	81.4%	85.6%
日本	14.6%	17.4%	19.8%	19.4%	19.9%	15.2%	18.4%	6.8%	1.7%	2.0%
中国	1.6%	2.0%	0.5%	1.7%	0.9%	3.6%	3.0%	3.2%	1.7%	3.2%
台湾	2.5%	3.6%	1.8%	3.4%	1.2%	1.8%	0.4%	1.1%	0.2%	0.5%
フランス	6.0%	3.3%	1.7%	1.2%	2.1%	3.2%	4.6%	1.4%	2.8%	1.6%
オランダ	2.2%	2.5%	3.3%	5.3%	2.9%	2.6%	2.6%	1.0%	0.8%	0.2%
イギリス	5.0%	3.1%	2.8%	1.4%	1.6%	2.6%	2.5%	1.3%	1.0%	0.8%
ドイツ	4.4%	4.7%	3.6%	1.1%	2.4%	2.8%	1.7%	1.3%	1.4%	0.8%
アメリカ	4.1%	1.8%	2.5%	1.6%	1.7%	1.9%	1.3%	0.7%	1.0%	0.6%
イタリア	2.7%	1.3%	0.9%	0.5%	1.0%	1.4%	1.2%	0.7%	0.5%	0.3%
ベルギー	0.5%	0.9%	1.2%	0.2%	0.5%	0.5%	1.0%	0.5%	0.5%	0.2%
デンマーク	0.6%	0.9%	0.3%	0.2%	0.5%	0.7%	0.9%	0.3%	0.9%	0.2%
スイス	1.0%	0.5%	1.2%	0.7%	0.6%	0.9%	0.9%	0.4%	0.5%	0.1%
スウェーデン	0.2%	0.6%	0.4%	0.2%	0.3%	0.4%	0.6%	0.2%	0.4%	0.1%
オーストラリア	0.7%	0.9%	0.2%	0.3%	0.5%	0.6%	0.6%	0.3%	0.4%	0.2%
その他	6.0%	5.0%	3.9%	4.3%	3.7%	3.3%	4.5%	2.2%	4.9%	3.7%
合計(人)	396,693	249,809	381,287	408,926	518,992	833,677	632,101	268,784	577,244	484,621

#### 5.4 アンケート調査の概要と分析結果

既出の調査目的を達成するため2011年3月1日～20日までアンケート調査(対面聞きとり方式)を実施した。調査は、アユタヤの中州内(世界遺跡の周辺とシーサンペット寺)で実施した。

なお、本研究では、タイ居住者にも対応するため日本語・英語・タイ語の3ヶ国語の調査票を使用した。なお、構成比率が増加している中国人を対象とした実際も考えられたが、団体客を中心としているためアンケート調査への協力が困難と考え、今回は実施しなかった。また、調査項目は、次の4つから構成される。

- I. 個人属性(性別, 年齢階層, 居住地)
- II. 観光資源の認知度(アユタヤで思い浮かべたもの)
- III. アユタヤでの観光実態(来訪目的地, 同行者, 来訪回数, 交通機関, 立ち寄り場所)
- IV. 再訪意向等の評価(個別項目の満足度評価: 5段階評価, 再訪意向: 5段階評価)

サンプル数は3ヶ国語の調査票によりタイ人103, 日本人 107, その他外国人299, 合計 409であった(図5-3, 表 5-2)。

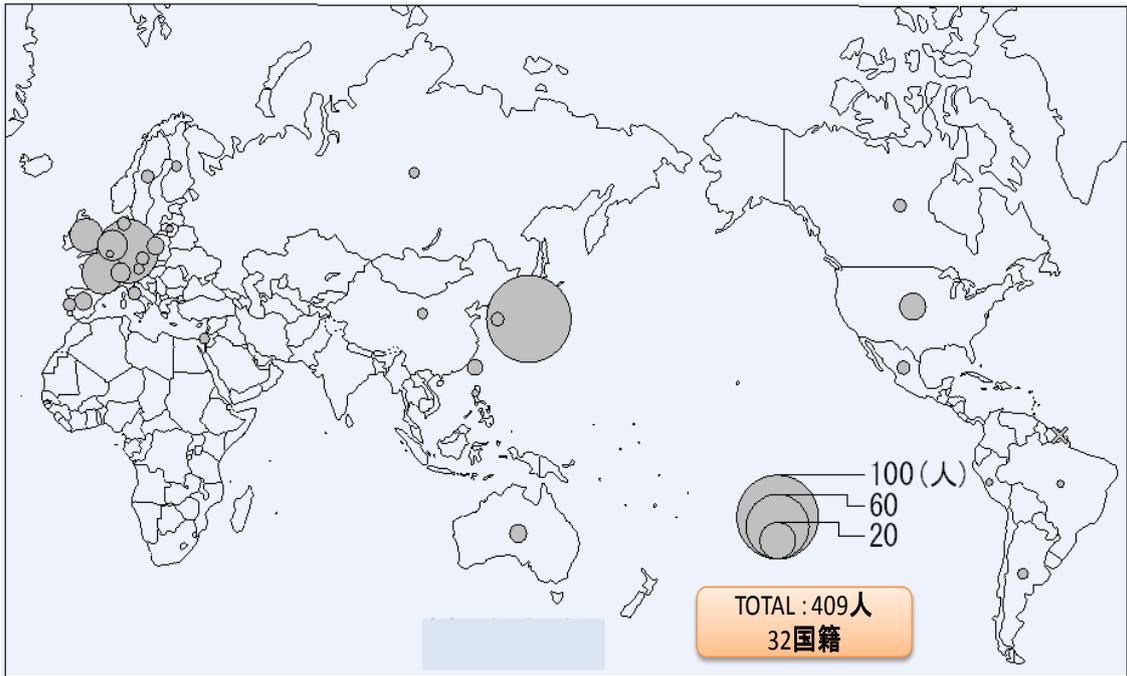


図 5-3 居住地別個別項目  
出典：筆者作成

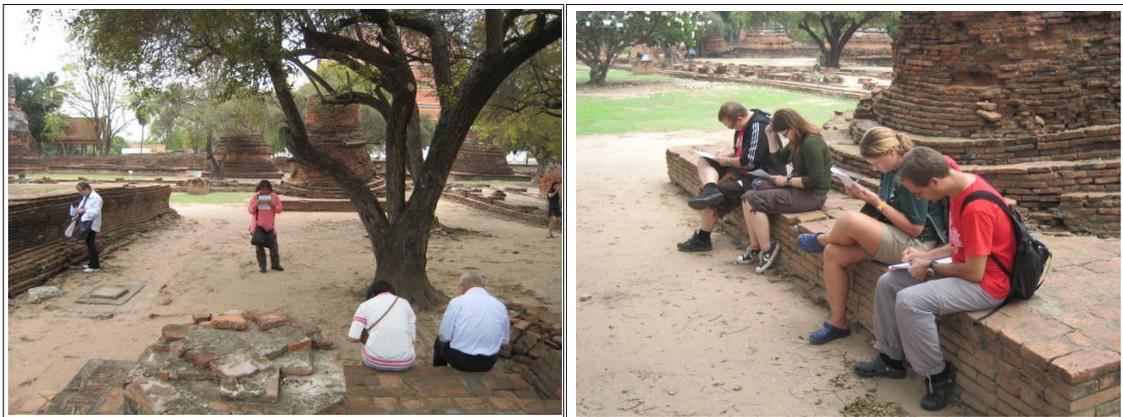


写真 5-1 アユタヤでの現地アンケート調査  
出展：現地調査による筆者撮影

表5-2 居住地別来訪者数・構成比率

		サンプル数	構成
欧州	ドイツ	58	14.2%
	フランス	26	6.4%
	イギリス	17	4.1%
	オランダ	14	3.4%
	その他	41	10.0%
	小計	156	38.1%
日本		107	26.2%
タイ		103	25.2%
米州	アメリカ	11	2.7%
	その他	10	2.4%
	小計	21	5.1%
アジア・オセアニア		17	4.2%
アフリカ		3	0.7%
不明		2	0.5%
合計		409	100%

出典：筆者作成

居住地は32カ国・地域に分布しており、日本、タイ、ドイツ、フランス、イギリス、オランダ、アメリカの順であった。しかし、国・地域別サンプル数が十分でないため、以下では、UNWTOの区分を参考に欧州(38.1%)、日本(26.2%)、タイ(25.2%)、米州(5.1%)、アジア・オセアニア(4.2%)、アフリカ(0.7%)の区分で集計分析を行う。なお、国籍での分析も考えられるが居住地における社会経済環境によって集団をセグメントすることを意図して、以下では居住地を用いるものとする。回収された409サンプルの概要把握のため、単純集計、クロス集計を行った。

#### 5.4.1 個人属性

表 5-3は、居住地別性・年齢階層別構成比率を示したものである。不明サンプルの構成比率を明示していないため、合計が100%とならないものがある。

性別は、男性49%、女性50%、不明1%となっており、年齢階層は20代の構成比率が高い。居住地別に見た場合でも20代の構成比率が高いが、特に日本は20代ならびに男性の構成比率が高く、調査時期が3月だったために学生が多くを占めたためと考えられる。

表 5-3 居住地別性・年齢階層別構成比率

居住地	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	男性	女性
欧州	3%	59%	22%	12%	3%	1%	48%	52%
日本	7%	72%	7%	3%	4%	7%	63%	37%
タイ	10%	38%	27%	12%	12%	1%	38%	62%
米州	0%	48%	19%	24%	0%	9%	43%	57%
アジア・オセアニア	0%	53%	18%	23%	0%	6%	50%	50%
アフリカ	0%	100%	0%	0%	0%	0%	33%	67%
全体	5%	57%	19%	11%	5%	3%	49%	50%

出典：筆者作成

#### 5.4.2 来訪前の観光資源の認知度について

来訪前の認知は、アユタヤにおける行動、満足度や再訪意向の醸成に大きく影響すると考えられるが、それらは居住地によって異なるのであろうか。アユタヤの観光資源等を考慮しながら、魅力を構成すると考えられる 表 5-4 に示す 12 項目をブレインストーミングによって設定し、「アユタヤで思い浮かべたもの」について質問した(複数回答可)。

表 5-4 は指摘割合(指摘者数/当該居住地サンプル数)を示しているが、「寺院・遺跡」、「世界文化遺産」、「古都」を想起する割合が高い。また、タイ居住者では「王宮」、「古都」、「大仏」が全体での指摘割合より 10 ポイント高くなっている一方、日本は「世界文化遺産」が高いのに対して「古都」、「大仏」の指摘が低い、居住地によって想起する資源が異なることがわかる。

表 5-4 「アユタヤで思い浮かべたもの」の指摘割合

居住地	世界文化遺産	寺院・遺跡	王宮	古都	大仏	象に乗る体験	木の根にずれた仏像	料理・買い物	日本人村など外国人	トゥクトゥ	水上マーケット	川の自然
欧州	61%	78%	13%	47%	28%	15%	23%	0%	2%	5%	3%	6%
日本	79%	67%	12%	29%	14%	21%	25%	2%	7%	4%	1%	2%
タイ	57%	81%	29%	60%	43%	19%	15%	15%	3%	5%	20%	18%
米州	76%	81%	29%	57%	33%	5%	38%	0%	10%	0%	0%	5%
アジア・オセアニア	53%	59%	6%	53%	29%	6%	6%	6%	6%	0%	12%	6%
アフリカ	67%	33%	0%	100%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
全体	65%	75%	17%	47%	28%	16%	21%	12%	4%	4%	7%	8%

表 5-5 居住地別来訪目的構成比率

居住地	観光旅行	新婚旅行	家族旅行	友人訪問	業務出張	修学旅行	参拝	その他	合計
欧州	87%	1%	4%	5%	3%	0%	0%	2%	100%
日本	89%	0%	5%	4%	0%	1%	1%	1%	100%
タイ	46%	0%	1%	1%	0%	6%	41%	6%	100%
米州	76%	0%	10%	5%	5%	0%	0%	5%	100%
アジア・オセアニア	100%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	100%
アフリカ	100%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	100%
全体	77%	0%	3%	3%	1%	2%	11%	3%	100%

表 5-4～5-5 : 出典 : 筆者作成

#### 5.4.3 アユタヤでの観光実態（来訪中の行動特性分析）

アユタヤへの主要来訪目的（択一式、表 5-5）では、観光旅行77%、参拝11%、家族旅行3%、友人・親戚訪問3%、修学旅行2%、業務出張1%、新婚旅行0%、その他3%であったが、タイ居住者では参拝が多く、欧州、日本、米州で修学旅行が見られるなどの特徴を示した。

タイ居住者が大きく異なるが、アユタヤ来訪者の実態、再訪意向への影響要因を国・地域別に分析することを意図したため、タイ居住者も他国・地域居住者と同様に分析対象とするものとする。なお、旅行同伴者は友人50%、家族22%、一人11%であり、タイ居住者以外は大きな差異がみられなかった。来訪回数(択一式、表 5-6) をみると、初回来訪73%の割合が高い。

表 5-6 来訪回数の構成比率

居住地	初回	1回	2回	3回	4回以上	合計
欧州	95%	4%	1%	0%	0%	100%
日本	88%	12%	0%	0%	0%	100%
タイ	17%	17%	16%	20%	30%	100%
米州	90%	10%	0%	0%	0%	100%
アジア・オセアニア	88%	0%	12%	0%	0%	100%
アフリカ	100%	0%	0%	0%	0%	100%
全体	73%	9%	5%	5%	8%	100%

表 5-7 居住地別主要利用交通手段の構成比率

居住地	自動車	路線バス	ツアーバス	鉄道	レンタカー	遊船	タクシー	その他	合計
欧州	5%	21%	17%	46%	2%	1%	6%	1%	100%
日本	16%	4%	38%	11%	1%	1%	28%	2%	100%
タイ	61%	3%	10%	8%	4%	2%	0%	13%	100%
米州	0%	24%	24%	38%	5%	0%	5%	5%	100%
アジア・オセアニア	0%	12%	53%	12%	12%	0%	12%	0%	100%
アフリカ	0%	0%	0%	100%	0%	0%	0%	0%	100%
全体	22%	11%	23%	26%	3%	1%	11%	3%	100%

出典：筆者作成

次に、居住地別タイ国内主要利用交通手段(択一式、表 5-7)をみると、サンプル全体では鉄道：26%、ツアーバス：23%、自動車：22%の割合が高い。さらに、タイ居住者では「自

動車」が、日本で「ツアーバス」や「タクシー」が、欧州、米州で「鉄道」や「路線バス」といった公共交通機関の利用が多い。これらより、アユタヤへのアクセスが居住地により異なることがわかった。

表 5-8 居住地別観光資源別訪問率

観光資源の形態	観光資源	欧州	日本	タイ	米州	アジア・オセアニア	アフリカ
世界文化遺産の対象施設	王宮跡	77%	98%	69%	86%	100%	100%
	シーサンペット寺	100%	100%	89%	100%	100%	100%
	モンコンボピット	66%	95%	69%	76%	76%	67%
	ラマ寺	68%	21%	32%	62%	59%	33%
	マハータート寺	69%	68%	48%	62%	71%	100%
	ラーチャブーラナ寺	38%	29%	43%	62%	29%	100%
	スワンナダーラーラーム寺	6%	5%	22%	0%	6%	33%
	タンミカラート寺	8%	2%	26%	24%	24%	0%
	ローカヤスター寺	15%	29%	15%	29%	29%	0%
	チャイワットナーラーム寺	19%	14%	40%	38%	29%	33%
	ナープラメーン寺	19%	7%	37%	10%	24%	0%
	パナンチューン寺	14%	11%	76%	10%	12%	0%
	ヤイ・チャイモンコン寺	16%	35%	58%	38%	18%	0%
	ブーカオトーン寺	13%	4%	20%	0%	12%	0%
	ブッタイサワン寺	3%	1%	32%	0%	12%	0%
マヘーヨン寺	7%	0%	22%	19%	18%	0%	
クディーダーオ寺	5%	2%	15%	19%	12%	0%	
博物館などの対象施設	アユタヤ歴史研究センター	1%	3%	14%	5%	0%	0%
	チャオサームプラヤー博物館	2%	3%	19%	10%	6%	0%
	チャンタラカセーム博物館	2%	0%	12%	19%	0%	0%
	日本人町跡	1%	13%	16%	0%	0%	0%
	ポルトガル人町跡	1%	0%	11%	0%	6%	0%
	バン・パイン宮殿	2%	9%	37%	14%	18%	0%
地元住人生活活動の対象施設	バンサイ民芸文化村	0%	0%	27%	0%	0%	0%
	チャオポーム・マーケット	10%	4%	18%	5%	6%	0%
	水上マーケット	10%	2%	32%	0%	12%	0%

出典：筆者作成

さらに、アユタヤの26ヶ所主要観光資源<sup>33</sup>を取り上げ、各観光資源の訪問の有無について聞き取りを行った。表 5-8 は、居住地別の訪問率(訪問者数/当該居住地サンプル数)を示したものである。これらより、いずれの居住地でも、訪問割合が高い観光資源は「世界文化遺産を中心とした寺院群」である。その中でもシーサンペント寺、王宮跡、モンコンボピント、マハータート寺、ラーマ寺とラーチャプラナ寺の順となっていることがわかった。一方、アユタヤの文化歴史としてタイの古都を伝える場所と国家的貴重品を保護してある博物館などは非常に訪問割合が低い。なお、タイ居住者は訪問した観光資源が多かった。

以上から、アユタヤの特徴的な観光資源は、遺跡や寺院であることが確認された。アユタヤへの来訪前の認知度と来訪中の行動とは関連性があり、来訪者にとっては歴史的な世界文化遺産などの遺跡に強く期待があると考えられる。

その中でも日本居住者は世界文化遺産に対する認知が高く、20代を中心とする来訪者がツアーバスを主に利用して来訪している。それに対して、欧州居住者は30代以上の年齢層も多く、電車をはじめとする公共交通機関も利用しながら寺院・遺跡などをアユタヤに対して想起しながら行動していること、タイ居住者は寺院・遺跡に加え、古都、王宮といったかつての都を訪問する来訪動機が存在が推察され、自動車を主に利用しながら来訪していることがわかった。

一方、世界文化遺産の対象施設以外である博物館等の対象施設、地元住人の生活活動の対象施設等の観光資源では、依然、認知度が低いため、訪問率が低いと考えられる。さらに、タイ居住者でも、博物館などの古い時代から現代までつなげる歴史を詳しく説明する施設では、非常に低い訪問率であることがわかった。

#### 5.4.4 来訪前の観光資源の認知度について

本研究では、現地での来訪行動を通じて、個別項目(A:観光魅力要因, B:観光環境要因, C:観光サポート要因, D:人的要因)の評価が行われ、これらを総合化して「再訪意向」が形成されると仮定した。

アンケートでは5段階で、アユタヤに対する個別項目(12項目、満足:5点~どちらともいえない:3点~不満足:1点)、ならびに再訪意向(とても再訪したい:5点~どちらともいえない:3点~全く再訪したくない:1点)を聞き取りしている。

集計の結課、アユタヤへの再訪意向については、「とても再訪したい」24%、「再訪したい」47%、「どちらとも言えない」23%、「再訪したくない」3%、「全く再訪したくない」1%となった。特に居住地別にみると、タイ居住者は「とても再訪したい」と答える割合が「再訪したい」よりも高くなっているが、日本、欧州と米州は「再訪したい」の割合が最も高くなっている。

次に、個別項目の平均値を算出した。図 5-4、表 5-9より、世界文化遺産、景観・雰囲気といった「A:観光魅力」の評価が高いとともに、「B:観光環境(アクセス, 安心感)」、「D:人的要因(コミュニティ, 地元住人のもてなし)」なども比較的良好である。逆に衛生面、

情報案内の充実と休憩所の評価が低い。回答分布をみると、「やや満足」よりも「満足」との回答割合が高い要因として「世界文化遺産」と「景観・雰囲気」があった。

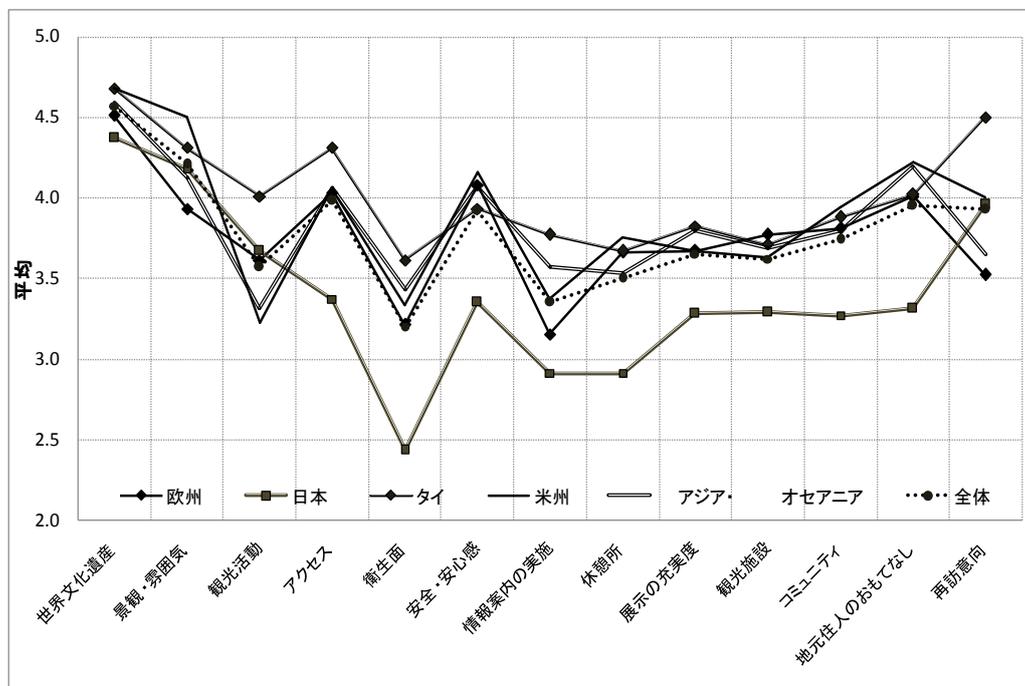


図 5-4 居住地別個別項目・再訪意向平均値

表 5-9 居住地別個別項目・再訪意向平均値

居住地	A要因 (観光魅力)			B要因 (観光環境)			C要因 (観光サポート)				D要因 (人的要因)		再訪意向
	世界文化遺産	景観・雰囲気	観光活動	アクセス	衛生面	安全・安心感	情報案内の実施	休憩所	展示の充実度	観光施設	コミュニティ	地元住人のおもてなし	
欧州	4.51	3.93	3.61	4.03	3.21	4.08	3.15	3.66	3.67	3.77	3.81	4.01	3.52
日本	4.37	4.18	3.67	3.37	2.43	3.35	2.91	2.91	3.28	3.29	3.27	3.31	3.96
タイ	4.68	4.31	4.01	4.31	3.61	3.93	3.77	3.67	3.82	3.71	3.88	4.02	4.50
米州	4.68	4.50	3.22	4.06	3.33	4.16	3.37	3.75	3.67	3.63	3.94	4.22	4.00
アジア・オセアニア	4.59	4.12	3.31	4.06	3.43	4.07	3.57	3.53	3.80	3.69	3.80	4.19	3.65
全体	4.57	4.21	3.57	3.98	3.20	3.92	3.35	3.50	3.65	3.62	3.74	3.95	3.93

図 5-4, 表 5-9 : 出典 : 筆者作成

これより、アユタヤの魅力を定着させるために、評価の良い世界文化遺産などの「A：観光魅力」などを引き続き維持するとともに、衛生面、情報案内板やパンフレットなどについて改善を図ることが考えられる。

また、居住地別にみると、タイ居住者の評価が高いことや、日本居住者の個別項目評価が低いものの、再訪意向はそれほど低くなっていないことなど、居住地別に特徴が異なる。

特に、アクセスを取り上げると、バンコクからアユタヤまでの所要時間は鉄道：1時間、ツアーバス・自家用車：1.5時間、路線バス：2時間程度となっている。費用に大差はなく、頻度については路線バスと鉄道が同程度であり、自家用車ならびにツアーバスは個々の行程ごとに決定されると考えられる。

このなかで、日本人の評価の低さは、バス自体の老朽化や舗装やバス自体の性能による乗り心地が関連しているものと考えられる。一方、欧米で鉄道の評価が高い理由としては、十分なサービスレベルでなくとも、非日常性や欧米と異なる雰囲気を経験できる、というものが強いと考えられ、利用交通機関とその評価との関連性、居住地別の利用交通機関の割合が異なっていると考えられる。

これらにより、個別項目が再訪意向に与える影響が異なると推察でき、その関係性を把握することによって観光地整備による再訪意向への効果をより定量的に考察することが可能と考えられる。

## 5.5 アユタヤの再訪意向に関する分析

本研究の目的である居住地や個別項目評価などの来訪者属性・要因と再訪意向との関連を明らかにするために、単相関係数・偏相関係数による分析と層別回帰分析ならびにCSポートフォリオ分析を行った。

### 5.5.1 偏相関係数による分析

まず、再訪意向と12個別項目（5段階評価）の満足度との関連性を確認するために単相関係数を算出した。使用データは、現地アンケートによる253サンプルであり、居住地別サンプルは、タイ：85、日本：78、欧州：71、米州：8、アジア・オセアニア（タイ、日本を除く）：11となっている。

その結果を表 5-10に示す。再訪意向への影響が考えられる広範な12個別項目を取り上げたため、相関係数が0.5を超えるような変数間での高い相関がみられる。12変数を説明変数、再訪意向を被説明変数として回帰分析を行う場合、多重共線性によるt値の低下、不安定なパラメータ算出が考えられるため、対象とする変数以外の影響を除外可能な偏相関係数による影響の度合いの確認を行った。

表 5-10 個別項目と再訪意向との相関係数

	再訪意向	A要因 (観光魅力)			B要因 (観光環境)			C要因 (観光サポート)				D要因 (人的要因)	
		世界文化遺産	景観・雰囲気	観光活動	アクセス	衛生面	安全・安心感	情報案内	展示	休憩所	観光施設	コミュニティ	地元人のおもてなし
再訪意向	1.00	0.35	0.19	0.34	0.28	0.14	-0.02	0.28	0.27	0.22	0.20	0.21	0.20
世界遺産	0.35	1.00	0.45	0.33	0.30	0.14	0.12	0.22	0.31	0.29	0.22	0.24	0.28
景観・雰囲気	0.19	0.45	1.00	0.20	0.18	0.23	0.30	0.32	0.16	0.21	0.09	0.27	0.23
観光活動	0.34	0.33	0.20	1.00	0.20	0.20	0.06	0.23	0.23	0.28	0.33	0.28	0.30
アクセス	0.28	0.30	0.18	0.20	1.00	0.48	0.35	0.30	0.33	0.43	0.24	0.28	0.36
衛生面	0.14	0.14	0.23	0.20	0.48	1.00	0.48	0.49	0.32	0.44	0.26	0.35	0.41
安心感	-0.02	0.12	0.30	0.06	0.35	0.48	1.00	0.28	0.18	0.26	0.13	0.33	0.34
情報案内の実施	0.28	0.22	0.32	0.23	0.30	0.49	0.28	1.00	0.26	0.37	0.22	0.45	0.36
展示	0.27	0.31	0.16	0.23	0.33	0.32	0.18	0.26	1.00	0.51	0.48	0.43	0.48
休憩所	0.22	0.29	0.21	0.28	0.43	0.44	0.26	0.37	0.51	1.00	0.55	0.40	0.47
観光施設	0.20	0.22	0.09	0.33	0.24	0.26	0.13	0.22	0.48	0.55	1.00	0.44	0.50
コミュニティ	0.21	0.24	0.27	0.28	0.28	0.35	0.33	0.45	0.43	0.40	0.44	1.00	0.61
地元人のおもてなし	0.20	0.28	0.23	0.30	0.36	0.41	0.34	0.36	0.48	0.47	0.50	0.61	1.00

出典：筆者作成

導出する偏相関係数( $r$ )は、2変数  $ij$  以外の全ての変数を固定したときの相関係数であり、相関係数行列  $r$  の逆行例の要素  $r^{ij}$  としたとき、次の式 (1) で求めることができる。

$$r(ij \cdot k \neq i, j) = \frac{-r^{ij}}{\sqrt{r^{ii} r^{jj}}} \quad (1)$$

ここで、 $r(ij \cdot k)$ ：偏相関係数 (変数  $k$  の影響を除外した  $ij$ 間の相関)

表 5-11は、再訪意向と12個別項目との単相関係数、偏相関係数を示したものである。偏相関係数 ( $r$ ) は単相関係数同様、 $-1 \leq r \leq 1$  であり、絶対値が大きいほど相関が高いことを示す。いずれの変数も単相関係数より偏相関係数の方が値が小さいことを確認できる。単相関係数の場合、変数  $x$  と変数  $y$  との関連を考えると、変数  $x$  の変動が明示されていない変数  $z$

へ、さらに変数 $z$ の変動が変数 $y$ にも関連するという他のパスからの関連性も含まれることとなる。そのため、変数 $z$ への影響を除外した偏相関係数は、単相関係数よりも小さくなるといえる。

再訪意向と12個別項目の偏相関係数の結果から、符号条件が満たされないものは、「衛生面」、「安心感」、「地元のおもてなし」、「休憩所」であった。そこで、これらを削除して再訪意向を説明する回帰モデルを構築することとする。

表 5-11 再訪意向と個別項目との相関係数・偏相関係数

	要数	単相関係数	偏相関係数
A要因 (観光魅力)	世界文化遺産	0.35	0.16
	景観・雰囲気	0.19	0.02
	観光活動	0.34	0.21
B要因 (観光環境)	アクセス	0.28	0.18
	衛生面	0.14	-0.05
	安全・安心感	-0.02	-0.15
C要因 (観光サポート)	情報案内の実施	0.28	0.17
	休憩所	0.22	-0.03
	展示の充実度	0.27	0.11
	観光施設	0.20	0.00
D要因 (人的要因)	コミュニティ	0.21	0.01
	地元住人のおもてなし	0.20	-0.02

出典：筆者作成

### 5.5.2 層別回帰分析

本研究では、観光地の個別項目の評価が再訪意向を形成し、その関係は線形和であると仮定して、回帰分析によって再訪意向モデルを構築する。この際、居住地をはじめとする個人属性によって個別項目が再訪意向に与える影響が異なることが推察できるため、それらを明示した定式化を行う必要がある。その1つの手法として、層別回帰分析をとりあげる。

これは、居住地ダミーなどのダミー変数を回帰式の中に導入するもので、再訪意向の高低に個人属性が影響を与える効果とその係数によって評価するものである。性別、年齢階層に加え、特に回答表の文化的背景、経済社会環境の差異を居住地ダミーが代理変数とし

て表現すると考える。通常、回帰分析は連続量である被説明変数の変動を、連続量の説明変数によって示すものであるが、層別回帰モデルは、カテゴリー変数をあわせて導入する。

実際の推計では、アユタヤへの再訪意向(とても再訪したい：5点～全く再訪したくない：1点)を被説明変数( $y$ )として、偏相関係数で符号条件を満たしたもの(偏相関係数を参考にした9個の変数)ならびに回答者の個人属性である性別ダミー、年齢階層ダミーならびに居住地ダミー(欧州居住者、日本居住者、タイ居住者、米州居住者、日本・タイを除くアジア・オセアニア居住者)を説明変数として用いる。ダミー変数による層別回帰モデルは下のように表現できる。

$$y = \beta_0 + \beta_1 \cdot x + \beta_2 \cdot z + \beta_3(x \cdot z) + \varepsilon \quad (2)$$

ここで、 $\beta_0$ ：定数項、 $\beta_1$ ,  $\beta_2$ ,  $\beta_3$ ：回帰係数、  
 $x$ ：説明変数、 $\varepsilon$ ：誤差項

ここで、右辺第2項は個別項目評価の影響を示し、第3項は性別、年齢階層、居住地による定数項効果(ある属性の場合、他の属性に比べて再訪意向が $\beta_2$ 大きくなる効果)を示す。これに対して、第4項はある属性を考えた時、個別項目評価の変動を $\beta_3$ だけ大きく評価するという傾きの増減を示す効果と考えることができる。なお、ダミー変数( $z$ )は、該当する場合：1、しない場合：0である。

表 5-12 層別回帰モデルの結果

	層別回帰		回帰	
	回帰係数	t値	回帰係数	t値
世界遺産( $\beta_1$ )	0.30	3.93	0.26	3.12
・欧州ダミー( $\beta_3$ )	-0.15	-6.95	—	—
アクセス( $\beta_1$ )	0.14	2.68	0.13	2.33
・日本ダミー( $\beta_3$ )	-0.06	-2.03	—	—
・アジアダミー( $\beta_3$ )	-0.10	-1.96	—	—
展示の充実度( $\beta_1$ )	0.10	1.83	0.10	1.74
観光活動( $\beta_1$ )	0.16	3.18	0.20	3.72
定数項( $\beta_0$ )	1.39	3.93	1.19	3.18
重相関係数( $r$ )	0.59		0.46	
決定係数( $r^2$ )	0.35		0.21	

出典：筆者作成

推定では、回答が十分な253人のデータを用いた。パラメータの符号条件、 $t$  値(10%有意水準を採用)によって評価しながらモデルの改良を行ったところ、最終的に決定係数0.35となるモデルを構築した(表 5-12)。比較対象として層別ダミー変数を用いない回帰モデルを右に示すが、 $t$  値が大きくなりパラメータの有意水準が上がっていること、決定係数が若干改善され、説明力の改善がなされている。5段階評価を採用し、個人個人の意向データであるため、必ずしも決定係数が高くないものの、居住地による評価構造の差異を把握できたと考えられる。

なお、パラメータの一部が負値であるが、式(2)で定義される各国・地域の  $(\beta_1 + \beta_3)$  が重要となるため、この値は全て正になることから、論理的に妥当と判断される。

特に、居住地による評価への影響は定数項効果ではなく、個別項目評価を補正(傾きを増加させたり、減少させたりする)すると解釈できる。なお、性別、年齢階層ダミーは有意とならなかったため、 $\beta_2$ は表-11中に記載されていない。

上記の層別回帰分析結果から、再訪意向に与える要因として、「A：観光魅力(アユタヤの「世界文化遺産」、象に乗る体験など「観光活動」)」が大きく影響していることに加え、「B：観光環境(「アクセス」)」、「C：観光サポート(博物館などの「展示の充実」)」による影響が明らかとなった。D：人的要因については有意な結果とならなかったが、これは調査対象地がアユタヤのみであり、大きな回答の変動がなかったためとも考えられる。

また、居住地別にみると、欧州居住者は世界文化遺産に対する評価が低いとともに、日本、アジア・オセアニア居住者はアクセスに対する評価が低く、これはバスツアーの利用割合が高かったことから大きな影響を与えなかったと推察できる。さらに、図5-3において日本居住者の衛生面や情報案内、休憩所の評価が低かったものの再訪意向が低くならなかった原因として、これらの個別項目が再訪意向に与える影響が有意でなく、「世界文化遺産」など他の項目を重視した評価になっていたためと考えられる。

### 5.5.3 CSポートフォリオ分析

層別回帰によって個別項目の評価が再訪意向に与える影響を居住地別に明らかにすることができた。さらに、アユタヤにおける観光地整備のためには、来訪セグメントごとにどの項目が評価され、何を改善させるとより効果的か明らかにする必要がある。このような、アユタヤの魅力を構成する各要素をプロットして重点的に改善施策立案や優先順位付けを明らかにするため、CSポートフォリオを作成した。これは、層別回帰モデルの結果によって得られた項目別の重要度(パラメータ)をX軸に、評価の平均点をY軸にとってプロットしたものである。ここで、X軸では $\beta_1$ の平均値である0.15を、Y軸では個別項目の評価における「やや満足」に相当する4点を判別する基準として設定し、ポートフォリオを4象限に区分した。

#### 第1象限：強化領域

重要度も評価平均点も高く、引き続き項目のポジションが悪化しないように留意する

領域

第2象限：現状維持

評価平均点は高いが、重要度が低いいため、再訪意向の醸成に大きく寄与しない。  
従って現状の評価平均点を維持することが重要と考えられる領域

第3象限：最低評価

重要度、評価平均点が現状ではいずれも小さい領域である。評価構造の変化に十分注意しながら、第4象限同様改善を検討する必要がある領域

第4象限：最優先改善

重要度が高いのに、評価平均点が低く、再訪意向向上のためには最優先で改善しなければならぬ領域

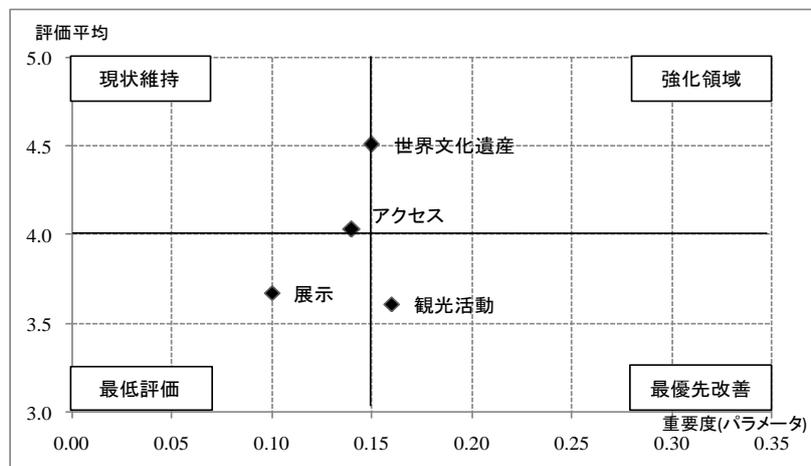


図 5-5 欧州居住者のCSポートフォリオ

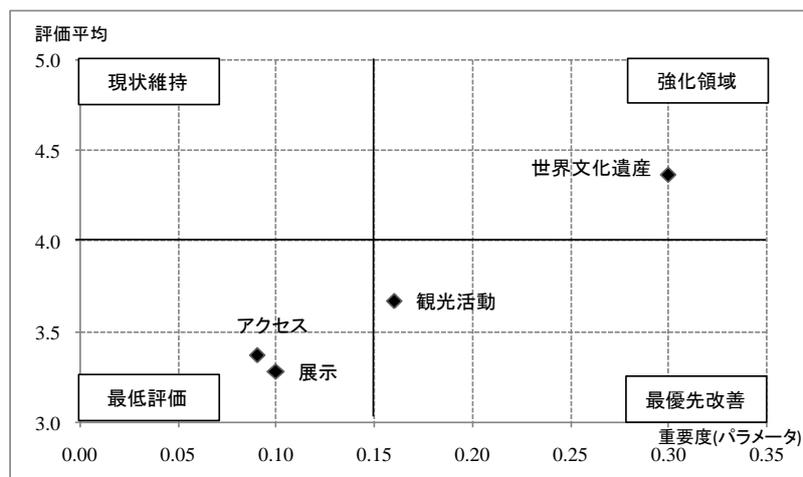


図 5-6 日本居住者のCSポートフォリオ

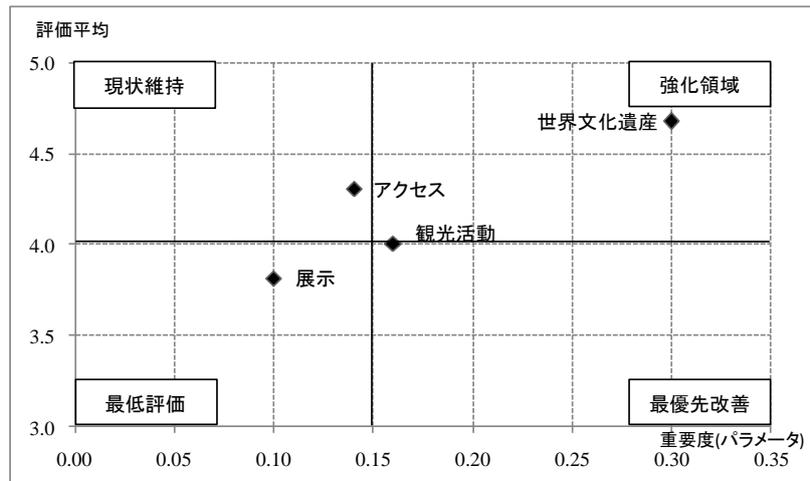


図 5-7 タイ居住者のCSポートフォリオ

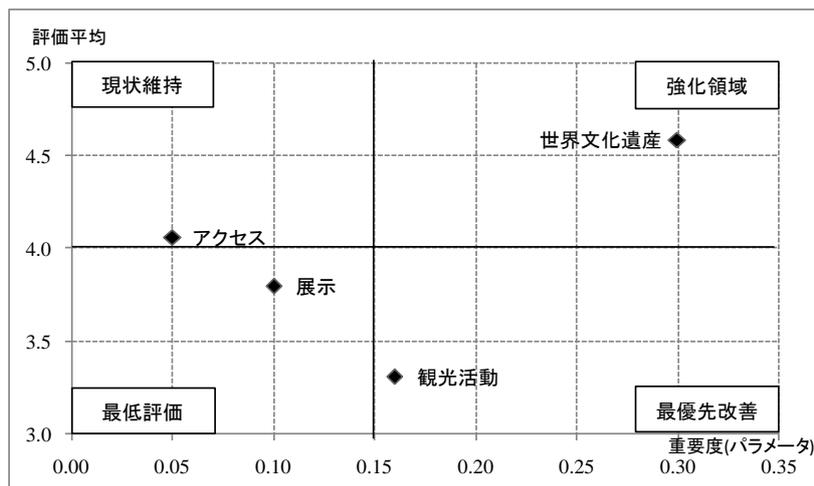


図 5-8 アジア・オセアニア居住者のCSポートフォリオ

図 5-5～図 5-8：出典：筆者作成

図5-5～図5-8に示すように、欧州、日本、アジア・オセアニアならびにタイの居住地別評価構造を明らかにした。

居住地別の評価構造を比較すると、日本、タイ、アジア・オセアニア居住者に共通して世界文化遺産が高い評価であるが、欧州では、世界文化遺産が現状維持項目に示された。また、欧州、タイ、アジア・オセアニア居住者に共通して展示が最低評価項目である。日本居住者では、最低評価がアクセスとわかった。

さらに、欧州、日本、アジア・オセアニア居住者に共通して観光活動に評価に最優先改善項目が示された。すなわち、アユタヤにおける観光地整備に対する重点的に改善させることは観光活動であることが明らかとなった。なお、X軸の区分は他の設定も考えられる。

その場合でも、パラメータの大小より観光活動の方が優先順位が高いと考えられる。

## 5.6 第 5 章まとめ

本章では、タイ・アユタヤを対象として、来訪者の属性、行動や評価の実態を把握するとともに、再訪意向に影響を与える居住地等の個人属性をはじめとする要因の同定を目的とした。

まず、実態を明らかにするために現地におけるアンケート調査を行い、409サンプルを収集した。このデータを用いて、来訪者の個人属性、来訪前の資源認知、来訪中の行動について来訪目的、同伴者、利用交通手段、立寄り地点について明らかにした。その結果、年齢階層は20代の構成比率が多く、アユタヤへの来訪前に持つ認知度と来訪中の行動とは関連性があり、来訪者にとっては歴史的な世界文化遺産などの遺跡に対して強い期待があることがわかった。さらに、居住地によっても利用交通手段、立寄り行動に差異がみられた。

さらに、再訪意向に与える影響を偏相関係数を参考にしながら層別回帰モデルによって明らかにした。その結果、「A:観光魅力（アユタヤの「世界文化遺産」、象に乗る体験など「観光活動）」が再訪意向の形成に大きな影響を及ぼしていること、居住地別にみると欧州居住者は世界文化遺産に対する評価が低いとともに、日本、アジア居住者はアクセスに対する評価が低いこと、これらの効果は定数項効果ではなく、 $\beta_3$ から個別項目評価を補正（傾きを増加させたり、減少させたりする）すると解釈できることが明らかとなった。

さらに、観光地整備のため、来訪セグメントごとにどの項目が評価され、何を改善させるとより効果的か明らかにするためCSポートフォリオ分析を行った。その結果、いずれの居住地でも世界文化遺産の評価が高く、タイ以外の居住者で観光活動が最優先改善と位置づけされた。このように、CSポートフォリオによって居住地ごとの評価の差異、再訪意向向上のためのプライオリティを整理することができた。

CSポートフォリオ分析の結果によりアユタヤにおける観光発展に関する方策として、下記のような点を上げることができる。

- (1) 来訪者への詳細なアユタヤ観光情報提供や観光に関するサービスに応じる事務所及び人材を開発すること。
- (2) タイ古都としてアユタヤの博物館の展示及び文化歴史に関する活動を改善すること。
- (3) アユタヤの文化歴史観光地を実体験するために、世界遺産の古都アユタヤ遺跡を象に乗って散歩したり、レンタサイクル、エンジン付けのボートでアユタヤを囲む川を一周、トゥクトゥクに乗る体験、夜のライトアップの祭り等の観光活動にスムーズに参加できるような体制づくりを検討すべきである。
- (4) アユタヤの交通機関に関する整備をすること。

また、来訪者の再訪意向以外の要因として、伝統文化や古都の遺跡としてアユタヤの独自の観光資源の保護、復旧と観光発展を計画するため、自治体と国家の芸術文化遺産や芸術の保存、教育、研究、開発の業務について責任を負っている芸術局及びタイ観光局との協働業務がさらに重要と考えられる。また、特にアユタヤの観光地発展が実現するためには、地元住人側の観光地に対する認識と協力も長期的に必要となろう。

以上より、居住地が対象地の再訪意向に大きく影響を及ぼすことが確認できた。しかしながら、本研究はアユタヤ1箇所を実施した409サンプルという限定的なデータであるため、今後の課題として複数箇所を比較した評価分析の必要性、サンプル数の増加を通じた多角的検討の必要性などが考えられる。また、アユタヤの成果と事例をさらに広げて、他のタイ観光地との比較を行うことも今後の課題として考えられる。

---

## 第5章 参考文献

- <sup>1</sup> Pearce, D. G.: *Tourist Development*, Longman, p. 257, 1989.
- <sup>2</sup> Friedland, J.: Tourists stay away in droves, *Far Eastern Economic Review*, Vol. 155, No. 22, pp. 56-57, 1992.
- <sup>3</sup> Muller, T. E. : The two nations of Canada vs. the nine nations of North America: a cross cultural analysis of consumers' personal values, A cross-cultural analysis of consumers' personal values, *Journal of International Consumer Marketing*, Vol. 1, pp. 57-79, 1989.
- <sup>4</sup> Muller, T. E.: Using personal values to define segments in an international tourism market, *International Marketing Review*, Vol. 8, No. 1, pp. 57-70, 1991.
- <sup>5</sup> Turner,L. and Reisinger,Y.: *Cross-Cultural Behavior in Tourism: Concepts and Analysis*, A Butterworth-Heinemann Title Publishing, 2002.
- <sup>6</sup> Armstrong,R. W., Mok,C., Go,F. M. and Chan,A.: The importance of cross-cultural expectations in the measurement of service quality perceptions in the hotel industry, *International Journal of Hospitality Management*, Vol. 16, No. 2, pp. 181-190, 1997.
- <sup>7</sup> Hofstede, G.: *Cultures and Organizations: Software of the Mind*, New York: McGraw-Hill, 1991.
- <sup>8</sup> Beerli, A. and Martin, J. D. : Tourists' characteristics and the perceived image of tourist destinations : a quantitative analysis – a case study of Lanzarote, Spain, *Tourism Management*, Vol. 25, pp. 623-636, 2004.
- <sup>9</sup> 野瀬元子, 古屋秀樹: 日光・箱根における外国人観光者と日本人観光者の評価特性分析, 都市計画学会論文集, Vol. 43, No. 3, pp. 595-600, 2008.
- <sup>10</sup> Dann, G. M.: Limitations in the use of 'nationality' and 'country of residence' variables, In Pearce, D. and Butler, R. (Eds.), London: Routledge, *Tourism Research: Critiques and Challenges*, pp. 88-112, 1993.
- <sup>11</sup> Bystrzanowski, J.: *Tourism as a Factor of Change: A Socio-Cultural Study*, International Social Science Council, European Coordination Centre for Research and Documentation in Social Sciences, Vienna, Austria, p. 115, 1989.
- <sup>12</sup> Pearce, P. L.: *Tourist Behavior: Themes and Conceptual Schemes*, Channel View Publications, p. 79, 2005.
- <sup>13</sup> Ryan, C.: The travel career ladder: An appraisal, *Annals of Tourism Research*, Vol. 25, pp. 936-957, 1998.
- <sup>14</sup> Kim, E. Y. J: Korean outbound tourism: Pre-visit expectations of Australia, *Journal of Travel & Tourism Marketing*, Vol. 6, pp. 11-19, 1997.
- <sup>15</sup> Pizam, A. and Sussmann, S.: Does nationality effect tourist behavior, *Annals of Tourism Research*, Vol. 22, pp. 901-917, 1995.
- <sup>16</sup> Kozak, M.: Comparative analysis of tourist Motivations by nationality and destinations, *Tourism Management*, Vol. 23, pp. 221-232, 2002.
- <sup>17</sup> Pizam, A., Neumann, Y. and Reichel, A.: Dimensions of tourist satisfaction with a destination area, *Annals of Tourism Research*, Vol. 5, No. 3, pp. 314-322, 1978.
- <sup>18</sup> Kozak, M. and Rimmington, M.: Tourist satisfaction with Mallorca, Spain, as an off-season holiday destination, *Journal of Travel Research*, Vol. 38, No. 3, pp. 260-269, 2000.
- <sup>19</sup> Aleage, J. and Garau, J.: Tourist satisfaction and dissatisfaction, *Annals of Tourism Research*, Vol. 37, No. 1, pp. 52-73, 2009.
- <sup>20</sup> Pearce, P. L.: *The Ulysses Factor: Evaluating Visitors in Tourist Setting*, Springer-Verlag, p. 86, 1988.
- <sup>21</sup> 牧野博明, 加藤浩徳, 藤田哲男, 小久保恵三: 観光地特性を考慮した観光地魅力度の定量的評価に関する調査分析, 土木計画学研究・講演集, 第24巻2号, pp.509-512, 2001.
- <sup>22</sup> 古屋秀樹: 旅行満足度の構造分析, 第41回土木計画学研究・講演集, CD-ROM, 2010.
- <sup>23</sup> Wooside, A. G. and Jacobs, L. W.: Step two in benefit segmentation: Learning the benefits realized by major travel markets, *Journal of Travel Research*, Vol. 24, No. 1, pp. 7-13, 1985.
- <sup>24</sup> 佐々木土師二: 旅行者行動の心理学, 関西大学出版, 2000.
- <sup>25</sup> Chigako,Y. and Kei'ichi,S.: Study on Methods for Analyzing User Needs: Survey on the Needs of Overseas Visitors for Tourism Policy Development, Hokkaido University,

- 
- [http://www.gradus.net/new%20HP/kenkyuronbun/pdf/Study%20on%20Methods%20for%20Analyzing%20User%20Needs\(2005\).pdf](http://www.gradus.net/new%20HP/kenkyuronbun/pdf/Study%20on%20Methods%20for%20Analyzing%20User%20Needs(2005).pdf), Viewed on 2012.9.29, 2005.
- <sup>26</sup> 鎌田裕美, 山内弘隆: 観光需要に影響を及ぼす要因について－「魅力度」計測への試み－, 国際交通安全学会誌, Vol.31, No.3, pp.186-194, 2006.
- <sup>27</sup> Asian Development Bank: Key Indicators for Asia and the Pacific 2011, <http://www.adb.org/key-indicators/2011/part-iii-regional-tables>, Viewed on 2011.12.5
- <sup>28</sup> Thailand National Statistical Office: Core Economic and Social Indicators of Thailand 2011, p.29
- <sup>29</sup> 日本旅行産業会(JATA), <http://www.jata-net.or.jp/data/stats/2012/12.html>, Viewed on 2011.11.5
- <sup>30</sup> UNESCO World Heritage Centre list, <http://whc.unesco.org/en/list/576>, Viewed on 2011.11.5
- <sup>31</sup> Garnier, D. : *Ayutthaya: Venice of the East*, River Books, Thailand, 2004.
- <sup>32</sup> タイ国政府観光庁: Office of Tourism Development, タイ語, <http://www.tourism.go.th/2009/th/statistic/tourism.php?cid=12>, Viewed on 2010.6.15
- <sup>33</sup> Prakhorn Si Ayutthaya Province web-site: <http://www.ayutthaya.go.th/travel-1/index.html>, Viewed on 2010.12.5
- <sup>34</sup> KLAYSIKAEW Krairerk, 古屋秀樹: タイ・アユタヤ来訪者の行動評価特性分析, 日本観光研究学会第26回全国大会研究発表論文集, pp.301-304, 2011.

## 第 6 章 結論

### 6.1 結論

タイでは、観光立国を目指して国家レベルの観光開発プランの変化と観光者の増加を背景として、供給側として観光政策の役割の重要性や需要側として旅行者の行動・評価特性を反映した施策の把握の必要性が高まっている。これらを背景として、本研究では、タイにおける観光振興に寄与する施策への提案するために、下記に示す3つの目的を設定した。

#### 供給側

- (1) 観光・スポーツ省の内局であるタイ国政府観光庁、観光局の報告年報、政策概要、事業概要を対象とした文献調査により観光政策の変遷の考察から、時代・社会の変化と対策との対応関係を考察し、行政の役割を明らかにする。(3章)

#### 需要側

- (2) タイ国民の個人個人観光行動の実態を把握するとともに、旅行形態間の競合や将来の観光需要の推定を分析する。(4章)
- (3) タイ・アユタヤが対象地であることを旅行者の観光地に対する期待・旅行行動や評価特性の実態を把握するとともに、再訪意向に影響を与える居住地等の個人属性をはじめとする要因の同定を分析する。(5章)

上記の3つの目的に基づいてタイにおける観光振興を着目しながら、「供給側」として観光政策と「需要側」として旅行者の観光実態との関連性を分析した。

#### (1) 観光政策の変遷について

「供給側」に相当する観光政策では、初期から観光政策の変遷を考察した。その結果、社会情勢と密接に関連しながら、初期は潜在的観光地域へ優先的にインフラ整備が行われて、徐々に外貨獲得、投資拡大、住民サービスなど観光振興の目的、対象マーケットを変化させながら、工業化におけるマクロ経済の不安定性を克服することに貢献することができ、観光振興に取り組みれていたところが明らかとなった。さらに、タイ国政府観光庁が実施してきた政策は、観光振興に対して効率的なキャッチアップができたことが確認され、途上国の開発政策の策定に際しても有意義なものと考えられる。特に、外貨獲得を目的とした経済開発のための観光振興とともに、経済開発に伴う内需の消費拡大のための観光振興へ、政策的志向が変化しつつある。今後は、それ以上のレベルを保持し、旅行環境に対する整備を推進する必要があることが分かった。

さて、タイでは、観光振興を主体的に担当しているのは政府の観光・スポーツ省である。

さらに、タイ観光行政に対する担当としてタイ国政府観光庁と観光局の2つの機関である。

1. タイ国政府観光庁は、首相府長官に直轄され、同長官を委員長とする諮問委員会が設置されており、活動の方針策定を担当する。タイ国政府観光庁の主管業務はマーケティングであり、国内に22箇所、海外では18カ国に事務所を開設し、国内外で活発なプロモーション活動を展開している。また、政策立案では、基本方針は本庁で作成するものの、マーケティングの対象となる国によって対応の違いが大きい。そのため、各国事務所から出された提案も政策に反映される仕組みになっている。

2. 観光局は、観光地の開発、自治体との観光振興、観光産業の育成、持続可能な産業をするための国内向け標準ガイドの作成等をしている。その他、内務省の都市計画局、経済社会開発局、文化省、文化省の芸術局、天然資源環境省、外務省も観光に関する仕事を担当している。一方、多くの地方自治体では、観光行政を商工・農林・水産行政などと同じ産業振興に位置付けている。

## (2) タイ国民の個人個人観光行動の実態を把握

旅行者の発地に着目した分析では、まず、タイ国民のみを対象として観光実態を明らかにすることができ、旅行形態間の競合や将来の旅行需要を明らかにした。国内日帰り・宿泊旅行及び国外旅行に関する発生回数では、経済成長を背景とした収入、社会的な人口変化等が観光行動に与える影響が明らかとなった。発地における環境変化によって国内旅行発生回数及び国外旅行発生回数の競合が予想されることから、旅行者の着地ではそれらを踏まえた対応が今後必要と考えられる。

## (3) 観光地に対する期待・旅行行動や評価特性の実態を把握するとともに、再訪意向に影響を与える居住地等の個人属性要因の同定分析

旅行者の着地では、アユタヤを分析対象地域として設定し、アユタヤへの来訪前に持つ認知度と来訪中の行動とは関連性があり、来訪者にとっては歴史的な世界文化遺産などの遺跡に対して強い期待があることがわかった。さらに、居住地によっても利用交通手段、立寄り行動に差異がみられた。さらに、観光地に対する期待・旅行行動や評価の実態における再訪意向に影響を与える居住地等の個人属性をはじめとする要因を明らかにした。その結果、欧州居住地者は歴史的な観光地に対する評価が低いとともに、日本、アジア居住地者はアクセスに対する評価が低いことと解釈できた。また、観光地整備のため、何を改善させるとより効果的か明らかにするためCSポートフォリオ分析を行った。その結果、いずれの居住地でも世界文化遺産の評価が高く、タイ以外の居住者で観光活動、観光情報提供や博物館の展示が最優先改善と位置づけされた。このように、CSポートフォリオによって居住地ごとの評価の差異、再訪意向向上のためのプライオリティを整理することができた。これらより、これまで検討されていなかった分析手法を提示したと考えられる。

以上の分析結果とタイの観光振興との関連性について下記のように整理できる。

すなわち、観光振興の定義として、「対象地域の居住者の旅行行動が活発化すること、及びそこへの来訪者数・消費金額の増加、地域イメージの向上が図られること」と設定し、その実現を通じて、住民や観光関連産業の所得、収益向上や地域の賑わい創出が期待されるとしている。

そして、3章の分析から、観光振興の一側面として旅行者が円滑で質の高い行動を行うための条件整備が必要不可欠であることが考えられるが、それに対して行政による政策の推進が及ぼす関連性を明らかにした。

それに対して、需要面である4章から、地域住民の旅行行動活発化にむけて、休暇の増加、所得の向上の影響を明らかにするとともに、5章の分析から来訪者数増加のために必要不可欠な再訪意向向上とその影響要因を明らかにできたことから、個人の旅行行動活発化を通じた観光振興との関連を示せたと考えることができる。

タイの観光振興に向けて政府と民間企業はそれぞれ活動しているものの、政府の政策や情報が民間に効果的な情報が伝わっていない現状がある。そして、タイにおける観光行政の果たす役割と本研究に関連する分析内容によって、タイ国政府観光庁がタイ人旅行者及び外国人旅行者向けのプロモーションを行う際、施策の対象となる具体的なターゲットの把握が可能となった。また、観光局で担当する観光地評価に向けて観光客増加変化・ニーズの把握、リピーター構成、観光地の環境整備に対するイメージ改善、分析方法を提示することができた。

## 6.2 今後の研究課題および貢献

今後の研究課題として、まず「供給側」では、プロモーションの具体的方策、民間企業、各観光行政に関する観光のステークホルダーの連携・組織化を検討し、詳細的に観光政策との関連性を明らかにすることがあげられる。また、世界諸国の観光政策を対象とした分析の結果を、タイと比較しながら今後の観光地整備に向けての検討、観光政策の課題を抽出することが挙げられる。

一方、「需要側」の分析においては、タイ以外の旅行者の観光実態を明らかにして、国際交流的発地国と着地国双方における国内事情及び両国事情を分析し、国際観光交流の関連性を明らかにすることが必要と考えられる。さらに、タイでは、アユタヤの成果と事例をさらに広げ、提示する分析方法を用いて他のタイ観光地評価を行うことが今後必要と考えられる。

観光は、国際平和と国民生活の安定を象徴するものであつて、その持続的な発展は、平和と交際社会の相互理解の増進を念願し、文化的な生活を享受しようとする我らの理想とするところである。さらに、観光は、地域経済の活性化、雇用の機会の増大など国民経済のあらゆる領域にわたりその発展に寄与するとともに、健康の増進、潤いのある豊かな生活環境の創造などを通じて国民生活の安定向上に貢献するものであることに加え、国際相

互理解を増進するものである。

本研究で検討した観光振興は、経済発展に対する知見をもたらし、国、地方公共団体、観光産業界を含む経済界や一般国民にむけての提言であり、各位に対して観光に関する意識改善を期待するとともに、地域レベルの観光地開発、住民が地域の魅力を再認識し、郷土愛と誇りを育てていく効果がある。観光サービスの提供に関して高度な感性と適切な能力を有する人材を育成し、併せて観光に関する国内外の政策などについて総合的な研究を行う観光大学のような高等教育研究機関の整備を行う。その際、観光サービスの提供が地域の文化情報の発信基地となることから、各地域においてこれらの教育・研究が行われるよう配慮するとともに、観光関係の人材を育成している地の教育機関とネットワーク化を進める。よい観光まちづくりに貢献できると考えられる。さらなる国際観光交流の拡大により、国際相互理解の増進を図りつつ、国際収支の均衡化に資することに貢献できる研究に努力している。

また、本研究で検討した観光振興は、経済発展に対する知見をもたらし、2015年に東南アジア諸国連合(Association of South-East Asian Nations, ASEAN)にASEAN共同体(AEC)が創設された場合、その国際観光交流の拡大に貢献できる研究と考えられる。

## 謝辞

私は、自国のタイをより良くしたい、最新の観光分野の研究を日本で行いたい、さらにはタイと日本との懸け橋になりたい、という強い思いから留学することを決意しました。

そして、実際に留学できたので、日本自体をより深く勉強する、ということも考えられますが、むしろタイの観光産業の現状から、それらに少しでもお役に立ちたい、との考えも大きくなりました。

本研究の遂行にあつては、多くの方々のご指導とご協力を、ここに記して感謝の意を表します。

まず、本論文の作成にあたり、終始適切な指導を賜りました東洋大学国際観光学科古屋秀樹教授に対して、深甚たる感謝を申し上げます。大学院において長きに渡り、修士論文からのご指導を賜り、その後、博士後期課程進学之机と研究の場を与えていただき、主指導教授として個々の分析から研究全般に渡って多くのご指導を賜りました。同教授のご指導を受けることができたことは、筆者の最も大きな幸いのひとつでありました。

次に、同学科の飯嶋好彦教授に感謝を申し上げます。本研究の副指導教授として、博士後期課程進学時の入学試験にはじまり、発表会において常に有益なご助言をいただくとともに多くの知見を得ることができました。また、本論文の作成において貴重なコメントや励ましを与えてくださったことに心より感謝を申し上げます。

また、論文の執筆、研究の進むにあたって、研究学専攻内で定期的に行われた発表会が非常に大きな刺激となりました。堀雅通専攻長をはじめとする国際観光学専攻諸先生方より、発表に対して有益なコメントをいただくことができました。さらに、修士論文の研究にあたっては梁春香教授、薄木三生教授、松園俊志教授には様々な観光学分野に関連する情報において多岐に渡りご指導を賜りました。

特に、修士課程 2 年生在籍した時に塩川正十郎奨学金を受給いただき、勉学することに対して支援いただきました。留学生として心から塩川正十郎総長に感謝を申し上げます。人生にとって最も貴重なことでありました。

本論文の作成過程では、東洋大学大学院国際地域学研究科国際観光学専攻の院生、修了生の皆様や古屋研究室の皆様には大きな励ましをいただきました。心から感謝を申し上げます。

本研究の調査では、Web アンケート調査及びタイでの現地アンケート調査に対するご協力してもらいました皆様に感謝を申し上げます。

最後に、本論文を作成する上で、タイで、励ましてくれた家族に感謝します。さらに、暖かく応援してくれたタイ及び日本の親友に感謝します。

## 業績リスト

博士論文と関連する論文等

査読論文

1. Krairerk KLAYSIKAEW, 古屋秀樹：タイ・アユタヤにおける観光地の評価分析, 土木学会論文集 D3(土木計画学) Vol.70, No.5(土木計画学研究・論文集 第31巻), 2014.12

学内査読論文

2. KLAYSIKAEW Krairerk：タイにおける観光政策の変遷に関する研究, 東洋大学大学院紀要, 第50集(国際地域学研究科), 2014.3

一般投稿論文

3. KLAYSIKAEW Krairerk, 古屋秀樹：タイ・アユタヤ来訪者の行動評価特性分析, 日本観光研究学会第26回全国大会研究発表論文集, pp.301-304, 2011.12
4. KLAYSIKAEW Krairerk, 古屋秀樹：タイ・アユタヤ来訪者の国籍別評価特性分析, 日本観光研究学会第27回全国大会研究発表論文集, pp.57-60, 2012.12
5. KLAYSIKAEW Krairerk, 古屋秀樹：タイ・アユタヤ来訪者の再訪意向分析, 第48回土木計画学研究・講演集, 2013.11 (CD-ROM)

その他の論文等

6. 古屋秀樹, 佐藤邦明, Klaysikaew KRAIRERK：目的地選択確率を用いたアジア諸国の誘引力に関する基礎的分析, 第45回土木計画学研究・講演集, CD-ROM, 2012.6

## 付録

参考資料として付録 1～2 を収めた。付録 1 は、4 章で Web 実施した調査でを使用したアンケート調査票であり、付録 2 は、5 章で実施した調査でを使用したアンケート調査票である。

### 付録 1 タイ人の観光実態アンケート調査票

- (1) 対象：タイ国民，タイ語版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 119

### 付録 2 アユタヤにおける観光地の評価分析アンケート調査票

- (1) 対象地域：アユタヤ，英語版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 137
- (2) 対象地域：アユタヤ，日本語版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 141
- (3) 対象地域：アユタヤ，タイ語版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 145

## แบบสอบถาม พฤติกรรมการเดินทางท่องเที่ยวโดยรวมของคนไทย

ข้อมูลที่ได้จากแบบสอบถามนี้จะนำไปใช้ในการศึกษาและวิจัยถึงพฤติกรรมและปัจจัยต่างๆที่แท้จริงที่ส่งผลต่อการการเดินทางท่องเที่ยวของคนไทย. โดยเป็นการสอบถามข้อมูลในระยะเวลา 1 ปี ที่ผ่านมาของผู้ทำแบบสอบถาม โดยไม่มีเกณฑ์กำหนดในเรื่องของตัวผู้ทำแบบสอบถาม เช่น ในเรื่องของอายุ อาชีพ. ผู้วิจัยหวังเป็นอย่างยิ่งว่าจะได้รับความร่วมมือจากท่านเป็นอย่างดีในการตอบแบบสอบถามในครั้งนี้.และขอขอบพระคุณท่านเป็นอย่างยิ่งต่อการสละเวลามาตอบคำถาม ณ ที่นี้

Doctorate Course of International Tourism Studies :Toyo University, Tokyo, Japan

### Section:1 ข้อมูลส่วนตัว

1. เพศ : ชาย หญิง
2. อายุ : ต่ำกว่า 20 ปี 20-29ปี 30-39ปี 40-49ปี 50-59ปี 60-69ปี 70ปีขึ้นไป
3. ที่อยู่ปัจจุบัน ( ปริมาณ หมายถึง จังหวัดนนทบุรี ปทุมธานี และสมุทรปราการ)  
กรุงเทพและปริมณฑล ภาคกลาง ภาคเหนือ ภาคตะวันออก  
ภาคตะวันออกเฉียงเหนือ ภาคใต้
4. สถานภาพ : โสด สมรส อยู่ร้าง หม้าย
5. รูปแบบของครอบครัว  
อาศัยอยู่คนเดียว โสดอาศัยอยู่กับพ่อแม่ อาศัยอยู่กับลูก ครอบครัวสามีภรรยา  
ครอบครัวสามีภรรยาและลูกต่ำกว่า 18 ปี ครอบครัวสามีภรรยาและลูกอายุมากกว่า 18 ปี  
ครอบครัวสามีภรรยาและพ่อแม่ ครอบครัวสามีภรรยาและพ่อแม่และลูก Other.....

6.อาชีพ

- ธุรกิจส่วนตัว     รับราชการ/รัฐวิสาหกิจ     พนักงานบริษัท     เกษตรกร
- รับจ้าง     พนักงานโรงงาน     นักเรียน/นักศึกษา     พ่อบ้าน แม่บ้าน
- เกษียณ     ไม่ได้ประกอบอาชีพ     Other.....

7.มีรถยนต์ส่วนตัวหรือรถยนต์ในครอบครัวหรือไม่ :     มี     ไม่มี

8.มีรถจักรยานยนต์หรือไม่ :     มี     ไม่มี

9.รายได้เฉลี่ยต่อเดือน

- ไม่มีรายได้     ต่ำกว่า 10,000 บาท     10,101-15,000 บาท
- 10,101-15,000 บาท     15,001-30,000 บาท     30,001-45,000 บาท
- 45,001-60,000 บาท     60,001-75,000 บาท     75,001-90,000 บาท
- 90,000-100,000 บาท     มากกว่า 100,000 บาทขึ้นไป

10.วันหยุดต่อเดือน

- น้อยกว่า 3 วัน     4 วัน     5 วัน     6 วัน     7 วัน     8 วัน     9 วันขึ้นไป

11. ท่านใช้ข้อมูลจากแหล่งใดในการตัดสินใจรวมถึงใช้ในช่วงการเดินทางท่องเที่ยว(ท่านสามารถเลือกได้หลายคำตอบ)

- วิทยุ โทรทัศน์     หนังสือพิมพ์     นิตยสารการท่องเที่ยว     มือเดินทางท่องเที่ยว
- การบอกเล่าปากต่อปากจากคนรู้จัก     อินเทอร์เน็ต     แผ่นพับโฆษณาการท่องเที่ยว
- บริษัททัวร์     Other.....

12. ท่านมีความสนใจในการท่องเที่ยวประเภทใดบ้าง (กรุณาเลือกตามความชอบมากที่สุดตามลำดับ 1-3 )

- |  |   |
|--|---|
| <input type="radio"/> ประเภทประวัติศาสตร์และวัฒนธรรม | <input type="radio"/> ประเภทธรรมชาติ ป่าเขา ทะเล      |
| <input type="radio"/> ประเภทแหล่งบันเทิง             | <input type="radio"/> ประเภทอาหารเครื่องดื่ม ช้อปปิ้ง |
| <input type="radio"/> ประเภทสันทนาการ ผจญภัย กีฬา    | <input type="radio"/> ประเภทสุขภาพ สปา                |

13. ในระยะเวลา 1 ปีที่ผ่านมา ท่านได้ออกเดินทางท่องเที่ยวหรือไม่ :  เดินทาง  ไม่ได้เดินทาง

14. เหตุผลที่ทำให้ท่านไม่ออกเดินทางท่องเที่ยวคือ ?

- |   |   |
|---|---|
| <input type="radio"/> ไม่มีเวลาว่าง                       | <input type="radio"/> ไม่มีทุนทรัพย์เพียงพอสำหรับการเดินทาง |
| <input type="radio"/> ไม่มีคนเดินทางท่องเที่ยวด้วย        | <input type="radio"/> ไม่มีสถานที่ท่องเที่ยวที่อยากไป       |
| <input type="radio"/> ไม่มั่นใจในความปลอดภัยของการเดินทาง | <input type="radio"/> ปัญหาความวุ่นวายทางการเมือง           |
| <input type="radio"/> มีปัญหาด้านสุขภาพ                   | <input type="radio"/> ขาดข้อมูลในการตัดสินใจ                |
| <input type="radio"/> ไม่ชอบการเดินทาง                    |   |

## Section:2 ข้อมูลเกี่ยวกับการเดินทางท่องเที่ยว

ข้อมูลนี้ เป็นข้อมูลเกี่ยวกับการเดินทางท่องเที่ยวของท่านในช่วงระยะเวลา 1 ปีที่ผ่านมา

### 1. การเดินทางท่องเที่ยวภายในประเทศ

1.1 **ท่องเที่ยวแบบวันเดียว ไป – กลับ** (การท่องเที่ยวแบบวันเดียว ไป - กลับคือการเดินทางออกจากที่อยู่อาศัย

เพื่อการพักผ่อนหย่อนใจหรือเพื่อความสนุกสนานหรือเพื่อหาความรู้ มีจุดหมายที่จะเดินทางไป โดยไม่มีการค้างคืน

ไปและกลับภายในวันเดียว)

15. ในระยะเวลา 1 ปีที่ผ่านมาท่านได้เดินทางท่องเที่ยวแบบไป-กลับ เป็นจำนวนกี่ครั้ง

(การเดินทางท่องเที่ยวนี้รวมถึงการไปทำธุรกิจ สัมมนา ไปทำงานต่างจังหวัดด้วย)

0 ครั้ง *After the last question in this section, skip to question 21.*

1 ครั้ง     2 ครั้ง     3 ครั้ง     4 ครั้ง     5 ครั้ง     6 ครั้งขึ้นไป

16. จากข้อ 15 ท่านมีวัตถุประสงค์เดินทางเพื่อการท่องเที่ยวเป็นหลักกี่ครั้ง

(เป็นการเดินทางเพื่อการท่องเที่ยวอย่างแท้จริง ไม่รวมวัตถุประสงค์อื่น เช่น ธุรกิจ สัมมนา เป็นต้น)

0 ครั้ง *After the last question in this section, skip to question 21.*

1 ครั้ง     2 ครั้ง     3 ครั้ง     4 ครั้ง     5 ครั้ง     6 ครั้งขึ้นไป

17. สถานที่ท่องเที่ยวที่ท่านชอบเดินทางไปท่องเที่ยวแบบวันเดียว ไป-กลับ เป็นประจำอยู่ในจังหวัดใด?

.....

18. จุดประสงค์หลักที่ท่านออกเดินทางไปท่องเที่ยวคือ?

ท่องเที่ยวพักผ่อน     เยี่ยมญาติ/เพื่อน     กลับบ้าน เยี่ยมครอบครัว     เข้าวัดทำบุญ เทศกาล

เกี่ยวกับธุรกิจ ไปทำงานต่างจังหวัด สัมมนา     ช้อปปิ้ง     ทักสนศึกษากับโรงเรียน

Other.....

19. การเดินทางไปยังสถานที่ท่องเที่ยวที่ท่านใช้พาหนะใดในการเดินทาง (ท่านสามารถเลือกได้หลายคำตอบ)

รถยนต์ส่วนตัว     รถจักรยานยนต์     รถโดยสารประจำทาง     รถทัวร์นำเที่ยว

รถไฟ     รถเช่า     รถแท็กซี่     เครื่องบิน

เรือ     Other.....

20.ในการท่องเที่ยวแต่ละครั้งนั้นท่านใช้เงินเป็นจำนวนเท่าไร (รวมค่าเดินทาง ค่าน้ำมัน ค่าเช่าต่างๆ อาหาร  
ของที่ระลึกและของต่างๆ ที่เกี่ยวกับการท่องเที่ยวทั้งหมด)

- ต่ำกว่า 2,000 บาท                       2,001-3,000 บาท                       3,001-4,000 บาท
- 4,001-5,000 บาท                       5,001-6,000 บาท                       6,001-10,000 บาท
- 10,001 บาทขึ้นไป

## 1.2 การท่องเที่ยวแบบค้างคืน

21.ในระยะเวลา 1 ปีที่ผ่านมา ท่านออกเดินทางแบบค้างคืนเป็นจำนวนกี่ครั้ง

- 0 ครั้ง *After the last question in this section, skip to question 27.*
- 1 ครั้ง       2 ครั้ง       3 ครั้ง       4 ครั้ง       5 ครั้ง       6 ครั้งขึ้นไป

22.ใน 1 ปีที่ผ่านมา สถานที่ท่องเที่ยวที่ท่านชอบเดินทางไปท่องเที่ยวแบบค้างคืนเป็นประจำอยู่ในภูมิภาคใด?

(ปริมณฑล หมายถึง จังหวัดนนทบุรี ปทุมธานี สมุทรปราการ)

- กรุงเทพฯและปริมณฑล                       ภาคกลาง                       ภาคเหนือ
- ภาคตะวันออก                       ภาคตะวันออกเฉียงเหนือ                       ภาคใต้

23.จุดประสงค์หลักที่ท่านออกเดินทางไปท่องเที่ยวคือ?

- ท่องเที่ยวพักผ่อน                       สันนิมูน                       เยี่ยมญาติ/เพื่อน                       กลับบ้าน เยี่ยมครอบครัว
- เข้าวัดทำบุญ เทศกาล                       เกี่ยวกับธุรกิจ ไปทำงานต่างจังหวัด สัมมนา                       ช้อปปิ้ง
- หันศึกษากับโรงเรียน                       Other.....

24. การเดินทางไปยังสถานที่ท่องเที่ยวที่ท่านใช้พาหนะใดในการเดินทาง (ท่านสามารถเลือกได้มากกว่า 1 คำตอบ)

- รถยนต์ส่วนตัว     รถจักรยานยนต์     รถโดยสารประจำทาง     รถทัวร์นำเที่ยว     รถไฟ
- รถเช่า     แท็กซี่     เครื่องบิน     เรือ     Other.....

25. ครั้งสุดท้ายที่ท่านเดินทางไปท่องเที่ยวแบบค้างคืน ท่านพักเป็นเวลากี่คืน

- 1 คืน     2 คืน     3 คืน     4 คืนขึ้นไป

26. ในการท่องเที่ยวแต่ละครั้งนั้นท่านใช้เงินเป็นจำนวนเท่าไร (รวมค่าใช้จ่ายทั้งหมดเกี่ยวกับการเดินทางท่องเที่ยว

เช่น ค่ารถ ค่าน้ำมัน ค่าเช่าต่างๆ การซื้อของต่าง ค่าที่พัก เป็นต้น)

- ต่ำกว่า 2,000 บาท     2,001-3,000 บาท     3,001-4,000 บาท
- 4,001-5,000 บาท     5,001-6,000 บาท     6,001-10,000 บาท
- 10,001-20,000 บาท     20,001-30,000 บาท     30,000 บาทขึ้นไป

2. การเดินทางท่องเที่ยวยังต่างประเทศ (ข้อมูลนี้ เป็นการสอบถามข้อมูล ในช่วงระยะเวลา 1 ปี ที่ผ่านมา)

27. ในระยะเวลา 1 ปีที่ผ่านมา ท่านเดินทางไปต่างประเทศ กี่ครั้ง

- 0 ครั้ง *Stop filling out this form.*
- 1 ครั้ง
- 2 ครั้ง *Skip to question 34.*
- 3 ครั้ง *Skip to question 40*
- 4 ครั้ง *Skip to question 46.*
- 5 ครั้งขึ้นไป *Skip to question 52.*

28. ประเทศที่ท่านเดินทางไปท่องเที่ยวคือ : .....

29. จากข้อ 28 ท่านเดินทางไปท่องเที่ยวในช่วงเวลาใด?

มกราคม – มีนาคม     เมษายน – มิถุนายน     กรกฎาคม – กันยายน     ตุลาคม - ธันวาคม

30. จุดประสงค์ของการเดินทางไปท่องเที่ยวคือ

ท่องเที่ยวพักผ่อน     สันทนาการ     เยี่ยมญาติ/เพื่อน     เกี่ยวกับธุรกิจ สัมมนา ทำงาน

สัมมนา ทำงาน รวมทั้งท่องเที่ยว     ซื้อป๊อปปิ้ง รับประทานอาหารท้องถิ่น     Other.....

31. ท่านเดินทางท่องเที่ยวเกี่ยวกับใคร

คนเดียว     ครอบครัว     เพื่อน / เพื่อนร่วมงาน     คู่รัก     ญาติ     Other.....

32. ลักษณะการเดินทาง

จัดการเดินทางเอง     ไปกับบริษัททัวร์ กรุ๊ปทัวร์     ซื้อทัวร์บางส่วน ( Option Tour )

33. ในการท่องเที่ยวครั้งนี้ ท่านพักค้างคืนกี่คืน

1 คืน     2 คืน     3 คืน     4 คืน     5 คืน     6 คืนขึ้นไป

สำหรับท่านที่เดินทางท่องเที่ยวต่างประเทศ 2 ครั้งในรอบปี

34. ประเทศที่ท่านเดินทางไปท่องเที่ยว

ประเทศที่ท่านเดินทางไปในครั้งที่ 1: .....

ประเทศที่ท่านเดินทางไปในครั้งที่ 2: .....

35. ช่วงเวลาที่ท่านเดินทางท่องเที่ยว

ช่วงเวลาเดินทางท่องเที่ยวในครั้งที่ 1

มกราคม – มีนาคม     เมษายน – มิถุนายน     กรกฎาคม – กันยายน     ตุลาคม - ธันวาคม

ช่วงเวลาเดินทางท่องเที่ยวในครั้งที่ 2

มกราคม – มีนาคม     เมษายน – มิถุนายน     กรกฎาคม – กันยายน     ตุลาคม – ธันวาคม

36. จุดประสงค์หลักที่เดินทางไปท่องเที่ยวคือ

จุดประสงค์เดินทางท่องเที่ยวในครั้งที่ 1

ท่องเที่ยวพักผ่อน     สันนิมุน     เยี่ยมญาติ/เพื่อน     เกี่ยวกับธุรกิจ สัมมนา ทำงาน

สัมมนา ทำงาน รวมทั้งท่องเที่ยว     ช้อปปิ้ง รับประทานอาหารท้องถิ่น     Other.....

จุดประสงค์เดินทางท่องเที่ยวในครั้งที่ 2

ท่องเที่ยวพักผ่อน     สันนิมุน     เยี่ยมญาติ/เพื่อน     เกี่ยวกับธุรกิจ สัมมนา ทำงาน

สัมมนา ทำงาน รวมทั้งท่องเที่ยว     ช้อปปิ้ง รับประทานอาหารท้องถิ่น     Other.....

37. ท่านเดินทางท่องเที่ยวเกี่ยวกับใคร

ผู้ร่วมเดินทางในครั้งที่ 1

คนเดียว     ครอบครัว     เพื่อน / เพื่อนร่วมงาน     คู่รัก     ญาติ     Other.....

ผู้ร่วมเดินทางในครั้งที่ 2

คนเดียว     ครอบครัว     เพื่อน / เพื่อนร่วมงาน     คู่รัก     ญาติ     Other.....

38. ลักษณะของการเดินทาง

ลักษณะการเดินทางในครั้งที่ 1

จัดการเดินทางเอง     ไปกับบริษัททัวร์ กรู๊ปทัวร์     ซื้อทัวร์บางส่วน ( Option Tour )

ลักษณะการเดินทางในครั้งที่ 2

- จัดการเดินทางเอง     ไปกับบริษัททัวร์ กรุ๊ปทัวร์     ซื้อทัวร์บางส่วน ( Option Tour )

39.จำนวนที่พักค้างคืน

จำนวนพักค้างคืนในครั้งที่ 1

- 1 คืน     2 คืน     3 คืน     4 คืน     5 คืน     6 คืนขึ้นไป

จำนวนพักค้างคืนในครั้งที่ 2

- 1 คืน     2 คืน     3 คืน     4 คืน     5 คืน     6 คืนขึ้นไป

สำหรับท่านที่เดินทางท่องเที่ยวต่างประเทศ 3 ครั้งในรอบปี

40.ประเทศที่ท่านเดินทางไปท่องเที่ยว

ประเทศที่ท่านเดินทางไปในครั้งที่ 1:.....

ประเทศที่ท่านเดินทางไปในครั้งที่ 2:.....

ประเทศที่ท่านเดินทางไปในครั้งที่ 3:.....

41. ช่วงเวลาที่ท่านเดินทางท่องเที่ยว

ช่วงเวลาเดินทางท่องเที่ยวในครั้งที่ 1

- มกราคม – มีนาคม     เมษายน – มิถุนายน     กรกฎาคม – กันยายน     ตุลาคม - ธันวาคม

ช่วงเวลาเดินทางท่องเที่ยวในครั้งที่ 2

- มกราคม – มีนาคม     เมษายน – มิถุนายน     กรกฎาคม – กันยายน     ตุลาคม – ธันวาคม

ช่วงเวลาเดินทางท่องเที่ยวในครั้งที่ 3

มกราคม – มีนาคม     เมษายน – มิถุนายน     กรกฎาคม – กันยายน     ตุลาคม – ธันวาคม

42. จุดประสงค์หลักที่เดินทางไปท่องเที่ยวคือ

จุดประสงค์เดินทางท่องเที่ยวในครั้งที่ 1

ท่องเที่ยวพักผ่อน     สันนิมุน     เยี่ยมญาติ/เพื่อน     เกี่ยวกับธุรกิจ สัมมนา ทำงาน  
 สัมมนา ทำงาน รวมทั้งท่องเที่ยว     ซื้อปิ้ง รับประทานอาหารท้องถิ่น     Other.....

จุดประสงค์เดินทางท่องเที่ยวในครั้งที่ 2

ท่องเที่ยวพักผ่อน     สันนิมุน     เยี่ยมญาติ/เพื่อน     เกี่ยวกับธุรกิจ สัมมนา ทำงาน  
 สัมมนา ทำงาน รวมทั้งท่องเที่ยว     ซื้อปิ้ง รับประทานอาหารท้องถิ่น     Other.....

จุดประสงค์เดินทางท่องเที่ยวในครั้งที่ 3

ท่องเที่ยวพักผ่อน     สันนิมุน     เยี่ยมญาติ/เพื่อน     เกี่ยวกับธุรกิจ สัมมนา ทำงาน  
 สัมมนา ทำงาน รวมทั้งท่องเที่ยว     ซื้อปิ้ง รับประทานอาหารท้องถิ่น     Other.....

43. ท่านเดินทางท่องเที่ยวเกี่ยวกับใคร

ผู้ร่วมเดินทางในครั้งที่ 1

คนเดียว     ครอบครัว     เพื่อน / เพื่อนร่วมงาน     คู่รัก     ญาติ     Other.....

ผู้ร่วมเดินทางในครั้งที่ 2

คนเดียว     ครอบครัว     เพื่อน / เพื่อนร่วมงาน     คู่รัก     ญาติ     Other.....

ร่วมเดินทางในครั้งที่ 3

คนเดียว     ครอบครัว     เพื่อน / เพื่อนร่วมงาน     คู่รัก     ญาติ     Other.....

44.ลักษณะของการเดินทาง

ลักษณะการเดินทางในครั้งที่ 1

- จัดการเดินทางเอง    ไปกับบริษัททัวร์ กรุ๊ปทัวร์    ซื้อทัวร์บางส่วน ( Option Tour )

ลักษณะการเดินทางในครั้งที่ 2

- จัดการเดินทางเอง    ไปกับบริษัททัวร์ กรุ๊ปทัวร์    ซื้อทัวร์บางส่วน ( Option Tour )

ลักษณะการเดินทางในครั้งที่ 3

- จัดการเดินทางเอง    ไปกับบริษัททัวร์ กรุ๊ปทัวร์    ซื้อทัวร์บางส่วน ( Option Tour )

45.จำนวนที่พักค้างคืน

จำนวนพักค้างคืนในครั้งที่ 1

- 1 คืน    2 คืน    3 คืน    4 คืน    5 คืน    6 คืนขึ้นไป

จำนวนพักค้างคืนในครั้งที่ 2

- 1 คืน    2 คืน    3 คืน    4 คืน    5 คืน    6 คืนขึ้นไป

จำนวนพักค้างคืนในครั้งที่ 3

- 1 คืน    2 คืน    3 คืน    4 คืน    5 คืน    6 คืนขึ้นไป

สำหรับท่านที่เดินทางท่องเที่ยวต่างประเทศ 4 ครั้งในรอบปี

46.ประเทศที่ท่านเดินทางไปท่องเที่ยว

ประเทศที่ท่านเดินทางไปในครั้งที่ 1:.....

ประเทศที่ท่านเดินทางไปในครั้งที่ 2:.....

ประเทศที่เดินทางไปในครั้งนี้ 3:.....

ประเทศที่เดินทางไปในครั้งนี้ 4:.....

#### 47. ช่วงเวลาที่ท่านเดินทางท่องเที่ยว

ช่วงเวลาเดินทางท่องเที่ยวในครั้งนี้ 1

มกราคม – มีนาคม     เมษายน – มิถุนายน     กรกฎาคม – กันยายน     ตุลาคม - ธันวาคม

ช่วงเวลาเดินทางท่องเที่ยวในครั้งนี้ 2

มกราคม – มีนาคม     เมษายน – มิถุนายน     กรกฎาคม – กันยายน     ตุลาคม - ธันวาคม

ช่วงเวลาเดินทางท่องเที่ยวในครั้งนี้ 3

มกราคม – มีนาคม     เมษายน – มิถุนายน     กรกฎาคม – กันยายน     ตุลาคม - ธันวาคม

ช่วงเวลาเดินทางท่องเที่ยวในครั้งนี้ 4

มกราคม – มีนาคม     เมษายน – มิถุนายน     กรกฎาคม – กันยายน     ตุลาคม - ธันวาคม

#### 48. จุดประสงค์หลักที่เดินทางไปท่องเที่ยวคือ

จุดประสงค์เดินทางท่องเที่ยวในครั้งนี้ 1

ท่องเที่ยวพักผ่อน     สันนิมุน     เชื่อมญาติ/เพื่อน     เกี่ยวกับธุรกิจ สัมมนา ทำงาน  
 สัมมนา ทำงาน รวมทั้งท่องเที่ยว     ช้อปปี้ง รับประทานอาหารท้องถิ่น     Other.....

จุดประสงค์เดินทางท่องเที่ยวในครั้งนี้ 2

ท่องเที่ยวพักผ่อน     สันนิมุน     เชื่อมญาติ/เพื่อน     เกี่ยวกับธุรกิจ สัมมนา ทำงาน  
 สัมมนา ทำงาน รวมทั้งท่องเที่ยว     ช้อปปี้ง รับประทานอาหารท้องถิ่น     Other.....

จุดประสงค์เดินทางท่องเที่ยวในครั้งที่ 3

- ท่องเที่ยวพักผ่อน      สนนินมุน      เยี่ยมญาติ/เพื่อน      เกี่ยวกับธุรกิจ สัมมนา ทำงาน
- สัมมนา ทำงาน รวมทั้งท่องเที่ยว      ช้อปปิ้ง รับประทานอาหารท้องถิ่น      Other.....

จุดประสงค์เดินทางท่องเที่ยวในครั้งที่ 4

- ท่องเที่ยวพักผ่อน      สนนินมุน      เยี่ยมญาติ/เพื่อน      เกี่ยวกับธุรกิจ สัมมนา ทำงาน
- สัมมนา ทำงาน รวมทั้งท่องเที่ยว      ช้อปปิ้ง รับประทานอาหารท้องถิ่น      Other.....

49.ท่านเดินทางท่องเที่ยวเกี่ยวกับใคร

ผู้ร่วมเดินทางในครั้งที่ 1

- คนเดียว      ครอบครัว      เพื่อน / เพื่อนร่วมงาน      คู่รัก      ญาติ      Other.....

ผู้ร่วมเดินทางในครั้งที่ 2

- คนเดียว      ครอบครัว      เพื่อน / เพื่อนร่วมงาน      คู่รัก      ญาติ      Other.....

ร่วมเดินทางในครั้งที่ 3

- คนเดียว      ครอบครัว      เพื่อน / เพื่อนร่วมงาน      คู่รัก      ญาติ      Other.....

ร่วมเดินทางในครั้งที่ 4

- คนเดียว      ครอบครัว      เพื่อน / เพื่อนร่วมงาน      คู่รัก      ญาติ      Other.....

50.ลักษณะของการเดินทาง

ลักษณะการเดินทางในครั้งที่ 1

- จัดการเดินทางเอง      ไปกับบริษัททัวร์ กรู๊ปทัวร์      ซื้อทัวร์บางส่วน ( Option Tour )

ลักษณะการเดินทางในครั้งที่ 2

- จัดการเดินทางเอง     ไปกับบริษัททัวร์ กรุ๊ปทัวร์     ซื้อทัวร์บางส่วน ( Option Tour )

ลักษณะการเดินทางในครั้งที่ 3

- จัดการเดินทางเอง     ไปกับบริษัททัวร์ กรุ๊ปทัวร์     ซื้อทัวร์บางส่วน ( Option Tour )

ลักษณะการเดินทางในครั้งที่ 4

- จัดการเดินทางเอง     ไปกับบริษัททัวร์ กรุ๊ปทัวร์     ซื้อทัวร์บางส่วน ( Option Tour )

51.จำนวนที่พักค้างคืน

จำนวนพักค้างคืนในครั้งที่ 1

- 1 คืน     2 คืน     3 คืน     4 คืน     5 คืน     6 คืนขึ้นไป

จำนวนพักค้างคืนในครั้งที่ 2

- 1 คืน     2 คืน     3 คืน     4 คืน     5 คืน     6 คืนขึ้นไป

จำนวนพักค้างคืนในครั้งที่ 3

- 1 คืน     2 คืน     3 คืน     4 คืน     5 คืน     6 คืนขึ้นไป

จำนวนพักค้างคืนในครั้งที่ 4

- 1 คืน     2 คืน     3 คืน     4 คืน     5 คืน     6 คืนขึ้นไป

สำหรับท่านที่เดินทางท่องเที่ยวต่างประเทศ 5 ครั้งในรอบปี

52.ประเทศที่ท่านเดินทางไปท่องเที่ยว

ประเทศที่ท่านเดินทางไปในครั้งที่ 1:.....

ประเทศที่เดินทางไปในครั้งนี้ 2:.....

ประเทศที่เดินทางไปในครั้งนี้ 3:.....

ประเทศที่เดินทางไปในครั้งนี้ 4:.....

ประเทศที่เดินทางไปในครั้งนี้ 5:.....

### 53. ช่วงเวลาที่ท่านเดินทางท่องเที่ยว

ช่วงเวลาเดินทางท่องเที่ยวในครั้งนี้ 1

มกราคม – มีนาคม     เมษายน – มิถุนายน     กรกฎาคม – กันยายน     ตุลาคม – ธันวาคม

ช่วงเวลาเดินทางท่องเที่ยวในครั้งนี้ 2

มกราคม – มีนาคม     เมษายน – มิถุนายน     กรกฎาคม – กันยายน     ตุลาคม – ธันวาคม

ช่วงเวลาเดินทางท่องเที่ยวในครั้งนี้ 3

มกราคม – มีนาคม     เมษายน – มิถุนายน     กรกฎาคม – กันยายน     ตุลาคม – ธันวาคม

ช่วงเวลาเดินทางท่องเที่ยวในครั้งนี้ 4

มกราคม – มีนาคม     เมษายน – มิถุนายน     กรกฎาคม – กันยายน     ตุลาคม – ธันวาคม

ช่วงเวลาเดินทางท่องเที่ยวในครั้งนี้ 5

มกราคม – มีนาคม     เมษายน – มิถุนายน     กรกฎาคม – กันยายน     ตุลาคม – ธันวาคม

### 54. จุดประสงค์หลักที่เดินทางไปท่องเที่ยวคือ

จุดประสงค์เดินทางท่องเที่ยวในครั้งนี้ 1

ท่องเที่ยวพักผ่อน     สันทันุมุน     เชื่อมญาติ/เพื่อน     เกี่ยวกับธุรกิจ สัมมนา ทำงาน

สัมมนา ทำงาน รวมทั้งท่องเที่ยว  ซื้อปิ้ง รับประทานอาหารท้องถิ่น  Other.....

**จุดประสงค์เดินทางท่องเที่ยวในครั้งที่ 2**

ท่องเที่ยว พักผ่อน  สันนิมุน  เยี่ยมญาติ/เพื่อน  เกี่ยวกับธุรกิจ สัมมนา ทำงาน

สัมมนา ทำงาน รวมทั้งท่องเที่ยว  ซื้อปิ้ง รับประทานอาหารท้องถิ่น  Other.....

**จุดประสงค์เดินทางท่องเที่ยวในครั้งที่ 3**

ท่องเที่ยว พักผ่อน  สันนิมุน  เยี่ยมญาติ/เพื่อน  เกี่ยวกับธุรกิจ สัมมนา ทำงาน

สัมมนา ทำงาน รวมทั้งท่องเที่ยว  ซื้อปิ้ง รับประทานอาหารท้องถิ่น  Other.....

**จุดประสงค์เดินทางท่องเที่ยวในครั้งที่ 4**

ท่องเที่ยว พักผ่อน  สันนิมุน  เยี่ยมญาติ/เพื่อน  เกี่ยวกับธุรกิจ สัมมนา ทำงาน

สัมมนา ทำงาน รวมทั้งท่องเที่ยว  ซื้อปิ้ง รับประทานอาหารท้องถิ่น  Other.....

**จุดประสงค์เดินทางท่องเที่ยวในครั้งที่ 5**

ท่องเที่ยว พักผ่อน  สันนิมุน  เยี่ยมญาติ/เพื่อน  เกี่ยวกับธุรกิจ สัมมนา ทำงาน

สัมมนา ทำงาน รวมทั้งท่องเที่ยว  ซื้อปิ้ง รับประทานอาหารท้องถิ่น  Other.....

**55. ท่านเดินทางท่องเที่ยวเกี่ยวกับใคร**

**ผู้ร่วมเดินทางในครั้งที่ 1**

คนเดียว  ครอบครัว  เพื่อน / เพื่อนร่วมงาน  คู่รัก  ญาติ  Other.....

**ผู้ร่วมเดินทางในครั้งที่ 2**

คนเดียว  ครอบครัว  เพื่อน / เพื่อนร่วมงาน  คู่รัก  ญาติ  Other.....

ร่วมเดินทางในครั้งที่ 3

คนเดียว    ครอบครัว    เพื่อน / เพื่อนร่วมงาน    คู่รัก    ญาติ    Other.....

ร่วมเดินทางในครั้งที่ 4

คนเดียว    ครอบครัว    เพื่อน / เพื่อนร่วมงาน    คู่รัก    ญาติ    Other.....

ร่วมเดินทางในครั้งที่ 5

คนเดียว    ครอบครัว    เพื่อน / เพื่อนร่วมงาน    คู่รัก    ญาติ    Other.....

56. ลักษณะของการเดินทาง

ลักษณะการเดินทางในครั้งที่ 1

จัดการเดินทางเอง    ไปกับบริษัททัวร์ กรุ๊ปทัวร์    ซื้อทัวร์บางส่วน ( Option Tour )

ลักษณะการเดินทางในครั้งที่ 2

จัดการเดินทางเอง    ไปกับบริษัททัวร์ กรุ๊ปทัวร์    ซื้อทัวร์บางส่วน ( Option Tour )

ลักษณะการเดินทางในครั้งที่ 3

จัดการเดินทางเอง    ไปกับบริษัททัวร์ กรุ๊ปทัวร์    ซื้อทัวร์บางส่วน ( Option Tour )

ลักษณะการเดินทางในครั้งที่ 4

จัดการเดินทางเอง    ไปกับบริษัททัวร์ กรุ๊ปทัวร์    ซื้อทัวร์บางส่วน ( Option Tour )

ลักษณะการเดินทางในครั้งที่ 5

จัดการเดินทางเอง    ไปกับบริษัททัวร์ กรุ๊ปทัวร์    ซื้อทัวร์บางส่วน ( Option Tour )

57. จำนวนที่พักค้างคืน

จำนวนพักค้างคืนในครั้งที่ 1

1 คืน     2 คืน     3 คืน     4 คืน     5 คืน     6 คืนขึ้นไป

จำนวนพักค้างคืนในครั้งที่ 2

1 คืน     2 คืน     3 คืน     4 คืน     5 คืน     6 คืนขึ้นไป

จำนวนพักค้างคืนในครั้งที่ 3

1 คืน     2 คืน     3 คืน     4 คืน     5 คืน     6 คืนขึ้นไป

จำนวนพักค้างคืนในครั้งที่ 4

1 คืน     2 คืน     3 คืน     4 คืน     5 คืน     6 คืนขึ้นไป

จำนวนพักค้างคืนในครั้งที่ 5

1 คืน     2 คืน     3 คืน     4 คืน     5 คืน     6 คืนขึ้นไป

# A Studies on the Development of Tourist Attractions in Ayutthaya

Good morning/afternoon Sir/Madam. The Faculty of Regional Development, International Tourism Department at Toyo University Japan is undertaking research about the development tourist attractions of Ayutthaya province and to enhance the experience of foreign visitors to Ayutthaya. Can you spare five minutes to answer the survey questions? Because your involvement will be invaluable to us.

Faculty of Regional Development, International Tourism Department of Toyo University, Japan

Graduate School : Mr. Krairerk Klaysikaew

## Section : 1 Your General Information

Date : \_\_\_\_\_

- (1) Sex             Male         Female
- (2) Age             Below 19 years old         20-29 Years old         30-39 Years old  
                        40-49 Year old         50-59 Year old         Over 60 Years old
- (3) Religion       Buddhism     Christianity     Islam         Other \_\_\_\_\_
- (4) Education     Secondary/high School     Diploma     Bachelor Degree  
                        Master Degree     Other (Please indicate) \_\_\_\_\_
- (5) Occupation    Business Owner         Government Service         Office Worker  
                        Private Employee         Agriculturalist         Student  
                        Housewife                 Unemployed                 Retired  
                        Other \_\_\_\_\_
- (6) Where are you come from? \_\_\_\_\_
- (7) Which source of information did you use before the visit?  
                        NewsPapers     Magazine     TV         Radio         Guidebook  
                        Tour Company         Brochures     Mail         Internet  
                        Friends         Other \_\_\_\_\_
- (8) How many times have you been to overseas?  
                        First Time     1 Times         2 Times         More than 3 times
- (9) What kinds of tourism sources do you like to visit in general? (Please fill in a number such as No.1 for the most, No.2 for the second\_\_\_\_\_)
- \_\_\_\_\_ Historical/Cultural/Ancient/Religious tourism sources  
 \_\_\_\_\_ Natural tourism sources  
 \_\_\_\_\_ Sea/Diving tourism sources  
 \_\_\_\_\_ Sport/recreational tourism sources  
 \_\_\_\_\_ Shopping/Gourment tourism sources  
 \_\_\_\_\_ Health /Related/Spa tourism sources  
 \_\_\_\_\_ Eco-tourism sources  
 \_\_\_\_\_ Other \_\_\_\_\_

## Section : 2 Data about your travelling experience in Ayutthaya

(1) With whom did you come with?

- Alone     Family     Friends     With Company     With tour group  
 Other \_\_\_\_\_

(2) What you purpose of the trip.

- Travel     Honeymoon     Family Trip     Business Trip  
 School Trip     Visit Relative     Visit Friend     Other \_\_\_\_\_

(3) Duration of your current visit. How do you travel?

- By Guide     By Friend     By Tourim Information Centre     By Signs on site  
 By Guide Book     Other \_\_\_\_\_

(4) How many times have you been to Ayutthaya

- First Time     2 Times     3 Times     4-5 Times     More than 6 Times

(5) If which to say Ayutthaya, What do you think about here? ( You can choose more than one answer)

- World Heritage     Ancient town and temple     Palace     Old city of Thai  
 Large statue of Buddha     Elephant     Buddha head surrounded by roots  
 Gourmet · Shopping     Old foreigner village     Tuk-Tuk  
 River of life traditions     Songkarn Festival     River Cruises  
 Floating market     Other \_\_\_\_\_

(6) From Bangkok how do you come to Ayutthaya?

- Car     Bus     Tour Bus     Train     Rented car     Ship  
 Taxi     Other \_\_\_\_\_

(7) Duration of you visit Ayutthaya site what transportation used for travelling?

- Car     Bus     Tour Bus     Rented car     Ship  
 Bicycle rental     Tuk Tuk     Other \_\_\_\_\_

(8) Please choose the tourism attraction of Ayutthaya do you like the 3 most?(Please fill in a number such as No.1 for the most, No.2 for the second and No.3 for the third )

- |                  |                       |                      |
|------------------|-----------------------|----------------------|
| Old Palace       | Temple                | Ancient site         |
| Museum           | Old foreigner village | Floating market      |
| Elephant corral  | Gourment · Shopping   | Cutural · History    |
| Festival · Event | Thai massage          | Recreation · Related |
| Tuk-Tuk          | Tradition thai life   | Other _____          |

(9) How long do you plan go to Ayutthaya?

- Day Trip     1Night     2 Nights     More than 3 Nights

(10) Which type of accommodation do you have?

- Hotel     Resort     Home Stay     Friend/Relative  
 Guest House     Other \_\_\_\_\_

(11) Please answer for all your consumption expenditure of visit Ayutthaya site. ( Baht or US Dollar)

Food and beverages \_\_\_\_\_ Souvenir \_\_\_\_\_ Accommodation fee \_\_\_\_\_

(12) In the future, Do you think will ever come back again to visit Ayutthaya? ( Please mark  within the  )

Certainly to come	If I can,will come	Neither nor to said	didn't come	Certainly didn't come
1	2	3	4	5

(13) For the Question (13) if you choose the answer 1 and 5 . Why do you choose that? Please write the reason.

---



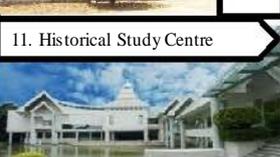
---



---

(14) Would you recommend there places to your friends?     Yes     No

**Section :3 Which tourist attractions of Ayutthaya have you visited ? Please mark  within the  of picture**

<p>1. The Royal Palace</p>  <input type="checkbox"/>	<p>2. Wat Phra Sri Sanpetch</p>  <input type="checkbox"/>	<p>3. Vihara Mongkhlorphit</p>  <input type="checkbox"/>	<p>4. Wat Phra Ram</p>  <input type="checkbox"/>
<p>5. Wat Mahathat</p>  <input type="checkbox"/>	<p>6. Wat Ratchaburana</p>  <input type="checkbox"/>	<p>7. Wat Suwandararam</p>  <input type="checkbox"/>	<p>8. Wat Thammikaraj</p>  <input type="checkbox"/>
<p>9. Wat Lokayasatta</p>  <input type="checkbox"/>	<p>10. Tourist Information center</p>  <input type="checkbox"/>	<p>11. Historical Study Centre</p>  <input type="checkbox"/>	<p>12. Chao Sam Phraya National Museum</p>  <input type="checkbox"/>
<p>13. Chantarakasem National Museum</p>  <input type="checkbox"/>	<p>14. Chao Phom Market</p>  <input type="checkbox"/>	<p>15. Wat Chaiwattanaram</p>  <input type="checkbox"/>	<p>16. Wat Na Phra Meru</p>  <input type="checkbox"/>
<p>17. Wat Phananchering</p>  <input type="checkbox"/>	<p>18. Wat Yai Chaimongkol</p>  <input type="checkbox"/>	<p>19. Wat Phu Khao Thong</p>  <input type="checkbox"/>	<p>20. Wat Phutthai Sawan</p>  <input type="checkbox"/>
<p>21. Wat Maheyong</p>  <input type="checkbox"/>	<p>22. Wat Kudidao</p>  <input type="checkbox"/>	<p>23. Japanese Settlement</p>  <input type="checkbox"/>	<p>24. Portugueses Settlement</p>  <input type="checkbox"/>
<p>25. Bang Pa-In Palace</p>  <input type="checkbox"/>	<p>26. Wat Niwet Thammaprawat</p>  <input type="checkbox"/>	<p>27. The Bangsai Arts &amp; Crafts Village</p>  <input type="checkbox"/>	<p>28. Klong Sawan Floating Market</p>  <input type="checkbox"/>

**Section 4 : Your opinion and your satisfaction with the attractions of Ayutthaya**

	Item	Level of Satisfaction				
		Excellent	Good	Average	Below Average	Poor
1	History·Cultural·Temple of World Heritage site					
2	Attractions Access					
3	Toilet ·Waste and Water of organize					
4	Safety while travelling					
5	Scenic of attractions spots					
6	Brochure ·Interpretative signs on site					
7	Community (The local people of tradition activities life)					
8	Hospitality of local people					
9	About attraction entrance fee and exhibition of Museum					
10	Rest area of Tourist Attractions					
11	The Accommodation ·restaurant of service and cost					
12	Elephant corral and Other event of Tourit Activities					

Could you please make some suggestions suitable for the development, promotion, and problem solution of the tourism in Ayutthaya?

---



---



---



---



---



---

Thank you so much for your time and assistance.



**Section :2. 今回のタイ・アユタヤの訪問に関してお伺います。**

- (1) 旅行同伴者：  一人     家族     友人・知人     職場・学校  
 地域等の団体     その他 \_\_\_\_\_
- (2) 旅行目的をお答えください。  
 観光旅行     新婚旅行     家族旅行     友人訪問     業務出張     修学旅行  
 その他 \_\_\_\_\_
- (3) 訪問時には、何を利用して、情報収集しますか？  
 ガイド     ガイドブック     観光情報センター     地元の知人  
 観光地の標記    その他： \_\_\_\_\_
- (4) これまで、何回アユタヤを訪れたことがありますか？  
 1 回     2 回     3 回     4-5 回     6 回以上
- (5) アユタヤと言えば、何を思い浮かべますか？（あてはまるもの全てにチェックしてください）  
 世界文化遺産     寺院・遺跡     王宮     タイの古都  
 大仏     象に乗る体験     木の根にうずれた仏像  
 料理・買い物     日本人町跡（山田長政）     トウクトゥク     水上マーケット  
 川の自然とのふれあい     ソンクラーン祭     リパークルーズ  
 その他 \_\_\_\_\_
- (6) バンコクからアユタヤにくるまでの、主な利用交通手段をお答えください。  
 自動車     路線バス     ツアーバス     電車     レンタカー     遊船  
 タクシー     その他 \_\_\_\_\_
- (7) アユタヤの中で利用した主な交通手段をお答えください。  
 自動車     路線バス     ツアーバス     レンタカー     船  
 レンタサイクル     トウクトゥク     その他： \_\_\_\_\_
- (8) アユタヤを訪れた来訪目的のうち最も重視したものから最大3つを記入してください。（数字で順番を記入下さい）
- |               |              |                 |
|---------------|--------------|-----------------|
| _____ 宮殿      | _____ 寺院     | _____ 古代遺跡      |
| _____ 博物館     | _____ 日本人町跡  | _____ 水上マーケット   |
| _____ 象に乗る体験  | _____ 料理・買い物 | _____ 歴史・文化     |
| _____ 祭り・イベント | _____ タイマサージ | _____ レジャー施設    |
| _____ トウクトゥク  | _____ コミュニティ | _____ その他 _____ |
- (9) アユタヤ訪問の日程は？  
 日帰り     1泊旅行     2泊旅行     3泊以上
- (10) アユタヤに泊まる際、ご利用する宿泊施設は？  
 ホテル     リゾート     ホームステイ     友人の宅  
 ゲストハウス     その他 \_\_\_\_\_
- (11) アユタヤ周辺における全消費額をお答えください。（パーツあるいは円）  
 飲食代 約 \_\_\_\_\_ お土産代 約 \_\_\_\_\_ 宿泊代 約 \_\_\_\_\_
- (12) アユタヤへの再訪意向を 5 段階でお答えください（該当する1つに○印）。
- |       |         |           |       |         |
|-------|---------|-----------|-------|---------|
| 絶対来たい | できれば来たい | どちらとも言えない | 来たくない | 絶対来たくない |
| 1     | 2       | 3         | 4     | 5       |
- (13) 上記の質問により 1 と 5 をお答えいただいた方は、その理由をご記入ください。  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_
- (14) 帰国後、あなたは友人などにアユタヤ観光地のことをお勧めしますか？     はい     いいえ

Section :3 どのアユタヤ観光スポットを訪れたことがありますか？  
該当する □ に✓印

1.王宮跡 	2.シーサンペット寺 	3.モンコンボピット大仏殿 	4.ラマ寺 
5.マハータート寺 	6.ラーチャブーラナ寺 	7.スワンナダーラーラーム寺 	8.タミカカート寺 
9.ローカヤスター寺 	10.観光広報センター 	11.アユタヤ歴史研究センター 	12.チャオサームプラヤー博物館 
13.チャンタラカセム博物館 	14.チャオボーム・マーケット 	15.チャイワッタナーラーム寺 	16.ナーブラメン寺 
17.パナンチューン寺 	18.ヤイ・チャイモンコン寺 	19.ブーカオトン寺 	20.ブッタイスワン寺 
21.マヘーヨン寺 	22.クディーダーオ寺 	23.日本人町跡 	24.ポルトガル人町跡 
25.バン・パイン宮殿 	26.ニウェート・タンマプラワット寺 	27.バンサイ民芸文化村 	28.クローン・サーファウ水上マーケット 

**Section : 4 アユタヤの観光スポットに関して満足度をお伺います**

	項目	満足度				
		満足	やや満足	どちらとも満足	やや不満足	不満足
1	世界遺産などの文化・歴史・寺院					
2	観光地のアクセス・交通機関					
3	トイレ・ゴミ・水などの衛生面					
4	観光地の安全的					
5	観光スポットの景観・雰囲気					
6	情報案内板やパンフレットの充実					
7	コミュニティ (地元住民の生活感)					
8	地元人のおもてなし					
9	観光施設の入場料・博物館の展示など					
10	観光スポットの休憩所					
11	宿泊施設・レストランの数・サービス・コスト					
12	象に乗る体験・お祭りなどの観光活動					

アユタヤの魅力アップのために、ご意見がありましたらご記入ください。

---



---



---



---



---



---



---

・・・・アンケート調査にご協力をいただき、誠にありがとうございます。・・・・

## แบบสอบถามเกี่ยวกับการพัฒนาการท่องเที่ยวของจังหวัดพระนครศรีอยุธยา

แบบสอบถามนี้เป็นแบบสอบถามเพื่อใช้เป็นข้อมูล ในการประกอบการเขียนวิทยานิพนธ์ เรื่องการพัฒนาและส่งเสริมการท่องเที่ยวของจังหวัดพระนครศรีอยุธยา ผู้วิจัยหวังเป็นอย่างยิ่งว่า จะได้รับความร่วมมือจากท่านเป็นอย่างดีในการตอบแบบสอบถามในครั้งนี้

บัณฑิตวิทยาลัย สาขาการท่องเที่ยวระหว่างประเทศ มหาวิทยาลัยโคโย ประเทศญี่ปุ่น  
นายไกรฤกษ์ คล้ายสีแก้ว

### Section : 1. ข้อมูลทั่วไปของนักท่องเที่ยว

วัน/เดือน/ปี

(1) เพศ :  ชาย  หญิง

(2) อายุ :  ต่ำกว่า 19 ปี  20-29 ปี  30-39 ปี  40-49 ปี  50-59 ปี

60-69 ปี  70 ปีขึ้นไป

(3) การศึกษา :  ปริญญาโท  ปริญญาตรี  อนุปริญญา  ปวช-ปวส

อื่น ๆ

(4) อาชีพ :  ธุรกิจส่วนตัว  ข้าราชการ  พนักงานบริษัท  เกษตรกร  นักเรียน-นักศึกษา

รัฐวิสาหกิจ  เกษียณอายุ  รับจ้าง  อื่น ๆ

(5) ภูมิลำเนา

(6) ในการตัดสินใจเดินทางท่องเที่ยว ท่านใช้ข้อมูลจากแหล่งใดในการเลือกสถานที่ท่องเที่ยว

หนังสือพิมพ์  นิตยสาร  โทรทัศน์  วิทยุ  หนังสือคู่มือท่องเที่ยว

บริษัททัวร์  จากคำบอกเล่า  อี-แมล์  Internet

ผ่านพบโฆษณาการท่องเที่ยว  อื่น ๆ

(7) ท่านเคยเดินทางไปท่องเที่ยวยังต่างประเทศกี่ครั้ง

1 ครั้ง  2 ครั้ง  3 ครั้งขึ้นไป  ไม่เคย

(8) ท่านมีความสนใจในการท่องเที่ยวประเภทใดบ้าง ( กรุณาใส่ตัวเลขเรียงลำดับจากความสนใจมากที่สุดไปยังน้อยสุด)

ประวัติศาสตร์และวัฒนธรรม

อาหารและการซื้อของ

ธรรมชาติ

สุขภาพ,สปา,สถานเสริมความงาม

ทะเล,ชายหาด

การท่องเที่ยวเชิงนิเวศ

กิจกรรมด้านกีฬา

อื่น ๆ

## Section :2. ข้อมูลเกี่ยวกับการเดินทางมาเที่ยวจังหวัดพระนครศรีอยุธยา

(1) เดินทางมากับใคร :  คนเดียว  ครอบครัว  เพื่อน,คนรู้จัก  เพื่อนร่วมงาน,โรงเรียน  
 คณะทัวร์  อื่น ๆ \_\_\_\_\_

(2) จุดประสงค์ในการเดินทางมาในครั้งนี้  
 ท่องเที่ยว  สันนิมุน  เยี่ยมเพื่อน  เยี่ยมญาติ  ทำบุญไหว้พระ  
 อื่น ๆ \_\_\_\_\_

(3) ขณะเดินทางท่องเที่ยวในอยุธยา ท่านใช้ข้อมูลจากไหนในการท่องเที่ยว  
 ไกด์  คู่มือท่องเที่ยว  คนรู้จักในพื้นที่  
 ป้ายตามสถานที่ท่องเที่ยวต่าง ๆ  ศูนย์ข้อมูลการท่องเที่ยว  อื่น ๆ \_\_\_\_\_

(4) ท่านเคยมาเที่ยวจังหวัดพระนครศรีอยุธยากี่ครั้ง  
 1 ครั้ง  2 ครั้ง  3 ครั้ง  4-5 ครั้ง  6 ครั้งขึ้นไป

(5) ถ้าพูดถึงจังหวัดพระนครศรีอยุธยา ท่านจะนึกถึงอะไรบ้าง  
 เมืองมรดกโลก  วัด,โบราณสถาน  พระราชวัง  เมืองหลวงเก่าของไทย  
 พระพุทธรูป  การช้อปปิ้ง  เสียรพระพุทธรูปที่ถูกรากไม้พันรอบ  
 อาหาร,การชื้อของ  หมู่บ้านชาวต่างชาติ  รถตุ๊กตุ๊ก  
 แม่น้ำและวิถีชีวิตริมฝั่งน้ำ  ประเพณีสงกรานต์  ล่องเรือ  
 ตลาดน้ำ  อื่น ๆ \_\_\_\_\_

(6) ท่านใช้พาหนะใดในการเดินทางมายังจังหวัดพระนครศรีอยุธยา  
 รถยนต์  รถท่องเที่ยว  รถทัวร์  รถไฟ  รถเช่า  
 รถแท็กซี่  เรือ  อื่น ๆ \_\_\_\_\_

(7) ท่านใช้พาหนะใดในขณะที่เดินทางท่องเที่ยวภายในแหล่งท่องเที่ยวของจังหวัดพระนครศรีอยุธยา  
 รถยนต์  รถสองแถว  รถทัวร์  รถเช่า  เรือ  
 รถจักรยานให้เช่า  รถตุ๊กตุ๊ก  อื่น ๆ : \_\_\_\_\_

(8) แหล่งท่องเที่ยวหลักที่คุณให้ความสำคัญในการเดินทางมาท่องเที่ยวอยุธยาในครั้งนี้คือ ( กรุณาใส่ตัวเลขตามลำดับความสำคัญมา 3 ลำดับ )  

พระราชวัง	วัด	เมืองเก่า,โบราณสถาน
พิพิธภัณฑ์	หมู่บ้านชาวต่างชาติ	ตลาดน้ำ
ช้อปปิ้ง	อาหาร,ชื้อของ	ประวัติศาสตร์
เทศกาล	นวดแผนโบราณ	สถานพักผ่อนหย่อนใจ
รถตุ๊กตุ๊ก	วิถีชีวิตชุมชน	อื่น ๆ

(9) ท่านใช้ระยะเวลาในการท่องเที่ยวจังหวัดพระนครศรีอยุธยาเป็นเวลากี่วัน  
 1 วัน  2 วัน  3 วันขึ้นไป

(10) หากท่านพักค้างคืนในจังหวัดพระนครศรีอยุธยา ประเภทของแหล่งที่พักคือ  
 โรงแรม  โฮมสเตย์  บ้านญาติ,เพื่อน,คนรู้จัก  เกสต์เฮาส์  
 อื่น ๆ \_\_\_\_\_

(11) ท่านใช้ค่าใช้จ่ายในการท่องเที่ยวภายในจังหวัดพระนครศรีอยุธยาเป็นจำนวนเงินเท่าใด  
 ค่าอาหารและเครื่องดื่ม \_\_\_\_\_ ของที่ระลึก \_\_\_\_\_ ค่าที่พัก \_\_\_\_\_

(12) เมื่อท่านเดินทางกลับจากการท่องเที่ยวอยุธยาในครั้งนี้แล้ว ในอนาคตท่านจะเดินทางกลับมาท่องเที่ยวอยุธยาอีกหรือไม่

กลับมาแน่นอน	ถ้าเป็นไปได้จะมา	ไม่แน่ใจ	ไม่มา	ไม่มาแน่นอน
1	2	3	4	5

(13) จากคำถามที่ 12 หากท่านเลือกตอบคำตอบที่ 1,2,4และ5 เหตุใดท่านจึงเลือกตอบเช่นนั้น กรุณาเขียนเหตุผล

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

(14) ท่านจะแนะนำเพื่อนหรือคนรู้จักให้เดินทางมาท่องเที่ยวจังหวัดพระนครศรีอยุธยาหรือไม่  
 แนะนำ  ไม่แนะนำ

Section :3 สถานที่ท่องเที่ยวโดบ้างของจังหวัดพระนครศรีอยุธยาที่ท่านได้ไปเยี่ยมชม กรุณา  
เขียนเครื่องหมาย  ลงใน  ของรูปภาพ

			
1. พระราชวังโบราณ	2. วัดพระศรีสรรเพชญ์	3. วิหารพระมงคลบพิตร	4. วัดพระราม
			
5. วัดมหาธาตุ	6. วัดราชบูรณะ	7. วัดสุรรดารามราชวรวิหาร	8. วัดธรรมมิกราช
			
9. วัดโลกยสุธา	10. ศูนย์ข้อมูลการท่องเที่ยว	11. ศูนย์ศึกษาประวัติศาสตร์	12. พิพิธภัณฑ์สถานแห่งชาติเจ้าสามพระยา
			
13. พิพิธภัณฑ์สถานแห่งชาติจันทรมม	14. ตลาดเจ้าพรหม	15. วัดไชยวัฒนาราม	16. วัดหน้าพระเมรุ
			
17. วัดพนัญเชิงวรวิหาร	18. วัดใหญ่ชัยมงคล	19. วัดกุฎีทอง	20. วัดเทพไธสวรรย์
			
21. วัดมเหยงค์	22. วัดกุฎีดาว	23. หมู่บ้านญี่ปุ่น	24. หมู่บ้านโปรตุเกส
			
25. พระราชวังบางปะอิน	26. วัดนิเวศธรรมประวัติ	27. ศูนย์ศิลปาชีพบางไทร	28. ตลาดน้ำ

**Section 4 : เกี่ยวกับความพึงพอใจและความคิดเห็นที่มีต่อการท่องเที่ยวของจังหวัด  
พระนครศรีอยุธยา**

	หัวข้อ	ระดับความพึงพอใจ				
		ดีมาก	ดี	ปานกลาง	น้อย	แย่มาก
1	ความเป็นมรดกโลก,ประวัติศาสตร์,แหล่งโบราณสถาน					
2	ความน่าสนใจและสะดวกในเส้นทางการเข้าถึงแหล่งท่องเที่ยว					
3	การจัดการเกี่ยวกับห้องน้ำ,ขยะและความสะอาด					
4	ความปลอดภัยในการเที่ยวชม					
5	ทัศนียภาพของแหล่งท่องเที่ยว					
6	เอกสารคู่มือการท่องเที่ยว,รายละเอียดของป้ายบอกทางต่าง ๆ ความรู้ของมัคคุเทศก์					
7	บรรยากาศวิถีชีวิตความเป็นอยู่แบบดั้งเดิมของคนในท้องถิ่น					
8	การต้อนรับและเป็นกันเองของคนในท้องถิ่น					
9	ราคาบัตรค่าเข้าชมสถานที่ท่องเที่ยวรวมทั้งการจัดแสดงนิทรรศการต่าง ๆ ในพิพิธภัณฑ์					
10	พื้นที่พักระหว่างท่องเที่ยว					
11	การบริการ,ราคาของ โรงแรม,ร้านอาหาร,ร้านค้า					
12	กิจกรรมในการท่องเที่ยว อาทิ การขี่ช้าง,การแสดงแสงสีเสียง,นั่งรถราง เป็นต้น					

เพื่อการพัฒนาและส่งเสริมการท่องเที่ยวของจังหวัดพระนครศรีอยุธยาให้ดียิ่งขึ้นต่อไปในอนาคต หากท่านมีความคิดเห็นหรือข้อเสนอแนะ กรุณาแสดงความคิดเห็นของท่าน เพื่อเป็นประโยชน์ต่อจังหวัดพระนครศรีอยุธยาและการทำวิจัยในครั้งนี้

---



---



---



---



---

ขอขอบพระคุณท่านเป็นอย่างสูงที่ให้ความร่วมมือในครั้งนี้